
異世界魔法学園奮闘記

月野 針鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界魔法学園奮闘記

【Nコード】

N2107I

【作者名】

月野 針鼠

【あらすじ】

異世界から召喚された……と言うよりも迷い込んできた少年がいた。その少年は、自身の持つ不幸体質によりさまざまな事件に巻き込まれながらも、自分から首を突っ込んで少年は己の剣術で解決していく……。

序話 不幸は世界を超えた

殆ど日が差し込まないほど木が鬱蒼と茂っている森に、男子高校生が迷子になっていた。

黒髪黒眼のどちらかといえば美形に入る顔立ちで、土まみれの力ツターシャツと同じく土まみれの黒いズボンを装着した少年だ。少年の名は御坂紗月^{みさか ちづき}。

どついう経路で迷ったかは後々語るとして、ずいぶんと不思議な光景だろう。

しかし、こんないかにもな雰囲気の森で迷っている紗月の顔は絶望になど満ちていなかった。

ものともしていない様だ。それは相当おかしいことだが。

「転落して余計変なところに出ちまったな」

歩きながら紗月が少々困った様な顔をして、呟いた。

ちなみに、紗月がこんな真つ暗な森にいたのは一応理由があった。

紗月が親戚の家から帰宅中のこと。

ひと気は全くないものの、しっかり整備された山道を通っていたのだが、何かを踏んで足を取られた紗月はバランスを崩して転落。

落ちている最中にちょうど近くにあった枝を何とか掴んだが、なんとその木は腐りかけ。あつさりと枝は折れ、勢いも削がれる事無く転落し続けた結果、勢いのまま大樹に背を打ち付けて嘔吐^{ダイナミック・リバーズ}。

気が付いたら日が殆ど差していない真つ暗な森にいたのだった。

そして、今に至る。

「何でこんな幸薄少年なんだろうな俺は。まあ、どつかの借金執事よりはましだと思うけど」

草を掻き分けて進んでいたとき、開けた場所に出た。その先には、光がある。

比喻などではない。お天道様の光だ。

やっと森を出たぞー！と走る。が、それを邪魔する奴が。

2メートル以上の巨大な森の熊さんだ。

「どけええええ！」

紗月は走っている勢いを殺さず、熊を殴る。

ズン！という大きな音が鳴り、巨大な熊の体が宙に浮いた。吹き飛ばされ、飛んできた熊の重量と勢いに木は耐えられず複数折れた。熊はピクピクとしている。

光に向かって走る紗月の姿が獣に見えたとか見えなかったとか。

森を出るとなんと威圧的な建物が現れた。

静養建造物特有の雰囲気纏っていて、それは城のようだった。

レンガやコンクリートは綺麗に配置され美しい模様を表している。

しかし、紗月は見た目よりも大きさに威圧感を感じていた。

それが持つ威圧感に何も言えなくなっていると、設置してあったスピーカーからけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

次いで機械音がスピーカーから聞こえた。

「侵入者を確認。侵入者を確認」

（侵入者？それって誰の事ですか？ああ……空が……青いな……）

紗月は逃げることもしないで、ただ、引きつった笑みを浮かべ、空を仰ぎながら現実逃避していた。

勿論、何の抵抗もしないで捕まった。

先ほどまで取調室のようところで取調べを受けていた紗月だが

30分以上のやり取りで無実が証明された。まあ、最後はかなりやつけたのだが。

因みに、紗月が受けた質問とその回答の例を挙げるところなる。

問1。どうやってこの学園に来たのか。

回答。さあ？山道から転落したら森にいました。と言うか此処学校だったんですか。

問2。得意な魔法は？

回答。魔法？何ソレ美味しいの？

問3。出身は？

回答。日本です。と言うか此処どこですか？アメリカですか？

全てこんな感じで、紗月よりも訊く側の人間が疲れたらしい。最後はあっさりと「無実」と言って取調室を出て行った。

取調べ後、この学園の理事長に呼ばれていることを伝えられた紗月は、伝えてくれた人に理事長室へ案内してもらっている。

建物の中は清潔感があり、尚且つ広い。

そして、理事長室へ到着し中へ入ると、まだ二十代で通用する外見の青髪赤眼の女性が執務机に座って待っていた。

「あなたが侵入者？」

「はい。まあ、侵入した覚えはありませんけど」

「報告書見たけど……。酷いわねこれ」

理事長は、机に置いてあった紙をひらひらと振りながら言った。

「どこがですか？全て正直に答えましたが」

「名前以外全部酷いわよこれ。『侵入の動機。なし』『得意な魔法。魔法を知らない』『出身国。日本』」

紙に書いてあることを理事長が読み上げた。

「全然酷くないじゃないですか」

「酷いわ。特に出身国と、魔法を知らないっていうあたりが」

「日本は日本ですし。知らないものは知らないんですけど」

「日本ねえ……。まあ、そんなことはどうでもいいわ。あなた、此処で学ぶ気はない？」

「ないです。家に帰らないといけませんし」

「そう。でも、あなたが思っている通り、この世界とあなたの世界は異なるはずよ。現にこの世界に日本なんて国は存在しないし、魔法はこの世界の全ての人間が常識として知っているけれど、あなたは知らない」

「……………」

紗月の表情が少し曇った。

「でも、うちの学園に所属すれば、帰れるかもしれないわよ」

「どういうことですか？」

「それは所属の意思を聞いてからよ。一応極秘の研究だから」

「……分かりました。この学園に転入します」

紗月は少し迷ったようだが、口を開いた。

「さつきも言ったけどこれは極秘のものだから他言無用でお願いね。最初に……………」

とても長い話だったので割愛し、要約させていただく。

- 1 ・特殊な魔法陣を用意。
- 2 ・それに空間に亀裂が入るほど膨大な魔力を魔法陣に蓄える。
- 3 ・魔法陣を壊し、蓄えられた魔力を流す。
- 4 ・空間に亀裂が入る。
- 5 ・魔力は水と同じように一定の状態になろうとするため、必然

的に魔力が無い空間へと繋がる。おそらくそれが紗月のいた世界。

6 .そして、帰れる。
と言う感じだ。

「待ってください。一定量の魔力を溜めるといつても、それってどれくらいかかるんですか？」

「大体一年よ」

「一年も!？」

紗月が驚愕した。単位が取れない＝留年。当然留年したい人間などいない。驚愕するのは当たり前だ。

「何かあるの？」

「留年……」

「うーん……それは、仕方ないかもね」

「そう……ですね……では、失礼しました」

「待って。やらなきゃならないことがあるのよ？ 転入のための準備とか」

その後、紗月は転入のための準備をしていた。

ちなみにお金は、お金が入っていると云う黒いカードを理事長からもらったのだがどれくらいあるかは確認していない。

「これで、一通りの準備は終わりね。じゃあまた明日」

「はい。じゃあ寮に行ってきます」

そして、寮の部屋の鍵を渡された紗月は寮へと向かった。勿論場所を教えてもらってからだ。

寮は学年ごとに分けられていて、第六学生寮が一年生の寮である。

学園から15分ほど歩いて、寮（というよりも超巨大マンション）の部屋に着くと、広々とした部屋が広がっていた。

キッチン、風呂、トイレが付いている。そして、そこらのマンション顔負けの広さ。良く見れば、冷蔵庫やベッドもある。ついでに言うとテレビやパソコンらしきものもある。

そして、あるものが目に入った。

壁に端末のようなものがあり、カードの差込口がある。

理事長にもらったカードを差し込んで残り残高を見ると、七
十万^{千ドル}eと書いてあった。

理事長……ありがとうございます！七十万はちょっと多い気がするけど。

とりあえずこの場にいない理事長に心の中で礼を言って、寮で静かに過ごした。

本日の驚き。

不幸は世界を超えるらしい。

この国では日本語が使用されるらしい。テレビも日本語表記だった。

序話 不幸は世界を超えた（後書き）

ええ。お久しぶりです。

今作は、長い間構想を練っていたので、設定が曲げられることはないと思います。

では、感想評価よろしくお願いします。

一話 学園生活(前書き)

感想・評価をお願いします。

一話 学園生活

転入生のため、早めに寮を出た俺は、学園へと来た。

職員室に向かい、担任の教師から説明を受けた。

ちなみに担任は若い女性で名前はカルナ・ベルリウス。

行事は大きなものと、学園祭、体育祭など。

学力は普通の学園と同等か少し上というレベルだが、魔法学に力を入れており魔法においては屈指の学園らしい。

生徒数は一学年あたり五百人近い。そのせいか、クラスは一学年あたり十二組。

校舎は第一、第二、第三、特別の四つ。

ちなみに職員室、理事長室、取調室があるのは特別校舎。

闘技場、講堂、体育館、などの施設もある。ただ生徒数が生徒数なため、かなり大きいそうだ。

一通りの説明を受けたところでカルナ先生と教室へと向かった。

第一校舎四階。

1・Eと書かれたプレートが付いているドアの前で紗月は待機していた。

暫く、教室で何か喋っているのを聞いた後、「どうぞ」という声が聞こえたので、俺は教室に入った

ちよつと視線が多いし痛いんですが。俺は頬が引きつるのを何とか抑えながら自己紹介を始めた。

「御坂紗月です。この学園には来たばかりで分からないことが多々ありますがよろしくお願いします」

クラスメイトの反応を見る限りでは悪くはなかったようだ。

「じゃあ、窓際の一番後ろの空いた席に座ってください」

窓際一番後ろの席を示しながらのそう言われ、俺はその席に座った。その席に到達するまでとんでもなく痛い視線を浴びていた。

HRが終わると、転校生にはお決まりの質問タイムがやって来た。

「好みのタイプは？」

「好きな食べ物は？」

「どうしてこの学園に？」

「どこに住んでんの？」

「犬と猫どっちが好き？」

「放課後空いてる？」

「小さい頃のあだ名は？」

「これでどうやって戦えばいいんだ!？」

途中から意図が掴めない質問になってんだけど。つーか最後の訳分かんない。

「秘密だ」

「とりあえず甘すぎないやつ」

「それは言えん」

「寮」

「猫」

「さっちゃんだっけ？」

「空いてない」

「今できる最善を尽くせ」

という感じで降りかかってきた質問には適当だが十五字以内で簡潔に答えていった。

「はあ……はあ……」

疲れた。どうしたらあんなに質問が湧いて出てくるんだ。何なん
だろこのクラス。

俺が机に突っ伏していると、心優しい声をかけてくれた人が。

「大丈夫？御坂君」

「微妙なところだな……」

そう言っつて顔を上げると、金髪のショートカットに青い瞳。頭には赤いカチューシャをつけている少女だった。一目ではかなり可愛いと思う。

「一限から移動なんだけど、一緒に行く？」

「そうさせてもらえると嬉しいが……いいのか？」

「せっかく誘ってるんだから「いいのか？」なんて聞かない！」

「は、はい」

「分かればいいの。じゃ、行こう。あ、名前言っつてなかったね。私はアリア・ミュレット。普通にアリアっつて呼び捨てにしてね」

そう言っつて、俺がよろしくと答える前に、腕を引っ張られて連行された。腕が痛い！凄く痛い！

魔法実技の授業。

とりあえず魔法を教えてもらったのだが、クラスメイトのほとんどが火の矢だとか水の槍とかを出していた。

しかし、俺は木刀、竹刀、刀、薙刀、サーベルなどの武器しか出せなかった。何故武器だけなんだろう？先生に聞いたものの、召喚魔法の一種だそうだ。

魔法学。

隣の席に座っている、ハルという黒髪黒目の日本人っぽい男子に色々教えられながら授業を受けた。

魔法の属性は、大まかに分けると火、水、風、土、光、闇の六属性。

火、水、風、土、は四大元素。光、闇は二大源素と呼ばれている。まだ魔法を使えない俺にとっては少々関係の無い話だが、魔法はその場の環境によって威力が上がったり衰えたりするらしい。

例えば、雨の日には、水の魔法の威力が上がり、火の魔法は使えない。

と言うものだ。

どの属性にも当てはまらない魔法がある。

身体強化、身体変化、物質操作、物質変化などだ。その他にもたくさんあるが、覚えきれない。

更に特殊なのが召喚魔法。

召喚魔法は素質と努力が必要らしい。

精霊、使い魔、守護獣などを召喚できる。ただ、俺のように無機物を出すのは異例らしい。

魔法についての授業はこんなものだった。

魔法関連の授業だけで午前中の授業を終え、午後の授業も終えた後、アリアが寮に住んでいると知った俺はアリアと一緒に帰ることにした。帰るといつても、商店街に行くのだが。

ハルも誘ってみたのだが、予定があるらしく断られた。

ちなみに、俺の部屋は0506号室で、アリアの部屋は0505号室。互いにお隣さんだと知ったときはかなり驚いた。

ハルを誘って断られた後は、「早く行こう！」と言って腕を引っ張られてアリアに連行された。

そして、商店街に着いたときにやっと気付いたのか、すごい勢い

でアリアに謝られていた。

「ごめん」

「いや。もういいから」

本日二度目となり、腕は赤くなっていた。かなり強く握られてたな。

とりあえず謝るのをやめたアリアに何をするのかと聞いたが、うん。と唸り始めた。

どうやら何をするか決めてなかったらしい。

そして、思いついたように手をポンと叩き、言った。

「御坂君ってどれくらい服持ってる？」

「あまり持ってない」

本当は学生ズボンとカッターシャツしかないが。

「じゃあ、服買いに行こうよ。私も暇つぶしになるし」

そう言ってアリアは眩しいくらい笑顔を見せた。

最初もそうだったけど、なんて優しいんだろう。とても眩しいです。

この服を買いに行くという選択が、不幸を呼ぶなんてそのときの俺は知らなかった。

服のための出費は思ったよりも高かったが、アリアは結構いい服を選んでくれて、悪い出費ではなかったと思う。

それから、アリアは何を思ったのか女性物の服を着せてきた。

嫌だと何度も断ったのだが瞳に涙を溜めながら、せっかく服選んであげたのに……。などと言うものだから、俺は折れた。ただし一

回だけだ。と念を押しした……のだが。

通りがかった店員さんも何を思ったのか悪乗りし始め、断ろうとしても、スルーされるだけだった。逃走しようとしたが、この女装している格好で逃走するわけにはいかない。それに、外には悪乗りした店員に、アリアがいる。要は、逃げられないと言うことだ。

「次で最後。最後は……これね」

そう言って試着室の下の空いた部分から差し出されたのは、長い黒髪のウィッグとフリルをふんだんに付けた黒いゴシック調のドレス。所謂ゴスロリというやつだ。

「これはやめて……主に羞恥心で死ぬる」

「ミニスカートを履いたそこの女の子より可愛らしい男の子に羞恥心なんてものはないよ」

酷い……。

「じゃあせめてそれはやめてくれ……。精神的に痛い」

暫くうーんと唸ったかと思うと、

「いいよ。じゃあ変えてあげる」

と言って同じくフリルが大量に付けられたエプロンドレスが差し出された。所謂メイド服。

「えっと……心なしかあまり変わってない気がするんですが……？」

「でも、さっき“せめて”それはやめてって言ったじゃない？だから“せめて”ゴスロリはやめてあげたでしょ」

負けた……。何かを負けた……。結局、メイド服姿をそこにいた人たちに披露してしまった。ただ、店員さん、アリア、たまたまそこにいた人の顔がすっごく赤くなっていた。正直、俺の顔を真っ赤にしたいし、穴があつたら入りたい。

俺はそのとき、大切な何かを失った気がしたのは多分気のせいじゃない。

瞬く間に広まった、美「少女」の噂。ただ、ウィッグとちよつとしか顔を出さなかつたおかげか、それが俺だと気付いているものは、あまりいない。

稀に写真と照らし合わせて、俺じゃないかと話しかけてくる奴もいるが、そんな人知らないとしらばっくれてやった。

一話 学園生活（後書き）

作者ことはりねずみです。

紗「さっちゃんこと御坂紗月です。って何言わせとんじや」「ラー！」

良かったね。女装（笑）

紗「ふざけんな！ダメ作者の癖してよ！」

ダメ作者なんて言っているのか？紗月……いや、さっちゃんよ。
（含み笑い）

紗「すいませんでした！言いませんから、ああいうことはさせない
てくださいー！」

どうしよっかな。

まあ、そんなことはおいときますよ。「異世界魔法学園奮闘記」
よろしく願います。

紗「この作者いつか絶対潰してやる……！」

第二話 集団魔法実技 その1

この学園に転入してから二週間が経ち。

俺も、何とか初級の魔法なら使えるようになった。元の世界で文字通り血が滲む（実際に血を吐いたりもした）様な練習をして習得した剣術がこつちの世界でも結構通用することが分かった。

そして、巨大体育館に集まった一年生の前には、緑の淡く光る魔法陣がある。多分あれはワープ装置だと思う。

「えーこれより、集団魔法実技訓練を始めます。魔法戦は個人戦と限りません。いや、集団のほうが多いくらいです。と言うわけでクラスで五人一組みのグループ作って、グループが作れたら私のところに来てください。ちなみに、魔法陣の中では他の生徒と鉢合わせすることはないです。では」

そう先生が言うと、周りがざわつき始めた。グループのメンバー決めについて話をしているのだろう。

さて誰にしようか？

「とりあえず、ハルは決定だな」

「おう！」

そう呟くと隣にいたハルが無邪気な笑顔を向けて来た。

「俺も混ぜてくれ」

俺の背後にでさりげなくそう言ったのは、ハルの友人で、キヨウ・キサラギ。俺も一週間で結構仲良くなった。

少し長めの茶髪に、瞳の色は黒。若干目が鋭く、かなりのイケた

面をした奴だ。

後二人見つけるためにキョロキョロしていると、アリアを見つけた。男子二人に誘われているようだ。

「ごめん。私もう誰と組むか決めてるからさ」

そう言ってこちらに駆け寄ってきた。

「紗月、一緒に組もう！」

「ああ。別に俺はいいんだけど……いいのか後ろのやつ」

すっごい負の感情をこめて睨んでくるんですけど。

「うーん……いいんじゃない？どうせなら仲いい人の方が気が楽だし、やりやすいし」

それは分かる。よく見れば、教室内でも良く話す人達が集まっている。

「アリアー」

そう言いながらアリアに向かって駆けてくる影が一つ。彼女は確か……

「あ、レン」

そう、確かレン・バーライト。

腰まである鮮やかな赤い髪に、黄色の瞳。顔立ちは可愛いと言うよりも綺麗。性格と容姿が合わさって男子の中ではかなり人気があるらしい。

「アリアはもうチーム組んだ？」

「さっき組んだけど……」

アリアがそう答えるとしゅん、と落ち込んでいた。

そんな、しゅんとされても困るんですが……。しかも、周りから送られてくるなんか視線が痛い……。周りから送られてくる視線とあの残念とも悲しいともとれる表情をしたのを見ていられず、聞いた。

「バーライトさんは誰かと組んでる？」

「まだ誰とも組んでないよ？」

「じゃあさ、このチーム入らない？アリアもいるし、後一人空いてるんだ」

その一言により、しゅんとしていた筈が一転して明るくなった。パアツという効果音が付くと思う。

「これで決定かな……何だよハル」

肩を叩かれたのでハルの方を見ると、なんかキラキラしたハルが、グツジョブ！と言いたげに親指を立ててきた。

適当に、はい、良かったねと言って、スルーした。

それから、先生にチームの完成を報告すると、何かを紙にメモし、魔法陣に入ってください。概要は向こうで説明します。との指示を受けたので魔法陣に入った。

瞬間、淡い光が魔法陣の中を包み込み、上下左右のどれに向かっているのかも分からない不愉快な感覚を覚えた。

そして、淡い光は少しずつ薄くなっていき、視界が開けた。

そこは、洋館の正面玄関であろう扉の前だった。しかし、洋館の大きさが半端じゃない。

扉の高さが八メートルはありそうだ。

洋館を見渡していた俺達の前に、電子画面が展開された。電子画面には文字が映されている。

「えっと、課題 魔導士の討伐」

バーライトさんが何故か声に出して読み始めた。

「洋館内の七体の魔導士を制限時間内に討伐しろ。制限時間は一時間。成功条件は全ての魔導士の討伐。失敗条件は、味方の全滅、制限時間のオーバー。ふう……」

そして、バーライトさんが読み終わると、電子画面は消滅し、代わりに地図と腕時計が五つずつ出てきた。

腕時計を手に取ると、十二時を示しており、一刻一刻針が進んでいる。

「早く行こうぜ！」

焦るように足踏みをしながらハルが言う。

「まあ、待って。作戦立てたほうが後々楽になる」

説得はできたようだが、あまり納得していないようだ。なら……

「皆で今すぐ行ってもいいけど困らなってくれるか？」

「……分かった」

渋々と言った感じで、足踏みをやめ、落ち着いたようだ。それでいい。

廊下は多分そこまで広くない。地図を確認すると、廊下は二手に分かれているようだ。片方は入り組んでいて、もう片方は入り組んでおらずほぼ直線でエントランスホールのような広いところになる。

「……皆の得意レンジと得意な魔法は？」

俺とキヨウとバーライトさんが近距離。アリアとハルが中、遠距離。

キヨウは武器に魔力を帯びさせて魔法を直接断つ魔法が得意なのだそう。バーライトさんは火の魔法。ハルは水の魔法。アリアは治癒、風の魔法が得意らしい。

このメンバーで二手に分けるなら……。

「キヨウとバーライトさんとハル。俺とアリアになるか……」

「何でなんだ？」

怪訝そうな顔をしてこちらをみるバーライトさん。多分同姓であるアリアと組みたかったのだろう。

「治癒ができるなら、一人でも広いところなら複数相手でも何とか戦えると思う。それに二人で入り組んだほうの道を行くと分断されたりするだろ？」

そして、一度皆の反応を見てから続ける。

「だけど、三人で入り組んだほうの道に行くなら、分断されてもどちらかが二人。一人の方は、時間を稼いで、二人の方が倒し終わっ

たら三人で倒せばいいだろ？」

俺がない頭を振り絞って考えた結果。

「うん。それならいいと思う」「私もそれでいいよ」「それでいいぜ」「それでいい」

全員の同意を何とか得た俺は扉に手をかけた。

『残り時間53分39秒』

第三話 集団魔法実技 その2

—キヨウ・キサラギ—

紗月達と別れた俺達は入り組んだ道を進んでいた。

縦に俺とバーライトでハルを挟むようにして移動していた。どこから魔導士が来ても応戦できるようにするためだ。

ところどころ扉がありどこから襲ってくるか分からず、警戒は怠ってはいけない。

今は、壁を背にして顔を少しだけ出して曲がり角の様子を伺っている。

黒いローブを着て、大きな杖を持った細身の魔導士がキヨロキヨロしながら少しずつこちらに近づいてくる。

「魔導士が来た。手順通りにやるぞ」

「オッケー」

「合図したら、先制して一気に決める……。だったよね……」

これは俺達三人で決めたものだ。

どこからいつ来るか分からない。しかし、できれば数的有利を利用したいので、合流は未然に防ぎたい。

そこで俺達が考えたのは、先制して一体目の魔導士を速攻で倒すことで、数的有利を維持しながら魔導士を確実に一体ずつ倒すと言うものだ。

「そう緊張するな。こっちは数で勝っている。それに二人で同時に斬りつければすぐに倒せる」

緊張しているらしく、顔が強張っているバーライトに声をかけた。

「俺も後ろからやるからさ、そう緊張しなくてもすんなって。さっきキヨウが言ってたけど、こっちのが数は多いんだ」

「う、うん……！」

声は少し小さかったが力強くバーライトは頷いた。

「じゃ、三つ数えたら出るぞ」

「3……」

魔導士は、こちらにはまだ気付いていないようだ。こちらに、魔法を放つ準備をせず、ほぼ無防備な状態で近づいてきている。

「2……」

もう少しだ。自然と剣を握っている左手に力が入る。それは、隣にいる二人も同じようだ。

「1……」

コツコツという魔導士の近づいてくる音が異様に大きく感じる。

「0……」

その合図と共に俺とバーライトが角を飛び出し一気に魔導士を斬りつけようとしたのだが。

角を出てすぐ横にあった扉から魔導士がもう一人出てきた。

突然のことに驚き、バーライトは足を止め、魔導士が杖で殴打してくるのを左右の手に持っている鉄鞭を交差させて受け止めた。俺は一人で素早く一体目の魔導士は斬ったが、浅いらしく討伐とはな

らなかった。

一対一の勝負となる。それはできるだけ避けたかったが、仕方ない。俺は魔導士と対峙した。

俺は腰に差している剣の鞘を左手に持ち、左右に持っている剣と鞘に魔力を流した。すると、それらは紫色の靄を纏った。

この靄は魔力そのものであり、魔法を断ち切ることができる。特殊魔法の一種、魔法切断。

魔導士の杖の先にハンドボール大の火球が現れ、それを即座に発射してきたが俺は魔導士に走って近づきながら右手の剣を下から上へ振り抜く。

魔導士によって放たれた火球は二つに割れ、壁を焦がした。

「穿破！」

剣での袈裟切りから、魔導士の腹部に鞘で穿つような突きを繰り出す。

狙い通り腹部に命中し、ベキボキツ！という骨の折れる音と共に魔導士は吹き飛ぶ。壁に背を打ち付けて魔導士は砂埃に包まれる。

……勝った。

そう思っていた矢先。

砂埃の中から、ハンドボール大の氷塊が飛んできた。

「がっ……！？」

突然のことにパニックに陥って何もできず、氷塊は俺の腹部に命中。俺は吹き飛び、壁に背を強かに打ち付けた。

腹部の痛みを堪えながら何とか立ち上がると、壁を背に座ったままの魔導士が俺に杖を向けていた。

今度は火球。それは横に飛んで何とか回避したが、腹部に激痛が

走る。

「っ……っ！」

激痛に顔を歪めながらも、火球や氷塊を避けながら魔導士に少しずつ近づいていく。

魔導士は動かなかつた。ただ杖を俺に向けて動かすだけだ。

そして、魔導士を剣で突き刺した。血が出ることはなく、魔導士は光の粒となって消えた。

ハルの方を向くと、ハルは、

「やったな！」

と無邪気に笑ってきた。見えないが後ろにいるバーライトも笑っている気がする。

そのとき、ハルの笑顔に釣られて自然と笑みがこぼれた。

ーレン・バーライトー

私とキョウさんが角から飛び出したとき、横にあった扉から魔導士が一人突然現れた。

それに驚いたものの、反射で鉄鞭を交差させることで杖での殴打を防いだ。

杖をはじき返すと、魔導士の体勢が崩れた。その隙に鉄鞭を魔導士の腹に打ち込む。

ミシッ！と魔導士の骨の軋む音がした。

魔導士は吹き飛ぶが何事も無かつたかのように立ち上がり、こちらに杖を向けてくる。

杖の先に、球状の岩が出てくる。それが放たれる前に避けるための予備動作を行おうとしたのだけれど、

「俺もいるんだってーのっ！」

その声と共に横から青い槍が数本飛んできた。

その魔法を放ったのはハルさんだ。

青い槍は岩を粉々に砕き、魔導士も吹き飛ばす。

吹き飛ばされたが、魔導士はゆっくり立ち上がり、杖の先をハルさんに向けて火球を展開。

そうはさせない！

火炎を纏わせた鉄鞭を、魔導士に叩き込む。

あまりの勢いと衝撃で扉ごと破壊して魔導士は吹き飛んでいった
部屋の奥に砂埃が立ち込めていて中の様子は見えない。

しばし、見ていると砂埃の中には何もいなかった。

「勝った……」

向こうを見てみると、魔導士を倒したらしいキョウさんが笑みをこぼしていた。

それがおかしくて、つい笑ってしまう。

訓練中だというのに、そこで私たち三人は笑っていた。

『残り時間39分08』

『撃破数2』 『残存数4』

第四話 集団魔法実技 その3

— 御坂紗月 —

ハル達と別れた後、俺とアリアはできる限り静かに大広間へと向かって歩いていった。

ほぼ直線で敵は見つけやすいが、大広間のところで待ち伏せしているかもしれない。

俺が持っているのは刀。アリアは薙刀を持っている。

大広間が近くなり、歩幅を少し縮めて角から大広間の様子を伺う。

大広間には魔導士が二人。それも少し離れて行動している。

これでは一気に倒すのは無理そうだ。

「アリアが魔法で先制してくれ。アリアの方に注意が向いてるときに俺が叩く」

「え？無理でしょ。気付かれずに敵の近くに行くなんて」

「大丈夫だ。問題ない」

自信に満ちた口調で言った。できるものは仕方ない。

「……う、うん。分かった」

まだ納得できていないようだが、了承はしてくれた。

「じゃ、合図したら頼む」

《御坂流剣術 壱ノ型 幻影》

刀を腰だめに構え、剣先に意識を集中する。狙うのは左側の魔導士。限界まで力を溜め込んだところで、アリアに目で合図した。

「ウインド・エッジ！」

アリアの魔法を放つ声を合図に力を解放した。

その瞬間、俺の姿は消えて見えなくなった。地を滑るように奔りながら魔導士を切り抜き、そのスピードと勢いを乗せて反転して切り払う。

魔導士が崩れ落ちる。

そして、そのまま右側の魔導士に向かって走ろうとした時。突如、横合いから火球が飛んできた。

それに反応はできたが、避け切れず左肩に掠る。ダメージは少ないが痛い。

前ではアリアが風を纏った薙刀で魔導士と戦っている。

横を見れば、俺に二本の杖を向けている魔導士。しかも、なんかボスっぽい。姿もさつき見た魔導士よりも大きく、纏っている気配も大きい。

ちよつと厄介かもな……。

俺は刀を構えて魔導士と対峙する。

反撃の機会を見計らっているらしく、動かない魔導士。なら先攻は俺。

《御坂流剣術 参ノ型 彗星》

間合いに入るまで走る。そして、身を捻りながら跳び、刀を上から魔導士に叩き付ける。

本来なら岩をも砕く威力があるが、左肩を少しだけ庇ってしまった為、本来の三分の二ほどの威力となった。

それでも、ガードを突き破るには十分な威力があると思ったが、魔導士は杖を交差させることで、それを受け止めて見せた。

「チッ」

思わず舌打ちする。

バックステップをして間合いから逃げるが、魔導士は追撃してきた。

それも、俺が得意としている技で。

《御坂流剣術 式ノ型 月閃》

素早く間合いに入ってきた魔導士が風を纏った杖を三日月を描くように振り上げる。

杖自体は避けたが、杖が纏っている風が左肩を決る。

「っ!？」

激痛が走り、完全に間合いから逃げるが、今度は魔法で攻撃してくる。

いくつも飛んでくる火球、水塊、風の刃を避けながら、思考を巡らせる。

馬鹿な……。この世界ではこの剣術を使えるものは絶対にいないはずだ。と言うか元の世界ですら、この剣術を使えるのは俺と親父と姉さんと弟のみだ。

じゃあ、どうやって一度も見たことのない技を使えるのか。さっき見た幻影と彗星なら“まだ”使えても問題はない。

考えるとますます分からなくなる思考を止め、反撃に移ることに専念する。

魔法をうまく避けながら、反撃の機会を伺う。

1つの魔法を使うたびに少し隙ができるが、2つ目の魔法がすぐに飛んで来る。

隙がほとんどない。

なら、素早く間合いに入って斬るだけだ。

雨のように降りかかる魔法を避けながら、剣先に意識を集中し、力を溜め込む。そして、一気に力を解放する。

《御坂流剣術 壹ノ型 幻影》

先ほどよりもスピードと勢いは少ないが、ほんの少しの隙に間合いに入るのには十分だった。

魔導士の腹を切り抜き、背を切り払う。

そして、そのまま、杖の間合いから離脱する。

一撃離脱、ヒットアンドアウェイだ。

今度も御坂の剣術を使ってきた。《参ノ型 彗星》。

彗星の対処法は、決して受け止めることではなく、即座に離れること。

彗星の用途の一つはガードを崩すこと。そして、もう一つは剣を地面に叩きつけて円形の衝撃波を発生させ、複数の敵をまとめて倒すこと。

素早く衝撃波の範囲から離脱した。彗星による円形の衝撃波が地面を砕く。

しかし、分からない。何故用途を心得ているのに、こちらからの技を受けてから反撃するのか。普通は用途が分かっているなら対処法も心得ているはずだ。

ん？今、何かすごく重要な事を言った気がする。

何故用途を心得ているのに技を受けてから反撃するのか。

技を受けてから反撃する？

なら、一撃で敵を仕留められる技を放てばいい。そんな技はある。しかし、万全の状態ですら、一撃打つのに精一杯だというのに、今の状態であの技はちよっときつい。

でも、やらなければ、こちらがやられる。

意を決して、技の準備に移る。まあ、準備とは言っても、ただ、刀を左手に持ち替え右手に意識を集中し、力を溜め込むだけだが。

魔導士も都合よく、杖を構えてこちらに向かって走って来る。

御坂の剣術の《式ノ型 月閃》。

それを横に飛んで避けると、左手に持つ刀で魔導士を突き、右手に溜めた力を開放させる。

瞬間。右手が閃光を放つ。魔力ではなく圧縮した闘気を放つ。

《御坂流剣術奥義 其ノ壱 穿孔》

右手から放たれた闘気が魔導士を襲う。それはまるで、獅子が鋭い牙を獲物に突き立てるように。

魔導士はゴミのように吹き飛び、壁に叩きつけられ、光の粒となつて消えた。

俺が振り向くと、アリア達が走ってきた……気がした。

意識が戻ると、体は保健室のベッドに寝かされていた。

保健室にはキョウ、ハル、アリア、バーライトさんの姿がある。

「気がついたか？」

起きた俺に声をかけてくれたのはキョウだった。

「ああ」

奥義を無茶な状態で放つたことで体を起こすことができないと思われたが、体を起こすことができた。

「大丈夫か？」

心配したように、ハルも声をかけてくれた。

「何とか大丈夫だ」

そう言つて、ハルとキョウに笑つて見せた。

「そついえば、お前変だしすげーよなあ」

「何が？」

「いや、な。お前の体には、よく分からねえけど、アリアの全く治癒魔法が効かなかったんだよ。ま、そんなことはどうでもいいけどよ。お前が一人で倒した魔導士、あれチーム全員の能力をコピーしてるらしいんだよ。まあ、その代わり、攻撃を受けてからでないで攻撃できない設定にしてあったんだとさ。本当なら、チーム全員で一斉に攻撃して倒すような奴だったらしい」

「じゃ、俺の努力は？」

「皆を待っていたら問題なかった。と思う」

「ふざけんな！俺のあの努力はなんだったんだよ！」

「まあ、待て。その代わり、お前の成績には魔法実技の点が普通よりも多く加算されるらしいぜ」

それならまあ、いいけど。いや、良くないか？でも、なんか気分いいからいいや。

再びベッドに横になった。

第五話 噂（前書き）

感想&評価お願いします。

第五話 噂

集団実技試験から十日ほど経ち、学園には3つの噂が流れている。実技試験の時の俺の噂といい加減消えて欲しいけど未だに消えない美「少女」の噂と、もう一つ。

『脱獄事件』

この学園の近くの街で昨日だったか一昨日だったか忘れたが、一人の凶悪犯罪者が脱獄したそうだ。

この学園に来るのではないかと警戒している教師達が昨日から寮生達は寮に帰ったら寮から出られなくなっている。他人の部屋へ入るのは別にいいらしい。

俺とアリアとハルとキヨウは、脱獄事件について話していた。ちなみに、この二人には美「少女」の正体が俺であることをアリアが教えてしまっている。

「怖いね〜」

アリアは間延びした口調で若干心配そうに言うが、ハルは他人事のように笑っている。

「大丈夫だって！こっちには先生達もいるし。第一学園に来る意味がないだろ」

「残念だが、凶悪犯罪者の捕まった原因は学生殺しなんだ。はつきり言って、学園に来る可能性の方が高い」

キヨウがいらないうことを付け加えた。

ハルの顔に汗が浮かぶ。

「ま、まあ、気を付けてりゃ大丈夫だろ！そう悪く考えるなって」

その言葉をハルが言った後、計ったのように予鈴がなった。

「HRをはじめます。え、未だに凶悪犯罪者は捕まっています。なるべく商店街への外出はやめてください。犯罪者の目的はまだ分かりませんが、学生を狙っているかも知れません。気をつけてください。尚、今日から学園外でも護身用の魔法具を持って貰っても構いません。それではHRを終わります」

ちなみに魔法具と言うのは「起動」させることで武器になるものである。「起動」前の形は基本的に携帯電話のような縦長の長方形。魔法具での攻撃は肉体的ダメージは基本的になく、血が出たりはしない。ただ、魔法具といえども叩かれたり切られたりすると痛い。しかし、肉体的ダメージが無いとは言っても武器は武器だ。こんなことは異例だろう。

職員室へ行ったついでに理事長室に寄って理事長に聞いたのだが、こんなことは今まで一度も無かったらしい。不幸の源みたいな奴がここに来たからか？俺だけだ。

放課後、寮に帰った俺は、冷蔵庫に何も入っていないことに気付いた。

仕方なく商店街に買い物に行くことに。全く、何でこんな物騒なときに……。やっぱり不幸だ。

商店街に着くと、最寄のスーパー目掛けて一直線に歩いていたのだが。

「なあなあ、嬢ちゃん」

路地裏からそんな声が聞こえた。

ホント、今時そんなことする馬鹿な奴いるんだ。とか思うけど。

流石に放つてはいらなかった。

路地裏に入り様子を伺うと、少し広いところで複数の馬鹿野郎に絡まれていた少女は何と……アリアだった。

「だから、俺達と遊ばないかって言ってるだろ？」

「やめてくださいっ！」

アリアがそう叫んだとき。

「正義の味方参上」

「えっ？」

ふざけた口調で、ふざけたことを名乗りながらしゃしゃり出てみた。アリアが一瞬だけ間抜けな声を上げる。

「あぁん？誰だお前？」

「正義の味方だっつってんだろ。お前ら頭だけじゃなくて耳も腐ってんの？」

そう挑発して、魔法を使用し真っ黒の木刀を握る。

「やってやろうじゃねえか！」

易々と挑発に乗る馬鹿七人。しかし、馬鹿共の手には鉄パイプが握られていた。

「果てとけ。馬鹿共」

俺は技名を叫んでから、身を捻りながら跳び馬鹿共の中央に木刀を叩き付けた。

「彗星！」

円形の衝撃波が地面を奔り、馬鹿共をまとめてなぎ払う。まあ、たかが馬鹿共だ。これだけで十分だろう。

「大丈夫か？アリア」

離れた位置からアリアの安否を確認する。

「う、うん」

返事をしたアリアの顔が何故か赤い。首を傾げるが分からなかった。

「舐めるなよ餓鬼があっ！」

突然、起き上がった馬鹿が鉄パイプをアリア目掛けて振り下ろす。魔法の展開は間に合わないと悟った俺は、素早くアリアを押し、地面に倒し、背中で鉄パイプの一撃を受ける。

「起き上がってんじゃねえよ馬鹿！」

背を向けたまま思い切り蹴り飛ばし、壁に激突した馬鹿はそのまま崩れ落ちた。

路地裏を出るまで無言だったアリアが口を開いた。

「大丈夫？紗月」

「ん？ああ。背中を打たれたただけだ。ツバ付けときゃそのうち治るさ。そう言えばアリアはなんで商店街に？」

「え、えつと、晩ご飯の弁当買おうと思って。紗月は？」

「俺か？俺は冷蔵庫に食べ物が入ってなかったから、食べ物買いに来た。そうだ！良かったら俺の部屋でご飯食べないか？弁当よりはマシだと思う」

「いいの？でも、お金とか持ってないよ」

「一人増えるくらいなんともないって。こつこつ好意は素直に受け取っとけ」

そう言っただけで笑って見せ、最寄のスーパーで食べ物を買った。

スーパーから談笑しながら帰ってくる紗月とアリアの様子を陰で見ている男がいた。

「ああいう幸せそうな学生はいい悲鳴を上げるんだよなあ……」

男の体格はヒョロツとしていて、頬は扱けており、ぼさぼさの黒い髪をしている。

名前はヒューガ・フリンクス。今、話題となっている脱獄した若い凶悪犯罪者だった。

部屋に着くと、アリアを招き入れて、ゆっくりしててくれ。と言っただけで料理を作り始めた。

作るのは結構得意な料理、ハンバーグ。

後はサラダにコンソメスープ。

かなり適当だなとか言うツツコミはなしで。得意な料理だし。料理が終わると二人で食事をしはじめた。

「美味しい！紗月って料理上手なんだね」

「ん？ああ。家は俺と父さんが料理できなきゃ死ぬからな。母さんと姉さんが作る料理は一種の兵器だ。そう言えばアリアは料理しな

「いのか？」

「う、うん。あんまり上手じゃないから、弁当とかインスタントの料理をいつも食べてた。お昼はレンに貰ってるんだけど」

「なんか若い男みたいなお生活だな」

「そう思うけど、レンは料理教えてくれないし」

「まあ、明日一つだけなら教えてやるよ」

「本当！？」

瞳を輝かせながらこちらを見てくる。

「ああ」

勿論こちらから言った事だし断ることはしない。

そのまま、他愛も無い話を続けていた。

第六話 幕間

— ??? —

この世界には、魔法がある。

自分は立派な魔法使いだ。学生の頃の成績は主席と優秀だった。ただ、大きな悩みを抱えていた。

それは、誰でも経験のある恋というやつだった。

その人を意識するだけで胸が高鳴る。

学園生活は最後の残すところ一年となり、意を決して告白したところ、その人は自分を受け入れてくれた。

それから、自分とその人は幸せな生活を送っていた。

だが、それも長くは続かなかった。

その人はトラックに轢かれて事故で死んだのだ。いや、世間では事故ということになっているが、アレは殺人事件だった。自分は忘れない。あの時、トラックの運転手はニヤリと笑っていた。

魔法を放って殺してやろうと思ったが、それは躊躇われた。

まだ自分は学生だったからだ。だが、その後の自分の生活は苦痛に満ちていた。

学園内にいる恋人達を見ると無性に腹が立つてくるし、クラスの友達には同情の視線を向けられる。

それでも自分は、我慢して生活を送っていた。

そして、幸せそうに過ごしている学生の恋人達を見つけた。しかも、自分のかつての思い人が死んだところだった。

なのに、やつらは幸せそうに、そこで誰が死んだとか関係の無いように幸せそうに過ごしていた。

だから、腹が立った。溢れる怒りはとまることを知らず、自分を満たしていった。

そして、自分の良心は死に、悪意に満ちた人間が出来上がった。

その学生の後を着けて殺した。その悲鳴が心地よかった。だから、幸せそうな学生を複数見ると無性に殺したくなった。そして、今日幸せそうな学生を二人見つけた。あの二人を殺したい。心地良い悲鳴を聞かせて欲しい。

— 御坂紗月 —

はあ……。

風呂入るからアリアは自分の部屋に帰っという、と言って風呂に入ったのだが、

「……………」

ソファで寝ている人物。それはアリアだった。

おい。何で他人の家のソファで寝てるんですか。

「アリア。起きろ」

「う、ううん……。お母さん……………」

俺はいつから母になった。なんて無粋なこととは思わないぞ。多分、家族で何かあったのだろう。

しかし、どうやって起こすかな……。今はまだ8時だし、まあ1時間くらいなら寝かしといてやるか。

そう思い、アリアの体にタオルケットを掛けてやってから、勉強道具を取り出して机に置く。魔法学と魔法史については、俺は中学生レベルだ。

今からでも多分遅くない。がんばらなきゃな。

1時間くらい勉強を頑張っていると、ソファのほうから少し声が聞こえた。どうやらアリアが起きたらしい。

「おはよ。っても、まだ晩の9時なんだけだよ」

「おはよう……はれ？何で紗月がここにいるの？」

眠そうに目を擦るアリア。寝ぼけているのだろうか、自分の部屋だと勘違いしているらしい。

「いや。そりゃ俺の部屋だからに決まってるだろ？」

「……………へ？」

目を擦る動作を止め、ぼけつとした表情になり、そして、顔をみるみる赤くしていった。

「え？ええ！？う、嘘！？私ここで寝てたの！？」

「ああ。起こすのも躊躇われるくらいぐっすりとな」

肯定の意味合いをこめて頷きながら言う。

「ぐっすり……あわわわわ！？え、えっと、ごめんね！勝手に寝ちゃって！あ、紗月！」

「え？な、何でしょうか？」

「……………見た？」

「な、何を？」

「寝顔……見た？」

「……………み、見た」

視線を逸らしてから答えた。そして、答えるとすごい剣幕で俺の肩を揺らしてきた。

「やっぱり！黙かいてた！？寝相悪くなかった！？涎とか垂らしてなかった！？半分目が開いてたりしなかった！？」

気のせいか何人もアリアが見える。どれだけ高速で動いていたならこんなことが起きるのだろう。

そんななかで俺は愉快地現実逃避を試してみた。

—アリア・ミュレット—

……見られた。寝顔を見られた。

部屋に戻ってから、しっかりとシャワーを浴びた後、私は枕を抱えて悶絶？していた。顔が熱いのは多分気のせいじゃない。

抱えていた枕を更に強く抱き、顔を埋めた。

何で紗月がいるのは分かっていたのにソファに横になったんだろ
う。

何故かは分からないが、紗月君といるとどこか安心して自分の
がいる。顔は美形の部類に入ると思う。魔法を抜いても十分強い
に、魔法実技のときは、一生懸命魔法の練習をしている。いいとこ
ろもあるのに、もっと頑張ろうとするところを自分も見習おうとか
もっと一緒にいたいと思う。

意図的ではなく、自然にそう思う。何故か、紗月といると暖か
くなる。よく考えれば意識したのはこれが始めてだ。最初に話しか
けたとき。あれのきっかけはなんだったんだろう。全く意識してい
なかつた気がする。

とにかく、紗月といると素の自分が出せるのは確かだ。

それに、もう一つ。優しい。今日みたいなほんの些細な優しさが
安心に繋がっている気がする。無理矢理、商店街に連れて行っても
怒ることも無く許してくれたし、女装のときのことは意識はしてい
るようだけど、私に文句を言わない。今日絡まれていたときもそう
だった。登場はふざけてたけど、あの人たちから守ってくれて、あ
げく私に向けられていた攻撃なのにかばってくれたり。

だから、思う。私は優しい紗月のことをどう思っているのだろう。

そして、どう思われているのだろうか。と。
そして、思考に区切りをつけた私は、意識を手放した。

翌日の放課後。

料理を教えるために一緒にアリアと買出しへと向かっていた。

「ねえ。何の料理教えてくれるの？」

「うーん……。まあ、簡単なからだな。ハンバーグとか」

今日教える料理についての会話の途中。

横にいたはずのアリアの姿が突然消えた。

何事かと見回していると、足元に黒い穴を発見。すかさずその中に俺は飛び込んだ。

黒い穴は簡易ワープ装置らしく、ワープ装置特有の妙な感覚があった。

俺の出た場所は、廃工場らしい。所々何か分からない部品や鉄パイプが落ちている。

「ようこそ。俺のステージへ。観客はたった一人だ」

そこに立っていたのは、凶悪犯罪者。

凶悪犯罪者の指を指した先には体を柱に縛りつけられているアリアの姿があった。

コイツは潰さなければならぬようだ。

「じゃあ遊戯ゲームを始めようか！」

凶悪犯罪者がそう言ったとき、俺は魔法で木刀を展開し、切りかかっていた。

第七話 戦闘

御坂紗月

「さあ遊ゲーム戯をはじめようか！」

凶悪犯罪者がそう言った時、俺はすでに剣術を披露していた。

《御坂流剣術 弐ノ型 月閃》

素早く間合いに入り、三日月を描くように木刀を振り上げる。

「うおっと！いいねエー！」

ヒューガは目をギラつかせて剣技を身軽に避けながらハンドボール大の黒いボールを放つ。

それを、少し体を逸らすことで避ける。

だが、避けたと思っていた魔法は、無防備な背中を襲う。

「が、はあっ！」

肺の中の空気が無理矢理出され、肺が酸素を欲する。

何とか呼吸を整えながら、剣を腰ために構え、力を溜め、開放する。その動作をほんの数瞬で行う。

《御坂流剣術 壱ノ型 幻影》

地を滑るようにして間合いをつめ、背中に到達した瞬間、反転しスピードと勢いを乗せて背を叩く。ヒューガは吹き飛び、工場の柱に直撃する。

確かに手ごたえはあった。それも、骨が折れるほどの手ごたえだった。

だが、あいつはそこに立っていた。痛みなど感じていないように。

「嘘だろ……!?!」

「今のも良い!さあ上がってキタゼエ!」

ヒューガが魔法を放つ。今度はボールではなく、黒い雷。

それを軽く体を逸らして避ける。避けたことを確認したが、雷はカクン、とほぼ180度ターンして俺の背を襲う。

俺の背に激痛が走った。

「ぐっ……!」

激痛を堪えるように声を出す。

おかしい。何で避けた魔法がこっちに向かってくるんだ。

俺が避雷針という訳でもないだろうに。

ん?まてよ?避雷針?避雷針って確か雷をわざと引き寄せるんだよな。

じゃ、あいつが引力を操れるとしたら?

辻褃が合う……訳でもないかも知れない。仮に引力を操れるとしても、あいつは何故痛みを感じていないのか。

斥力も操れるわけでもないだろう。斥力を操れるとしたらわざわざ攻撃は食らわないはずだ。

考えれば考えるほど分からない。けど、一つだけ憶測の域を出ないが分かったことがある。あいつは引力を自由に使えるのかもしれないということ。

つまり、大きく避ければ当たることは無い、と思う。

まあ、試してみないことには分からない。

《御坂流剣術 四ノ型 獣牙》

俺は即座に間合いを詰めて、獲物に噛み付く獣の如く、振り上げと振り下ろしのコンビネーション技を腹と肩に浴びせる。

手ごたえはあるが、効いていないようだ。

一旦バックステップで距離を置く。

「アハハハ！良いぜ！最っ高に良いぜ！上がってキタ！さあ上がってキタゼエエエエエエエ！」

壊れた笑いを浮かべながら、ヒューガは今度はさっきよりも巨大なバランスボール大の黒い球体を放つ。

今だ！

黒い球体を横に大きく避ける。黒い球体は曲がることなく真っ直ぐ飛んでいった。

「ほう……たった2回の攻撃で気付いたか！良いねエ！今までで最高にいいぜエ！」

引力を使うのは当たっていたようだ。後は何で攻撃が効かないかだけだ。

試しにだが、火の初級魔法を使う。

「フレアシュート！」

右手に展開していた木刀を消して、左手から火球を放つ。

火球は真っ直ぐ飛んでいき、ヒューガに当たって人を包むくらいの爆発を起こした。

煙が晴れたところにいたのは無傷のあいつ。

魔法なら効くと思ったんだがな……。

よく考えれば全く効かないのはおかしい。爆発を起こしたのに、服すら焦げていない。

分からない。これはどうしても分からない。どうして攻撃が効かない？

魔法も剣技も何も効かない。こいつをどうやって倒す？

体の状態は良いとは言えないが悪いともいえない。…アレを使う
しかないか。

《御坂流剣術奥義 其ノ壱 穿孔》

右手に力を溜め込み、間合いを詰め、獣を模した闘気をぶつける。
殴るときに奇妙な感覚を覚えた。人の肌とは違い、拳を押し返して
くる。

だがそんなことは関係なく、闘気を叩き付けた。

ヒューガは吹き飛び、廃工場の壁にヒビを入れた。

「はあ……はあ……」

やはり、奥義を使ったときの反動は普通の剣技のときの比ではな
い。自然と息が荒くなる。

「ごはあつ……！良いねエ！ウインド・メールを習得してから俺に
傷つけた奴はお前が初めてだゼエ！だが、もう遊戯ゲームは終わりにし
てやる！」

むくりとあいつは起き上がった。

そんな馬鹿な……。何で奥義を受けて立ち上がれるんだ。命はと
らないが、まともに食らえば気絶はするはずだ。

しかし、やっとあいつに攻撃が聞かない理由が分かった。ウィン
ドメール。直訳すると風の鎧。

殴ったときに感じた奇妙な感覚。あれは風が俺の拳を押し返した
ときのものらしい。

問題はどうかやって風の鎧を消すか。消せないことには意味が無い。
木刀を展開し間合いを詰めようとするが、あいつはてんであさつ
ての方向にバランスボール大の黒い球体を放った。

「馬鹿か……！？」

「飛んでいる方を良く見てみるんだな！」

その魔法の向かっている先には、柱に体を縛り付けられたアリアの姿があった。恐怖のあまり、悲鳴を上げることすらままならないようだ。

「くそっ！」

俺は《壱ノ型 幻影》の要領で魔法よりも早く、アリアの前に両手を広げて立つ。

自分の目の前でまた人が傷つくのは、絶対にいやだ。あのことがあったから、俺は御坂流剣術を必死にやってきたんじゃないか。

そして、バランスボール大の魔法を受けて、後ろに吹き飛ばす。

柱に背を打ちつけ、猛烈な吐き気が俺を襲い、全身に激痛が走る。

「さ、紗月？大丈夫？」

アリアが心配そうに声を掛けてきた。

ここから逃げ出したい。でも、逃げるわけにはいかない。ここで逃げたら、またあのときのようにになってしまう。それだけは嫌だ。

だから、強がってやった。

優しくゆっくりと言葉を言葉を紡ぐ。

「心配すんな。俺はお前を守ってやる。どれだけボロボロになっても、俺がお前を守ってやる。だから、俺に任せとけ」

そして、全身が悲鳴を上げている状態にも関わらず、一人の少女のために。

絶対この少女を自分の目の前では傷つけさせないと、そう言った。俺は木刀を展開し、木刀に魔力を流す。すると木刀はうっすらと

黒い靄を纏った。

たしか、キヨウが話していた。俺の魔法は特殊魔法の一つで、魔法切断。自分の得物に魔力を流して魔法を切断する魔法だ。と。

予想が正しければ、ウィンドメールも貫通すると思う。

俺はジグザグに走りながら間合いを詰め、跳躍と同時に身を捻って、木刀をヒューガに叩き付けた。瞬間、激痛が全身を走る。

《御坂流剣術 参ノ型 彗星》

ヒューガは、それを軽々と避けたが、《彗星》による円形の衝撃波をまともに食らい、よろけた。

「ぐっ……！？」

衝撃波は若干紫色を帯びていて、ウィンドメールを貫通したようだった。

「まだまだ！」

それから、体を回し蹴りの要領で回転させて、その勢いを乗せて、木刀を振り上げた。

《御坂流剣術 五ノ型 翔閃》

それには堪らず、俺の体が悲鳴を上げる。

「っ……！」

《翔閃》を食らって吹き飛んだあいつは、黒い剣を投げてきた。

それを避けるため、体を動かさそうとしたが、それに俺の体はついて来てくれなかった。

そして、剣が俺の脇腹に深々と刺さり、鮮血を撒き散らして、俺は倒れた。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

意識がブラックアウトする寸前。絹を裂くような悲鳴が聞こえた気がした。

第七話 戦闘（後書き）

感想・評価してもらえると嬉しい限りです。
執筆速度が増加します。

第八話 凶悪犯罪者事件の終わり

—アリア・ミュレット—

さつき起きたことが信じられなかった。

大の大人七人をほぼ一撃で気絶させたり、あの時訓練に参加した五人の能力をコピーした魔導士を一人で倒すような、紗月がほとんど動けずに、深く剣を刺され、鮮血を撒き散らして倒れた。

「う……うそ、だ……」

顔色が蒼白に染まるのを自覚した。

信じたくない。あの優しい少年が自分の目の前で殺されることなんて、絶対に信じたくない。決して変えられるとは思えない現実に、無駄だと分かっていたけど、叫ばずにはいられなかった。

「さつ……き……紗月！」

勿論、返事はない。沈黙のまま地面に突っ伏して血を流しているだけ。その血が段々と広がっていく。

顔から血の気が引く。体は縛られていて、崩れることはなかったけど、縛られてさえなかったら絶対に崩れ落ちていた。

視界がぼやけていく。その原因が涙だと気付くのに時間はかからなかった。ボロオロと、大粒の涙が地面に落ちた。

そんな、アリアを余所にして、あいつ……凶悪犯罪者、ヒューゴ・フリンクスは紗月に歩み寄って、その腹に刺さっている剣を引き抜いた。

そして、その視線がこちらへ向き、歪んでいた口が更に歪む。

「良い悲鳴だったぜエ。それにコイツとの勝負も良かった。お前らは今までで一番の獲物だった。だが、もう終わりだ」

そう言うと、紗月の血が付いた剣を振り上げる。そのとき黒い剣に映っていた私の顔には未だに涙が溢れていた。

私は覚悟を決めるように両目を閉じる。

そして、剣が振り下ろされる瞬間に、ドカツ！という殴打音が聞こえた。

両目を恐る恐る開けると、ドクドクと脇腹から血を流している少年、紗月の姿がそこにあった。

首を動かして、横を見ると、凶悪犯罪者が気絶して倒れている。

「大丈夫か？アリア」

そう、言っただけで魔法で展開したナイフで私を縛っていた縄を切った。うんと言っただけで首を縦に振ると、糸が切れた操り人形のように紗月は崩れ落ちた。

それも、こちらに倒れ掛かるような形で。

治癒魔法を掛けるために、紗月の体を何とかゆつくりと寝転がし、膝枕をしてから、片手で携帯電話を操作し救急車と警察を呼んだ。

そして、通報が終わった後は、治癒魔法を掛けたが全く効かず、警察と救急車が来るまで膝枕したままでいた。

わずかに頬を赤く染めながら。

— 御坂紗月 —

目を覚ますと見慣れない天井があった。

間違いない寮ではない。首だけを動かすと、そこには白い床に白い壁。自分が寝ているベッドも白く、風で揺れているカーテンも白

い。

真っ白の部屋だった。と、体を起こして、体を見ると白い包帯が全身に巻いてあった。

ここでやっと自分の状況に気付いた。ここは病院の個室らしい。でもなんで病室にいるんだろう。俺は剣を脇腹に刺されたあの後、なんかすっごい力が湧いてきて、あいつを殴り飛ばして、その後は、何だっけ。忘れた。

うぐんと唸っていると、コンコンとドアをノックされる音が響いた。

はい。と返事をするゆっくりと扉が開かれたそこに現れたのは、一人の少女。

自分を守るうとした、金髪青眼の少女。制服を着て、手にはビニールの袋が握られている。

「あ……紗月」

驚いたような表情を見せてから、持っていたビニール袋をその場に落とし、表情を崩した。やがて、ポロポロと大粒の涙が零れ落ちる。

そんな姿を見るのが何だか堪らず、できるだけ優しく声を掛けた。

「え……？ な、なに泣いてんだよ」

そして、緊張の糸が切れたかのようにガバツと勢いよく飛び掛ってきた。

勿論、全身に激痛が走る。

「ア、アリア！ 痛い！ 痛い！ マジで痛い！」

必死の訴えに俺の体からごめん、と謝って離れるアリア。

ちょっと名残惜しかったかも。なんて思いが頭を過ぎったが、すぐにそんな邪なモノは打ち消した。

それから涙を手の甲で拭くと、呟いた。

「生きてて……良かった……」

俺は笑って見せて、

「お前をちゃんと守ってやったのに死んでるわけないだろ？」

とできるだけ優しく言った。それに笑顔で返してくれると思ったが、少しむくれている。

「紗月。自分がどれくらい寝込んでたか知ってる？」

そういえばそうだ。うん。わからん。とりあえず思いついた数字を言ってみた。

「2日くらい？」

2日。それは、俺が始めて奥義を習得したときに寝込んでいた日数。

「馬鹿！丸3日よ！本気で心配したんだから！」

外れたようだ。

「……すみませんでした」

謝ってから、目を逸らすと落ちているビニール袋に目が止まった。

それに気付いたのか、入り口付近に落ちているビニール袋を持ってきて、中身を取り出す。

「はい。お見舞いのお菓子」

「ん？お手製じゃないのか？」

「私が料理出来ないの教えてあげたよね？」

「すごい剣幕で俺を睨む。ちょっと怖い。」

「いや。お菓子はお手製がベストだし。後、料理できないけど頑張りましたみたいなのがいいんだ。分かんないかなあ？」

そのまま、俺とアリアはぎゃあぎゃあといつものように過ごした。やっぱりいつもの方がいいよな。

そう思うと、自分はそれほど不幸ではないのかもしれない。そう、思えるような気がした。

そこで、ノックもなしに入ってきた人物が。

白衣を着た、知性と言うより野生感が溢れる少々筋肉質な医者。

名札には、シヨウ・キサラギと書いてあった。

キサラギって確か、キヨウの家名だよな。でも、似ていない。

キサラギは俺とアリアの姿を交互に見ると、ニヤニヤと嫌な笑顔を向けてきた。

「また、随分とラブラブだな」

ぶっ！？とアリアが顔を真っ赤になって息を吐き出した。俯いたまま俺から背を向けた。

俺はあくまでも冷静な態度をとった。

「変な冗談はやめてください」

「お？なんだ、カップルじゃないのか？」

「違います。ただの友人です」

「まあ、少年よ。俺は診察室で待つてるから今はその彼女と好きなことをやっておけ」

「人の話は聞いたほうがいいですよ？」

言いたいことだけ言い終わると、キサラギは変な雰囲気を残して部屋から出て行った。

しばらく沈黙が続いた後、アリアがこちらに振り向かずに言った。

「じゃ、じゃあ私もそろそろ行くね」

「ん？ああ。分かった。ていうか、お前なんか赤いぞ？大丈夫か？」

「赤くなってるじゃない！じゃっ！また明日！」

言い残すと、アリアは脱兎の如く部屋から飛び出していった。

一体どうしたのか。朴念仁の紗月は気付かなかった。

第八話 凶悪犯罪者事件の終わり（後書き）

第九話 修学旅行その1

— 御坂紗月 —

俺たちは今日から二泊三日の修学旅行。勿論というか、生徒数ゆえに1年生のみである。ふざけている。

何でクラス1組でバスが一杯になるんだ。この学年のクラスは12組。バスが12台続けて走っているというのはかなり迷惑だと思うけど、まあいいや。

ちなみに行き先は……えっと、なんだっけ？確か現代日本という京都みたいな所だったはず。

人口密度もなかなか高く、観光名所で世界遺産、歴史的建造物が多いらしい。何というか京都。

ちなみに俺の出身は京都だ。育ちは東京だが。え？どうでもいい？じゃあ、どうでもいい話しはこれくらいにして、俺たちの乗っているバス内では……。

「みんなー！元気ですかー!？」

「おー!」

「遊びたいかー!？」

「おー!」

「温泉に入りたいかー!？」

「おー!」

「何かイベントを期待しているかー!？」

「おー!」

「手持ちのおやつは!？」

「300円以内!」

「バナナは!？」

「おやつに入りません!」

クラス1の空気の読めない奴、トマト君（本名はトマルコ・何とか）がマイク片手にこんな事をしていた。

何これ……。っーかお前らなんでこんなテンション高いんだ？

さて、俺は一番後ろの右側の窓際の席だ。籤運がいいとはいえない席かもしれない。

理由？そんなの、5人掛けの席なのだが左側に言っちゃ悪いが肥満児が2人いて、2人で席を3人分使っているからだ。

それに追い討ちをかけるように俺の隣は名前も知らない腰までありそうな銀髪に透き通るような青眼の結構顔立ちのいい女子生徒。自然と体を密着させるようになってしまっている為、男女問わずこちらを見るクラスメイトの視線が痛い。

「えっと、その、ごめんなさい」

不意に、隣の女子生徒が声を掛けてきた。

「ごめんなさいと声を掛けられれば返す言葉は一つしかない。」

「気にするな」

「でも……」

「辛いのはお前も同じだろ？だから気にするなよ」

できる限り優しく声を掛けた。そんなときに空気の読めないマイクを持った奴が現れた。トマト君だ。

「バスの中でフラグを立てようとしている奴がいるぞ！」

『どいつだ！？』

「噂の転入生、紗月だー！」

『けしからん！』

空気読めよ。つーか、俺がフラグなんて立てれるわけねーって。美がつくほどの少女だし。

ちなみに、隣にいた女子生徒の名前はエルリン・クライスト。リンと呼んでくれてもかまわないそうだ。

さて、旅館に行くまでの残り数時間、バスの中で二人の肥満野郎に圧迫されるのに耐え切らなければならぬ。

その現実を目の当たりにして憂鬱になった俺は、寝る事にした。圧迫されて寝ずらい事この上ないだろうが、このまま耐えるのも辛い。

そうして、目を瞑り意識を手放そうとした瞬間。

どうしてかは知らないが車体が大きく揺れ、何かが俺の顔を直撃し、俺の意識は遙か彼方へと飛んでいった。

巨大な和風の旅館で昼食を摂った俺たちは、観光に移った。

ちなみに、聞いた話だと、俺の顔に直撃したのは、リンの腕だったらしい。リンがしきりに謝ってきた。

今はバスを降りて、アリアやキョウなどのいつものメンバーにリンを加えて綺麗な五重塔ならぬ六重塔せいさいじで有名な、星西寺せいさいじという寺を回っている。

ちなみに、星西寺は清水寺と法隆寺を足した感じで、舞台もあり、さっき言ったとおり六重塔もある。

ちょうど六重塔の前に着いたとき、リンが一つの提案をした。

「ここで写真撮りませんか？」

その時、別に良いんだけど、誰がシャッター切ってくれるんだ？ という言葉は飲み込んだ。トマト君がちょうど良いときに一人で歩いていたので。

「そうだな。シャッターはトマト君に任せるか」

そうして、俺とハルはトマト君に話しかけた。そして、二、三言葉を交えた後、用件を言う。

「手短に言う。写真とるからシャッター切ってくれ」

「は？え？ちよ、待て！俺も入れさせるよ！」

「そういうオーバーリアクションはいらないから。さっさと撮ってくれ」

かなり無理矢理トマト君にシャッターを任せ、皆思い思いに位置を決めていく。

一番右からハル、レン、アリア、俺、リイン、キョウという位置になった。

位置が決まると、トマト君が口を開いた。

「3 - 1は？」

『~~~~』

ちゃんと撮れたはいいが、シャッターのときの掛け声が気になった。

何だよ3 - 1って。1 + 1じゃないのか普通。まあ、そこはトマト君のKYクオリティだ。

写真を撮った後は、トマト君と別れ、再び寺を回りはじめた。この山の麓の街を一望できる舞台に向かうことにした。

俺は、アリアと話そうかとも思ったが、レンと話していたので、誰とも話していないリインと話しをする事に。

「そついえば、星西寺の舞台から飛び降りたら来世は凄い魔法を使えるそうです」

「へえ、来世か」

つまりこの舞台から飛び降りたらお陀仏って事か。おっと、もうすぐ舞台だな。

それからも、リインと舞台の話の続き、舞台の上に立つと山の麓の街を一望する事が出来た。

「あれが私達の泊まる旅館ですよね」

「確かそうだったな。良く見れば結構広い旅館だったんだな」

「そうですね。思った以上に広いです」

「そうだ。ここでも写真撮らないか？」

「いいですけど……皆さんばらばらですよ？」

「2人でいいんだよ。ちょうど先生がいるから先生に撮ってもらえばいいしな。じゃ、先生に頼んでくるから」

そういつて俺は、先生にシャッターを切ってもらえないか聞きに行った。

正直なところ、教師を使うのはどうかと思っただが、先生が一番近くにいたのだから仕方がない。

先生は笑顔で了承してくれ、写真を撮った。

あとで先生に聞いたのだが、リインの少し顔が赤かったそうなのでうしてだろう？

第九話 修学旅行その1（後書き）

ちよつと間が空いてしまいました。

最近パソコンと、自分の体の調子が悪かったので執筆が出来ませんでした。

感想・評価お願いします。

第十話 修学旅行その2

— 御坂紗月 —

1日目の観光が終わり、今は旅館で広間に集まってクラスのミーティング。

勿論、クラス別なのは生徒数ゆえにだ。

「えっとまずは、注意事項をいくつか話したいと思います。まず1つ目は、他のクラスメイトの部屋に入ることなのですが、本当なら極力やめて頂きたいのですが、こればかりはどうしようもないで、自由に入りにすることを認めます。女子が男子の部屋に入ったり、男子が女子の部屋に入ったりすることは、夜の10時以降を除きまして、自由といたします」

その言葉を聞いた時、周りの男子から『よっしゃ!』と言う声が聞こえた気がする。多分気のせいだ。先生が反応してないし。

「2つ目は喧嘩をしないこと。当たり前のことなのですが、毎年喧嘩をすることがあります。ちょっとしたことが理由で喧嘩に至り、残念なお亡くなりになられた生徒さんもいるから、みんなも気をつけるようにしてください」

喧嘩で死亡者って……。魔法でも使ったのか？

その後もいくつかの注意事項を話し、解散となった。これから2時間ほど自由時間となる。その間に風呂も済ませておくそうだ。

ちなみにここの大浴場（露天）は、合計500人以上が一回ではいる事が出来るらしい。

かなり大きいという事で、男女問わずこのクラスの大多数は自由

時間になったとたんに風呂へと向かった。

勿論俺は例外だ。風呂は落ち着いてゆっくりと浸かるのが良いからな。

俺と同じ意見を持つのかハルとキヨウも後で入るらしい。まあ、ハルの方はかなり口元が吊りあがってたから別の意味だろうが。

そして、男子の皆が風呂から上がった後の脱衣所で俺はハルに真意を聞いた。ちなみにキヨウは先に風呂に入っていた。

「お前、何で先に入らなかったんだ？」

「は？お前何言ってるんだよ。男子が風呂から上がったから入るから決まってるんだろ」

「ふん。で本意は？」

「勿論覗きという男のロマンを実行する為だ！」

「馬鹿だろお前……」

ハルの先輩曰く、やっぱりそういう男子から身を守る為に女子はタイミングを見計らい、大多数の男子が風呂から上がった後に女子は風呂に入るらしい。

そして、女子が風呂に入るピークが今なんだそうだ。

馬鹿だろお前。その頭の回転を他のところに使えば良いものを。

そして、俺はお望みどおりハルに行動を実行させる事にした。俺は巻き込まれさせなければそれで良いし。

そして、脱衣所を出て風呂の戸を開けると、とんでもない大きさの風呂が姿を現した。軽く300人は入れそうだ。

何故こんなに広くしようと思ったのだろうか。まあ、どうでも良いけど。

俺のほかにもゆっくりと浸かるうという者は10人ちよつといた。隣の風呂の方からは談笑が聞こえる。結構数は多そうだ。

ちなみにと言っではなんだが、ハルと同じ考えのものが4、5人いるらしく、ハルと何かの相談をしていた。ちなみにその中にトマト君の姿もある。

あ、ちよつと良い事思いついたかも。

俺は奴らの背後に忍び寄り、魔法で巨大な黒いバットを展開し、それを思い切り振って、相談していた6人を思いきり柵の向こうへ吹き飛ばした。

勿論女子風呂へ。

『キヤアアアアアアアア！！』という叫び声が聞こえ、その後にドガア！バキイ！ドゴオ！などの殴打音が聞こえた。今頃あいつらはたこ殴りパーティーに参加しているところだろう。勿論被害者側で。

くくくく、と押し殺した笑いが洩れる。やばい。笑いが止まらん今、気を抜いたら腹を抱えて笑いそうだ。

視界の端でキョウも笑っているのが見えた。

明日トマト君やハルがどうなるかが分かり、更に笑いがこみ上げてくる。

そろそろ抑えきれなくなりそうなので、体と頭を洗い、湯に浸かる事にした。

風呂を上がると、あれだけ殴打されていた奴らが、脱衣所で談笑していた。

こいつらの生命力は侮れない。正直なところ、台所の黒い悪魔ゴキブリよりも高い生命力を誇っていると思う。

その後、俺たちは部屋に戻った。ルームメイトはハルとキョウとトマト君。

4人で談笑していると、アリアとリンとレンが部屋に入ってきて、数々の紆余曲折を経た後、遊ぶ事に。

何かないかと聞いたところ、ハルがトランプを持っていた。7人

ってかなり多いとは思うけど、大富豪をする事に。

勿論、罰ゲームあり。その場で、1位上がりの人が誰かに罰ゲームの内容を言い渡す。

まあ、不幸の塊みたいな奴（俺）が勝てる道理など無く、1位はリン。

そして、罰ゲームの内容を言い渡した。

「ハルとトマトはこの旅館中の女子に謝罪して来い。それまでは戻って来る事を禁じる」

ひでえ。命令形だし、口調がかなり変わってる。今改めて思った。女って超怖い。

「あの2人は今日中には帰ってこれないから次のゲームをしましよ
う」

次。レンが1位に。

「キョウ。とりあえず私とアリアとリンの分の飲み物買ってきて、皆紅茶で良いから」

「分かった」

そういつてキョウは財布を取り出してジュースを買いに行った。

あれ？残ったの俺だけ？

次。アリアが1位に。

「うーん。やっぱり紗月がやるのは“あれ”よね！」

あれ、という言葉のを妙に強調してアリアが言った。

何だ？ “あれ” って。

そして、ニヤニヤしながら俺に言い渡した。

「女装！」

「嫌だ！」

即答した。だって女装なんて嫌だし。

「あ、それいいかもしれません」

「私も良いと思う」

「お前らなあ！」

「でも罰ゲームだし」

「それでも無理なもんは無理だ！」

「じゃあ、ハルヤトマトと同罪に」

「謹んでやらせてもらいます」

アリアが言い切る前に俺は了承した。あいつらと同罪になるなんてごめんだからな。

そして、アリアたちが持ってきた服は、装飾過多のピンクのワンピースに長い金髪のウィッグ。

その恰好で、俺はトランプをやらされた。

帰ってきたキヨウはニヤニヤしていて、ちょっと殴りたくなかった。その後も、俺は負け続け、この恰好のまま先生の部屋の扉をノックしてから逃げるだとか、この恰好のまま旅館中を走り回れだとか、この恰好のまま先生に挨拶しろ、等の無茶な任務を与えられ続けた。さまざまな隠ぺい工作によって少女の正体が俺だとはばれていない。

どんな工作かは、秘密だ。

第十一話 修学旅行その3

— 御坂紗月 —

自由時間と夕食を終え、部屋の中には俺、キョウと疲労の色が全く見られないハルとトマト君だけである。

ハルとトマト君って確か旅館中の女子に謝ってたはずだよな？何で疲れてないんだよ。ホント人間とは思えない体力だな。

まあ、そんな事はどうでも良い。重要なのは、今だ。

特にする事のな勝った俺たちは、さっきと同じように罰ゲーム付きのババ抜きをしていた。

罰ゲームは1位の人箱の中から罰ゲームの書いてある紙を取り出し、最下位の人にそれをやってもらおうというものである。

罰ゲームのかいてある紙はかなり多い。確か一人15くらいは考えていたはずなので、罰ゲームがなくなる事はないと思う。紙の処理はトマト君がやってくれるらしい。

まあ、それはおいといて。紙に書かれている内容は全て俺たちが自分で書いたものだ。当然他の奴が書いたものは分からない。負けたくないという意思が俺たちを熱くさせていた。

俺は勿論トマト君に罰ゲームを受けてもらいたい。トマト君は弄ると大変面白いのだ。オーバーリアクションが妙にカチンと来るときあるけど。

「それじゃ始めるぜ……」

妙に神妙な面持ちでハルが言い、トランプを配っていく。

順番はハル、俺、トマト君、キョウの順番だ。

最初にババを持っているのは、ハイ、俺です。

手持ちは7枚。

ただし、ある奴には神が降臨していた。キヨウである。

「全部無くなった……」

「マジかよ！」

「馬鹿な！ありえん！」

「嘘だ！……！！！」

俺たち三人は、セリフは違うものの驚愕していた。まさかここに神がいるなんて……。

ちなみに発言の順はハル、トマト君、俺である。

まあ、そんな感じで始まった。

「あがり！」

最初に俺があがると、次にハルがあがった。

「最初は俺かあ」

トマト君が残り、俺は歓喜した。さあ、どんな罰ゲームかな……？

「……鼻から炭酸飲料を飲む」

「ちょ！待て！死ぬから！そんな事したら死ぬから」

「問答無用！罰ゲームはちゃんとやれ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「次……って鼻痛いんですけど！」

無視して、俺はカードを配った。

流石に二度目の神は降臨せず、皆カードを手に持っている。

しかし、トマト君ババ抜き弱すぎる。俺がババを持ってたらの確にババを持って行ってくれるほどだ。すぐに表情に出るし。

「よっしゃ！あがり！」

「あがり」

「あがり！」

「次は俺か」

トマト君が最初にあがり、キョウ、俺の順番であがった。罰ゲムはハルだ。

「じゃ、引くぞ。……1位の人を殴れ。ってなんじゃこりゃあ！」

「よっしゃ！歯、食いしばれよ？」

「ギアアアアアアアアアアアアア！」

「お、鬼め」

ちなみに俺が書いたものだ。下克上ってやっぱ必要じゃない？

「さ、次行ってみよー」

「あがり」

「よっしゃ！あがり！」

「あがりっ」と

「また俺かよ！」

キョウが1番にあがり、次にトマト君、そして俺だ。

2回連続のハル。まあ1回目はあつて無かったようなもんだし。

「……明日1位の人のパシリとして働く」

「明日かよ……」

ハルの罰ゲームは明日、キョウウのパシリ。
次。

「あがりっ」と

「あがり」

「あぶね〜。三回連続じゃなくて良かったぜ」
「また俺か!!」

俺が1位で、トマト君がまたも罰ゲーム。

「……本日消灯後、女子の部屋に夜這い」

「ふざけんなああああああああああ!!」

「だってそう書いてあるし」

「これ以上嫌われたら俺生きていけないかも知れませんが!!」

「大丈夫だ。これ以上嫌われる事はない」

「もう最大級に嫌われてるって事じゃないですか!!」

「『『『そうだな』』』」

「ひどっ!!」

まあ、明日トマト君がどれだけ引かれるかを楽しみにしよう。
次。

「よっしゃ!!あがり!!」

「あがり!!」

「おし!!あがり!!」

「俺か……」

キョウウが最下位に。

紙を引くのは、トマト君。

「……先生の部屋の扉をノックしてから逃げる」

さつき俺がやったことだ。注意した方が良い。先生達は思ったより俊敏でもうすぐで見つかるどころだったからな。

キヨウは、罰ゲームを実行しに、部屋を出て行った。
暫くしてキヨウが帰ってきたので、ラスト行ってみよー。

「お、また俺が1位か」

「あがり」

「よしあがり！」

「最後はやっぱり俺か！」

俺が1位で、やはりと言うか、トマト君が最下位だった。

「……木刀で思いつきり殴れ」

「ちょ！待ちiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！俺絶対死ぬ！死ぬから！」

「大丈夫だ。台所の黒い悪魔ユキブリよりも高い生命力を持つお前なら。多分5分くらいで起きれるはずだ」

「ふざけんなああああああああ！！」

「うるさい」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

即座に木刀を展開し、思いきりトマト君を殴った。完全に急所は外してあるが、正直5分で起き上がれるかは不安だ。

しかし、本当に5分くらいで起きたのは正直凄いと思ったね。

第十二話 修学旅行その4

一 御坂紗月一

2日目。

トマト君は実際に侵入をしにいったが、途中で先生に見つかったらしく、無残に戻ってきた。ちょっと残念だと思ったのは秘密。

正直なところ、今日は昨日のようにハードな一日ではないことを祈るばかりだ。

あんなのが三日も続けてあるなんて信じられない。

まあ、それはおいといて。今は、自由行動中。

午前中は観光。午後は完全な自由行動となっている。

ちなみに場所は繁華街。正直いつでもも行けそうな気がするが、やはり都会。俺たちの住んでいる町の比ではないので、結構楽しかった。

楽しかった、というのは過去の話。

俺は今人の波に流されてよく分からない所まで来ている。勿論、俺一人だ。

はあ……。一体俺は何時まで流されるのだろう。かれこれ十分くらい流され続けている気がする。

幸い自由行動は長いので、集合場所に後れることはないと思うが、何時までも流されるとこつちとしてはたまったものではない。

少し波に逆らおうと頑張ってはみるが、蟻が立っている人間を押しよけようとするがビクともしないようにまったく意味がないことだった。……自分で言っていて何か意味わかんないけど。

とにかく俺が言いたいのは、無力であること。

そんな馬鹿なことを考え続けていた結果、ようやく人の波から開放された。開放された場所は、大きなデパート前のようなだった。

俺としてはあまり興味がないので、とにかく元の位置に戻ろうと

したが。

「あれ、俺どこから来たんだっけ」

そう。元の位置というのが分からないのだ。しかし！俺には最強の武器がある。

俺は、最強の武器をポケットから取り出した。

「ケータイ電話」

ドラ もん風に言ってそれを起動した。

さつきもドラ もん風に言ったが、ケータイ。こっちの世界のケータイも向こうの世界のケータイも原理は一緒に電波を飛ばすものだ。

ただその電波が持ち主の魔力であり、よっぽどのがなければどこでも会話できる。

そして、ハルのケータイの番号をダイヤルしようとした時のことだった。

突然ケータイが震えだした。

誰から掛かってきたかと思えば、ハルだった。

『もしもし、俺だ』

「誰だお前は！！」

ふざけてそんな事を言ってみたが、向こうは反応できなかったよ
うで、沈黙している。

変な空気を作ってしまったので、軽く咳払いをしてから、話を切り出した。

「悪い。紗月だ。で？何の用だ？」

『ああ。今どこにいる？』

「滅茶苦茶大きなデパートの近く」

『へえ……まあ、とりあえずそれらしいところに向かってみる。動かすにそこで待つてるよ』

「ああ。じゃあな」

電話を切り、ケータイをポケットに仕舞った、その瞬間しゅんに事は起きた。

視界の端に、息を荒げて走っている少女を捕らえたのだった。

その少女は中学生くらいだと思う。肩の近くまである桃色の髪と緑色の瞳をした綺麗な顔立ちの少女だ。

服装は白い薄手のTシャツと、ジーンズという比較的動きやすい服装だった。

最初はなんとも思わなかった。しかし、その少女の後ろには、黒服の男達が5名ほどいた。それも、少女を追っているようだった。俺の頭の中にはハルの「そこから動くな」という言葉はすでになくなっていった。

少女……もとい、黒服の男をコソコソと追っていると路地裏という名の戦場に辿り着いた。

現在地は路地裏の一角。黒服たちは少女を囲むように追い詰めていた。少女は壁を背にして、その顔には焦りの色が見える。それもその筈。行き止まりで少女に逃げ場はないのだ。

追って来たのは良いが、少女を助けたら生きて帰れる気がしない。完全な死亡フラグだ。だが、困っている人を助けるのは常識だ。それが女性なら尚更。

そして、俺は即座に木刀を展開し、駆け出した。

突然後ろから近づいてきた気配に、黒服たちは一瞬驚いたようだが、一応プロらしく、すぐに冷静な判断を下す。

しかし、そのときには、黒服の一人はノックアウト。続けてもう一人の黒服に、横薙ぎの打撃を浴びせる。

即座に三人となった黒服は、俺を挟み撃ちにするような形で、黒い塊……銃を構えた。

そして、黒服がトリガーを引いたときに、俺は素早く大勢を低くして黒服の一人に向かって駆ける。

放たれた銃弾が頭上を通り過ぎるのが感じられた。俺は木刀の柄の部分で殴り、素早く次のターゲットに向かって大きくカーブを描くようにして駆ける。

複数の銃弾が俺に向かって放たれる。しかし、それを全て避けながら、黒服の一人をその勢いのままに切り抜き、最後の一人を蹴り飛ばした。

そして、完全に黒服5人の気絶を確認した後、溜息をついた。

さて、少女を助けたが、関わりはあまり持たないことにしよう。

何だか面倒そうだし。

踵を返して、帰ろうとしたそのときの事だった。

「あ、あの……。その君……」

少女に声を掛けられた。少女の顔には、大きな文字で心配です、と書かれていた。できればこのまま帰りたかったが、こういう場合に無視するのは良くない。

「俺は無事だ。君こそ怪我とかないか？」

「はい。おかげさまで」

「どういたしまして」

俺はおかげさまでと言うのをありがとうと捉え、ぶっきらぼうに

返すと、少女は警戒することなく俺に近寄ってきた。

「私、ヒナ・シロサキ。あなたは？」

「俺か？俺は御坂紗月……じゃねえ、サツキ・ミサカだ」

俺は差し出された右手を握り返すと、柔らかい感触が伝わってきた。

……言うておくが俺は断じて変態ではありません。

なるべく関わらないようにしたかったんだけどなあ……。多分面倒な事に巻き込まれそうな気がしたし。

まあ、過ぎた事をうだうだ言っただって仕方がない。このまま、何も起きなければ良いんだけどな。

第十二話 修学旅行その4（後書き）

ようやく投稿出来ました。

いや、今家大変なんですよ。

調子が悪かったパソコンがとうとう壊れてしましまして……。

更新がかなり辛いです。（泣）

これからも更新速度が上がらないかもしれませんが、見捨てないで頂けると光栄です。

第十三話 修学旅行その5

— 御坂紗月 —

はぁ……。深くはないものの、関わってしまったものは仕方がない。

路地裏を出てすぐに、緊張の糸でも切れたのか、ヒナの腹の虫が喚き、今はファミレスでヒナの昼食を摂っていた。現在は13時半前で、少し遅い昼ごはんという感じだ。

他愛もない話を続けながら昼食を摂り終え、俺は本題に入った。

「……なあ、ヒナ。お前なんであんな怪しい奴らに追われてたんだ？」

その瞬間、ヒナの身体が震えた。

沈黙が流れた。周りの喧騒が良く耳に入ってくる。

沈黙は数秒。そして、ヒナが口を開いた。

「私が偉い人の娘だったらどうする？」

「はぁ？お前が偉い人の娘？そうは見えないんだが」

「見える見えないじゃなくて、そうだったらどうするって」

「うーん……。まあ、自分ができる事をする……か？」

「ふーん。まあ、どうでも良いんだけどね」

コイツの意図が分からん。一体何が言いたいんだろうか。俺が首を傾げていると、ヒナが次の話題を振ってきた。

「紗月の得意な魔法って何？」

「俺か？俺は……そうだな……強いて言えば召喚魔法かな」

「そんな高等魔法が得意なの!？」

「いや、俺は精霊とかは呼べない。無機物だけだ」

「……変な魔法だね」

「それについては否定できないな」

これは本当の事だ。前にも言ったと思うが、先生曰く無機物を召喚する魔法なんて今まで見た事はないそうだ。

それは、俺がこの世界の住人ではないということに原因があるのかもしれない。まあ、正直なところどうでも良いと思うことだが。

「そういうお前はとうなんだ？」

「私も召喚魔法」

「人の事言えねえじゃねえか」

「私は……ううん。何でもない」

それ以降ヒナは口を閉じてしまった。なんとも言えない雰囲気になれず、俺はお金をテーブルにおいて去ることにした。

じゃあな、またどこかで会えるだろ、そうやって俺はそのまま帰ろうとしたのだが。

「待つて。今日だけで良いから一緒に行動してくれない？」

「……別に良いが、午後の自由行動が終わるまでだからな」

「うん。ありがとう」

そこで不意に見せられた笑顔は、ずいぶん可愛かった。それによつて多少、顔が熱くなるのが分かった。

それを隠すように、俺は背を向いて、ほら行くぞ、とだけ言って歩き出した。

はあ……。

レストランを出たのはいいが。

人混みの中では魔法も武器も使うことはできないはずなので、人の多いところに行こうと思ったのだが。

人混みとか関係ないみたいです。レストラン入り口で仁王立ちしてましたよ。黒服のおっさんたちが。

周りには我関せずを貫き通すためか、人っ子一人いない。

店の中からでも逃げようとリターンしようとしたが、窓を叩き割る音がした。おそらく黒服だろう。

軽く舌打ちする。

このまま、ヒナを引き渡せば俺は無傷で帰れることだろうが、そんなことはできない。困ってる人は助ける。あの人に教えられたことだ。

それに、さっきヒナに言った事は嘘ではない。自分にできることをする。それが、お偉いさんの娘だろうがホームレスだろうが同じ。俺は隣にいたヒナの腰に左手を添えて、そのまま肩に担ぎ上げる。ヒナはえっ？と、素っ頓狂な声を上げているが無視して、右手には木刀ではなくナイフを展開。刃物なので、殺すこともできる。

それを逆手に持つ。突くことではなく、掻き切ることに特化した持ち方だ。

腰を落とし、少しでも力を溜め、その力を開放させる。

《御坂流剣術 壱ノ型 幻影》

すべての動作を数瞬で行い、俺は疾風と化した。

黒服の脇をすり抜ける瞬間に、黒服の一人の足を切りつけ、そのまま走り去る。

切りつけた箇所は、アキレス付近。確実に動けなくした。

後ろでは「外だ！追え！」という声が聞こえた。どうしても捕まえないらしい。まあ、捕まらないようにするのが俺の役割だが。

数十メートルの距離を稼ぐと、俺は超スピードの状態を解除した。やはり、数瞬の動作では、力を溜めきれなかったらしい。それに、人を担いでいるため足への負担は酷かった。

何とか、人のいる通りまでは走ってきて、俺は人と人の間を縫うように駆け抜けた。

遙か後ろでは人の悲鳴が聞こえた。後ろの様子は見えないので推測でしかないが、黒服たちは人を突き飛ばしているようだ。

「ったく。周りの人への配慮くらいしろっての。」

俺は軌道を変更し、人のいない路地裏に逃げる。

数百メートル程走った先にはT字路。左に曲がろうとしたが、黒服のおっさんたちが来ていた。道は狭く、脇をすり抜けることはできない。

「即座に体を反転させ、右の道に行く。」

しかし、100メートルほど走ったところで俺はその足を止めざるを終えなかった。

「後ろから来てるよ！紗月！」

「分かってる！」

前方から黒服が来て、挟み撃ちの形になってしまった。先ほどと同様で、道が狭く脇をすり抜けることはできない。

戦えば、脇をすり抜ける必要はない。しかし、人を担いでるんじや戦おうにも戦えない。

そこで俺は、ヒナを地面に下ろし、指示を出した。

「いいか？俺が道を開けてやるから、お前は逃げる」

「え？でも、それじゃ」

「今、俺にできることはこれくらいしかない。後、お前を守りながらだと勝ち目はないからな」

「……うん」

返事を聞いた俺はすぐに《幻影》を使って、数十メートル先にいる黒服達を手に持っていたナイフで斬りつけた。勿論、急所は外し

ている。あつと言う間に全員を動けなくすると、そこからヒナは逃げていった。

こつから先には行かせねえ。

俺は、得物をナイフを木刀に変えて、黒服達と対峙した。

第十四話 修学旅行その6

— 御坂紗月 —

俺は黒服と剣技なしで戦い、戦い終えた後はヒナを追った。所々、俺の服は自分のそれで紅く汚れてしまっている。

黒服は全員気絶させ、路地裏の一角に放り投げてきた。

さて、ヒナは何処だ？

かれこれ5〜10分は探しているが、一向に姿が見えない。

まさか、俺とヒナが会った場所に戻って行ってるんじゃないだろうか。俺とヒナの両方が知っていて、尚且つ見つかりにくい場所といえば、あそこしかない気がする。

そう推理した俺は、デパート方面に足を向けた。

そこには三人の人間の姿があった。

一人は、高級そうなスーツを着こなした二十歳前の俳優でも通じそうな整った顔立ちの青年。

もう一人はおなじみの黒服。

そして、薄桃色の髪をした中学生くらいの力が抜けたようにぐったりとしている少女。

確かにそこにはヒナ・シロサキの姿はあった。しかし、手足を縄で縛られぐったりとしている。

外傷はないが、力の抜けたその体からは生気がまったく感じられない。

ヒナ、と声をかけようとしたが、無駄だと踏んで青年のほうへ言った。

「あんだ……誰だ？」

青年は俺の問いかけに対してポケットに手を突っ込んで笑うように言った。

「人に名を聞く前に自分から名乗るのが礼儀というものじゃないのか？」

カチンと来たが、そこは抑えて冷静に対処する。

「サツキ・ミサカ」

「サツキ・ミサカ、ねえ。オレはトウヤ・シロサキとでも名乗っておこう。名乗られたら名乗り返すのが礼儀だ」

そう言っつて、トウヤは軽い動作でこちらに一步踏み出してきた。

「シロサキ……？」

それは、今俺が助けようとしている少女の姓と同じ。それにわずかな疑惑に確信を持たせるように、トウヤは告げる。

「そうさ。そのヒナ・シロサキはオレの妹だ」

妹ねえ……。

というか、ヒナは一体何者なのだろう。

こんな見事にお坊ちゃんなやつ妹って事は意外とお嬢さまですか？

まあ、どつでもいいけどね。

「でもまあ、これだけのSPを相手にうまくやったものだね。無名のくせに凄いじゃないか」

「そりゃどつも……………」

小さく呟いてトウヤから目を外し、ヒナのほうに目を移した瞬間、ヒナが小さくピクリと震えたことに気づいた。

「ヒナ！」

「さ、つき……………」

「ヒナ！しっかりしろ！大丈夫か！？」

叫ぶようにして声をかけるものの、ヒナは反応しなかった。否、できなかった。反応ができないほどまでに弱っていたのか。

少々怒りのボルテージが上がった。デジタル化すれば、最大50の内、10くらいから20くらいまで。

「そろそろ、放さないと首が飛ぶぜ？」

若干殺気を混ぜて、凄むように言った。

しかし、トウヤは全く動じない。

「はあ？何言つてんだよ。もうすぐ首が飛ぶのはお前だぜ？そもそも、オレがこいつを放す必要はない。もともとオレの所有物だ」

その言葉に、さらに怒りのボルテージが15くらい上がった。

「こいつの所有者？舐めてんのか？人に所有者なんかいねえよ。クズ」

「クズ…………？こいつは社会を支える上でも重要な人物。オレから見れば君は社会のクズだね」

「へえ。妹追い回してる本物の社会のクズにいわれなくなえな」

その言葉に、トウヤは反応しなかった。ただ、額に青筋を浮かべているので、激怒していることは分かった。

「それに、一方的に人を傷つけるという行為もクズの行為だ」

「傷つけてはいない。ただちよつと魔法をかけただけさ。衰弱の魔法……いや、この場合は呪いか」

「それでも兄かお前は？」

「そうなのだから仕方ないだろう？」

「やっぱ何処までもクズだなお前。いや、クズ通り越してカスだな」

俺がそう言い放つと同時に額からブチリという音が二つ聞こえた。

「舐めた真似を……！ウィーク・ミスト！」

俺の周りを視界に影響のないほど薄い霧が現れた。特に何も無い。ただ少し視界が悪くなった程度だ。

「こんな程度の目くらましじゃ全く意味ないぜ？カス野郎！」

「本当に意味がないか、自分の身で確かめるんだな！」

そう言うと、トウヤは自らナイフを懐から取り出して掛かってきた。

別に障害があるわけでもないのに、素早くその突進を避けた。

そして、避けると同時に、手の甲をたたいてナイフを落とさせた後、トウヤの背中を蹴り飛ばす。

霧を突き破ってトウヤは地面を転がっていった。

「馬鹿な……。ウィーク・ミストの中じゃ絶対に避けられないはずなのに……」

「結局何の意味があつたんだ？この霧は」

ウィークだから衰弱？

衰弱の効果がある霧か？まあ、効かないみたいだし、どうでもいいや。

それからただのワンサイドゲームだった。

殴る、蹴る等の暴力の嵐。

それに巻き込まれ、ただただ殴られ続けるトウヤ。黒服、もといSPはヒナを担いでいるままだった。おそらく、ヒナを担いでいるため、巻き込まれないようにしているのだろう。

俺はフィニッシュと言わんばかりの鉄拳を鳩尾に決めると、トウヤは沈んだ。

同じようにしてSPも、ボコボコにしてヒナを助けた。

ヒナは衰弱状態からだいぶ直ったのか、本調子ではないが体が少しは動くらしい。喋ることについては全く問題はないようだった。

そして、まず最初の用件を言おうとしたとき、複数のドンドンドンツ！という銃声が聞こえ、全身に鋭い痛みが走った。

そして、紅い物が宙を舞う。

それは他でもない俺の血だった。

第十五話 修学旅行その7（前書き）

修学旅行編完結です。

第十五話 修学旅行その7

— 御坂紗月 —

全身を走った鋭い痛み。

それに耐え切れなかった俺はその場に崩れ落ちた。

視界が横向きに変わり、ドロドロと紅いモノが広がっていく。

血特有の鉄臭さが、鼻いっぱいに広がり、気分が悪くなる。

どんだん意識が遠のく中、近くでヒナが何か叫んでいるのを聞きながら、銃を構える黒服たち数名と、その中心に男性が立っているのを見た。

男性は、黒いスーツを着ていて、何ともダンディーなおっさん。

ただ、目つきが異様に鋭く、視線だけで人を殺しかねない。

男性が辺りを見回して、地面に突っ伏しているトウヤの姿を見るとため息交じりに一言。

「全く、役立たずにも程がある」

続けて、その鋭い視線をヒナに向ける。

ビクッ！とヒナの体が震えた気がした。

「お父様……」

こいつが、ヒナの父親か……。

俺は少しばかりの戦慄を覚えた。

しかし、俺のそれをよそに、男性は口を開く。

「トウヤを回収し、ヒナは本家に戻せ。以上」

絶対的権力を使った、決定。

しかし、それに水を差した輩がいた。言わずもがな俺。ガクガクと震える足を何とか押さえながら、俺は立ち上がった。

「ふざけんなよ。お前、それでもいっぱしの親かよ！何で自分の子供に向かってそこまで冷たい態度をとれるんだよ！？」

俺が憤りを感じたのは他でもなかった。

自分の子供に対するそのあまりにも冷たい態度。

返事はなかった。ただ、その右手を上げて銃弾の発射命令を出すだけ。

さらに、強烈な痛みが全身を襲い、ビシャツ！と、血の塊が飛び散る。しかし、俺は倒れなかった。

顔が苦痛にゆがむのが分かったが、男性を俺はひたすら睨み続けた。

「何舐めた事言っつてやがる！本当にお前がこいつの親なのかよ！所詮はただのくそつたれ貴族だろうが！」

「小僧。お前誰に口を利いてるのか分かっているのか？」

「そんなの知ったこっちゃないな！俺は親としてのお前に言っただ！お前がいくら偉かろうがそんなもんは関係ないんだよ！」

男性の両目が細まると、黒服が襲い掛かってきた。

「邪魔だ！《彗星》！」

兼を強く地面に叩きつけると、鋭い衝撃波が地面を奔った。

黒服たちが全員吹き飛んだのを見てから、「シロサキ家現当主！一つ申し上げたい事がある！」そう言っつて、俺はヒナに聞こえるように小さく呟いた。

「お前が今やって欲しい事を一つ、あいつに向かって言え。俺が絶対になえさせてやる」

少しの間をおいて、ヒナは叫ぶようにして言った。

「私を……ヒナ・シロサキを本家から出してください！私は、義姉様の代わりなんて嫌です！」

ヒナにとって、とても辛い事を言った。彼女はその願いを言った。だから、辛い事をやってのけたヒナのために、その願いを叶えさせてやる。

しかし、ヒナに対し、男性の答えは、「否。貴様らがなんと申おうと決定は変わらん」というものだった。

即答。

ヒナはその答えが分かっていたかのように俯き、表情を崩している。

俺だって、答えは変わらない。その願いをかなえさせてやる。

「はっ、親としての器が小さいと人としての器も小さい……所詮はそこに転がってるクズと同然か」

それに対し、何、という当主の声に怪訝なものが現れた。表情も怒りの形相に変わっている。

「貴様……。今なんと言った？」

「何度でも言ってる！家柄だけが自慢の小物野郎！」

「舐めた口をきくなよ……！」

当主は懐から銃を取り出し、俺の頭に銃口を合わせる。
それに対する俺は無表情。

「正直な話、俺がお前らが何をやっているのか知らない。けど、お前が世界でも有数の名家のはずだ。だが、名家の当主と言えどこの会ってみれば程度のものじゃないか」

「黙れ下郎!!」

ドン!という銃声が聞こえ、銃口から銃弾が発射される。

俺はそれを自分でも信じられない速度で頭を横に逸らして避けた。

「もう一度言う。こいつのわがままを聞いてやれ。それが出来ないようならただの小物だ」

「シロサキにはシロサキ独自のシステムがある。それは不変であり絶対だ」

「どんなものか聞いてみたいものだな」

「貴様のような無名には分からぬよ」

「へえ、やっぱその程度のものか。そんなものがなければ存続できないようなら、滅びてしまえ」

「……なかなか吠えるな。無名程度が!」

更に怒りの色が強くなっていく。そして、雷鳴のような怒号を響き渡らせた。

怒号を聞いたヒナの身体が少し震えた。

「貴様程度のものが、このシロサキ家現当主を試そうと言うのか!」
「?」

「ああ。その人としての器を見せてみる」

目を離さずに、俺はひたすらこの当主を睨み続けた。

そして、目の鋭い視線が少しずつ綻んでいったのは気のせいではないのかもしれない。

「……私も忙しい身だ。決定を下す。ヒナ・シロサキは本家から出す。以上だ」

その場の俺以外の全ての人間が驚き、表情を崩した。

そして、鋭利な目つきを僅かにだが綻ばせて、ヒナの元へと歩いていった。

「お父様……」

「もついい。お前はもう娘の サヤの代わりではなく、私の姪だ。しかし、懐かしい雰囲気を持つ奴を捕まえたものだな。我が愚弟にそっくりだ」

「叔父……お父様に？」

そういったやり取りをしているヒナと当主は、とても仲の良い親子のようだった。

それから、俺は勿論の事修学旅行三日目を迎えることなく、地元に戻って入院。

一番最初に見舞いをしてくれたのは、ヒナだった。まあ、アリア達は修学旅行でいないので当たり前だけれども。

「紗月、大丈夫？」

「大丈夫だって言いたいところだけど、こんな状態じゃ大丈夫なんて言えないな」

何処の世界に包帯をぐるぐるに巻いて大丈夫だって言う奴がいるんだ。

「ご、ごめん」

「ったく、謝るとこじゃないだろ。俺が勝手に首突っ込んだんだ。ここは、お礼をいうとこだろ？」

ヒナは申し訳なさそうに俯いていたのを一転させ、歳相応の可愛らしい笑顔を浮かべて、言った。

「　　ありがとう」

「ああ、どういたしまして」

ヒナの笑顔に俺も笑顔で返した。何故だろうか。俺は今まで生きて中で一番良い笑顔だった、かもしれない。

「あ、そうだ。私、転入したから」

「は？ごめん。もう一回言ってくれ」

聞き間違いですよ。転入したなんて。だって、見た目完全な中学生だぜ？

「だから、私、学園に転入したから」

「嘘だろ？お前中学生じゃないのか？」

「失礼な事言うなあ！私はこれでも十五です！」

顔を赤くしてヒナが言った。

これでも、って自分の容姿がちよっと幼いの自覚してるんだね。でも、嘘にしか聞こえないぜ。

「お前が中学生……あ、そうか。飛び級だな。すごいな飛び級何て
バーカ！もう知らない！」

俺が言い切る前に、ヒナの鉄拳が顔面にめり込んだ。正直、コイツの拳は銃弾並みじゃね？とか思ったのは秘密だ。

第十六話 学生の試練がやって来た

— 御坂紗月 —

退院から一週間。服の下に隠れているので見えないが、いまだに包帯は取れていない。

ちなみに、ヒナは俺たちと同じクラス。しかも、席は俺の後ろ。更に寮の部屋は0507号室でお隣。誰かが裏で手を回したに違いない。誰かは分からないが。

別にお隣さんとか同じクラスとかは別にどうでも良い。ただ無視できない問題が一つある。家事の能力が皆無なのだ。台所に立った事はないらしいうえに、掃除をすれば物を壊し、洗濯をすれば床は水浸し。

仕方がない、とか言っただけで俺の部屋に居候している。……俺の許可は降りてないよ。

さて、今は元の世界で言う六月で梅雨。梅雨はじめじめしているのが少し嫌いだ。

まあ、梅雨の事なんてどうでも良い。大事なのは、学生の試練がついに来たと言うこと。

人の頭の中の能力を探る忌々しい紙切れ テストだ。テストの日はこれから一週間後。

ちなみに学期末。

期末は実技試験、筆記試験の両方を行う。

そりゃ、テストって大事だろうが、俺達E組はおかしかった。

休憩時間だと言うのに、立っておしゃべりしているものなど数名。他は皆、机の上でせつせつとペンを走らせている。

その理由は朝のHRにある。

このE組は中間テスト（俺がこっちに来る前のことで俺は受けていない）で、他のクラス平均点を大きく下回るクラス平均を叩き出

していたからだ。

これは、学園のイメージダウンにも繋がる可能性を秘めており、大変よろしくないと言う事で、教師と生徒会の会議が行われた。

会議の結果、E組がこの期末テストで上位五位以内には入れないようなら、学園祭で生徒会の運営補佐、その他雑務をさせられる事になった、との知らせを先生から聞いたからだ。

ついでに、何故か球技大会についても同じで、上位三位以内には入れなければ学園祭は雑用に消える。

何！？じゃあ俺はこの世界で最初で最後の学園祭が雑用で終わると言うのか！？

学園祭とは楽しいものはずだ！それが雑用だと！？

その事実を聞いたとき、今日から“学園祭で雑用は嫌だ！お馬鹿さん達救済勉強会In第六学生寮0506号室”を開催しよう、と決心した。

……題名長いな。お馬鹿さん達救済勉強会にしようか。

と言うわけで。

お馬鹿さん達が集まりました。

アリア、レン、ハル、トマト君の4人だ。

雑務その他お手伝いとして、リンとヒナとキョウ。俺は何するのかって？料理と問題作り。

「何で紗月は勉強しないの！？」

「俺は毎日ちゃんと勉強してるから、魔法学以外なら自信あるからな。それと恨むなら俺じゃなくてその愉快的オツムを恨め」

「紗月ってちゃんと勉強してるんだ。何か以外」

「失敬な！」

レンの言うとおり、俺って勉強しないイメージがあるのだろうか。

まあ、ちゃんと毎日勉強するようになったのは、こつちの世界に来てからだ。

さて、勉強会とは言ったものの、ここに集まっているのは、お馬鹿さん達。普段勉強をしていない人達だ。

当然、勉強に対して全くやる気が出ない、またはやっていたとしてもすぐやめる奴らだ。

そんな奴らにやる気を出させるためにはどうすれば良い？と、昼休みの時点で参加が決定していたヒナに相談。

結果。「何か生命に関わることだとやる気出さんじゃない？」と言う事で。

「さて、どうせここに集まっているお馬鹿さん達四人は普段勉強していないだろう？」

コクコクと小さく頷く四人。

「そんな奴らがどうすればやる気が出るか考えた結果！生命に関わることだと絶対にやる気を出すとの答えが出た！そこでだ！今、ここで俺が授業をつぶしてまで作ったテストをする。そして、間違った問題を俺、キョウ、リイン、ヒナに教えてもらったり、自分で調べたりする。その後、再テスト。そして、テストの点が70点以下、50点以下なら命に関わるペナルティーを出す！」

お馬鹿さん達4人が喉を鳴らした。まあ、命に関わると言われれば緊張するのは仕方ないのかもしれない。

「70点以下は夕食の没収。50点以下は、学園祭がなくなる。つっても、行事を中止させるわけじゃない。50点以下の奴を生徒会に引き渡すだけだ」

4人の表情が、絶望に変わった。

「ちなみに、このテストも、再テストも100点満点だ」

リインたちを含め、全員に俺の作ったプリントを配ると、無言でプリントに取り掛かった。

さて、じゃあ、この間に下ごしらえしとくかな。

そして、再テスト後。

人が多いときはカレーとかそんな感じの奴だよな。と言う事で、パンとシチューとサラダとデザート。

パンは手作りだったりする。断じてカレーを作ろうとしたが、米が足りなかったとかではない。

そんな中俺は、全員のテストの採点をしていた。結果は。

「うん、俺の助手四人とアリアが85点以上。お馬鹿さん。よくできました」

と言って、アリアの頭をくしゃっ、と撫でると、顔を真っ赤にしていた。やっぱり小学生みたいな扱いをされると恥ずかしいのだろう。

「次。71点以上84点以下。レンとハルの二人。後でみっちり教えてやる」

「悪い」

「ごめん」

「はあ……。最後に勉強してもほぼ全滅。理解力が皆無のアホンダラ。もう名前を呼ぶ事すら不快になってくる出来だ。てか、死ぬば良いんじゃないか？」

「超ひでえ！明らかに態度違うじゃねーかよ！」

しかし、コイツにはリインがほぼ付きっ切りで勉強を見ていた気がする。どうやらクラス平均を著しく下げた奴らの中の一人はこいつのようだ。

多分、それを知っていてあの腐れ野菜にほぼ付きっ切りで教えていたのだろう。

「つか、あの腐れ野菜、中学生で習うような基本的な問題すら間違っている。」

ホント、中学生からやり直した方が良くないか？

「もう…ダメです…はあ」

「悪かった。ここまでアホンダラだとは思わなかったんだ。お前は良く頑張ったよ」

心底疲れきっているような顔のリインの頭をポンポンと撫でて励ます。

「紗月さん……。私には、何の力もないのかもしれないかも…」

「いや。お前の所為じゃない。さっきも言ったが、腐れ野菜がここまでアホンダラだとは思ってなかったんだ」

「お、お前ら……。すっげえ悲壮感だな……。正直、俺にすんごく失礼だぞ。って、コラ！俺を哀れみの目で見るな！」

多分、リインの脳内で、クラスメイトからボコボコにされる腐れ野菜が息絶えるのが鮮明に映ったことだろう。

「お、俺にだって得意な教科くらいあるんだぞ。魔法実技とか」

「魔法実技って点に入らないですよ？」

全員の冷たい視線が、腐れ野菜に突き刺さる。

「なあ。アリア。入院するとテストが受けられない、って事で平均に算出されなくなるのか？」

「うん。入らないよ。確かにここで撲滅した方が早いかも」

「骨折程度なら球技大会のときにも復活できるだろ」

「ねーよ！ってかお前らほんとに殺気出すのやめろ！マジ危ないって！努力しますからどうか！」

とんでもない勢いで土下座をする腐れ野菜。

「あのな。お前のために言ってる事なんだぞ。もし、お前がテストを受けて、クラスの平均を著しく下げたら、クラスメイト全員から魔法一斉発射されて死ぬだろう。だが、今、痛い思いをするだけなら、死なないで済むんだぞ」

「じゃあ、どうすれば良い!？」

「ん〜。ま、とりあえず、頭と首守れば何とか生き延びれるだろ」

「諦めんなよ！どうしてこんなところで諦めるんだ！」

「何なら、俺が一撃で球技大会前くらい起きられなくしようか？」

「そんな事頼まねえよ！〜二週間ずつと寝てろってのか俺！」

「仕方ないな。じゃ、頑張れ。つっても何も食わせねえけどな。ま

あ、慈悲で生徒会に引き渡すのは原則やめてやる」

「は？原則って何だよ？」

「お前のテストの平均点が60よりも低かったら生徒会に引き渡す」

「この鬼畜男！」

涙声で腐れ野菜は叫んでいた。

腐れ野菜が叫んでいたのので少々気付きづらかったが、平均60点って簡単すぎると思ったのは、これから1分くらい後だった。

時は飛んで、テスト結果の発表。

「……………」

奇跡が…起きた……。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』

あるものは叫び、あるものは歌い、あるものは踊り、あるものは意味もなくボコられていた。

今の現状を作り出したのは、期末テストの結果である。

一年はA組が見事一位、二位にはF組。三位はL組である。

やっぱ改めて思った。クラス多すぎやしないか？まあどうでも良いや。

そして、俺達のクラスは…

なんと学年上から5番目である。

まあ、ギリギリだったけど。

いや、当然の結果といえば、当然なのかもしれない。トマト君の勉強会での成績を思い出す限りはそう思える。

そう考えると…やはり、奇跡は起ったのだろう……。あの成績からトマト君は全教科赤点を免れたのだ。

結果の具体例を挙げると、一位のAがクラス平均、一科目辺り85.3。二位が85.1。

物凄いデットヒートだ。そして、我がクラスの平均が79.6。

基本もできていなかったトマト君がいてこの平均点……。皆の努力が伺える。

ちなみに、上位五位以内に入るというノルマは達成したが、トマト君のテストの結果は平均が60に届いていなかった。

そのため、意味もなくボコられ、屍と化していたトマト君は生徒会に引き渡した。

トマト君！雑務、頑張れよ！！

第十七話 球技大会その1

— 御坂紗月 —

来た……。

俺の最初で最後の学園祭を賭けた、球技大会が。

俺の参加する種目は……とその前に。絶対にツッコまないと欲しい。

一つ目、バレーボール。

ツッコむ必要は全くない。

二つ目、球技戦争。

え？ツッコむしかない？ですよー。

まあ、ルールはいたって簡単。

一人一球のボールが与えられ、それを個人の任意の場所に取り付ける。それを割られると失格。生き残ったものが勝ち。

一言で言えばサバイバル。

ちなみに、魔法があちこちから飛んでくるらしく、命には関わらないが、トラウマにはなるらしい。

この2つ。

まあ、球技大会と言っても、1日しかないので多くの種目はないので仕方ない。と言うか出場種目が2つでも結構凄いらしい。

さて、雲ひとつない青い空のもと、空気の読める校長のありがたいも短いお言葉を合図に球技大会は始まった。

………球技大会は始まった、というのを訂正させていただきたい。これは球技大会ではない。

勿論、訂正させていただいたのはそれ相応の理由がある。と言う事で今日起こった地獄きゅうざいたいかい絵図をお送りいたします。

開始直後に行われた男子のみの種目であるサッカー。

一件普通のスポーツであるこの競技。しかし、大穴が潜んでいた
のである。これは比喻ではない。文字通りの意味だ。

ウチのクラスの一人である、エンドウ君が、魔法で大穴を作り出
したのだ。

ちなみにこれはルール違反ではない。魔法を使ってもよいという
ルールがあるのだから。ただ、それをしていいのは選手限定である。
まあ、当たり前的事だが。

大穴に続いて、ボールを蹴りだすと共に炎球を作り出し、ボール
と炎球と一緒に飛ばすと言う荒業を使うものもいる。それを防ぐキ
ーパー（トマト君）も凄いと思う。炎球を顔面ブロックだったけど
さて、そんな大穴を作り出したりしているウチのクラスは着々と
勝ち上がっていった（腫れているトマト君の顔がちよっと気になっ
たのは秘密）。

しかし、一番可哀想なのは競技に参加していたイケメン君である。
サッカーのメンバーに入っていたイケメン君は、ことごとく大穴、
炎球その他もろもろの餌食になっていったのだ。多分、普段の
恨み（？）だと思う。

しかし、優勝は出来ず、準優勝で終わった。準優勝で終わった理
由としてあげられるのは、鉄壁の顔面ブロッカーのトマト君がダウ
ンしてしまった事。また、大穴でさまざまなイケメン君に下克上し
ていたクラスメートのエンドウ君が疲れでダウンした事もあげられ
る。

バスケットボール。

こちらは男女両方が行う競技であったが、ウチのクラスの男子メ
ンバーは体育館の隅っこで「俺たちにあれが倒せるわけないよ」と
三角座りしながらぼやいていた。

男子のメンバーが、あれ、と言っていたのはD組のスポーツ万能軍団であった。魔法も持ち前の運動能力で避けきり、次々とゴールしていった。ちなみに、と言ってはなんだが、D組の絶対に魔法で運動能力を上げている。ルール違反ではないので何も言えない。

しかし、メンバーはイケメンではなかった。魔法による攻撃が過激じゃなかったのはその所為だと思う。

女子の方も男子同様過激だった。

人気というのが仇になるなこの大会。

バレーボール。

俺が参加した競技。

ルールは15点で一セット。先に2セット取った方が勝ちである。参加した俺が言うのもなんだが、これは酷い。

バレーボールと一緒に炎球、氷塊、その他もろもろが同時に飛んでくるのだ。

しかも、うちのチームの中にはキョウがいたのだ。あのクールなイケメンが狙われないはずもなく、かなりの量の魔法が飛んできたのだった。しかも、そのキョウの近くにいたせいか、俺にも流れ弾が。

まあ、ちゃんと避けてたけど。ただ、正直なところ、俺は絶対イケメンの部類には入らないと思うので、キョウのせいだ。間違いない。ちょっとあいつのクールさを恨む。

ではバレーの途中中継。
ただいま、一年男子バレー決勝。13-10で俺達E組が勝っている。

ただし、それは得点上での話。

魔法による攻撃の量と質はこちらとあちらでは天と地ほどの差がある。

原因は俺とキョウが遠距離系の魔法が使えないからである。

しかし、たった二人の違いでここまでの差があるとは思わなかつ

た。

魔法の量は3対7と言ったところか。

こちらのサーブ。サーバーは俺。

サーブ中は相手への魔法を当てる事はできない。しかし、当てなければいい事なので、相手は大量の魔法を俺に向かって撃ってきた。しかし、当たらない魔法なんぞ怖くはない。

普通にサーブを打つ。狙うのは俺から見て、右後ろの魔法による攻撃を多く行っている者。

しかし、そいつは魔法による攻撃を休める事はなかった。そいつの横にいる魔法をほとんど撃ってない者がレシーブをしたからである。

そして、うまくスパイクにつなげてきたが、魔法をほとんど撃たない俺がそれをレシーブする。

スパイクと一緒に飛んでくる炎球や氷解はサーブの時と違って俺を狙っているものであり、恐怖感がないかと訊かれればそれは否定する。

しかし、魔法で相手に攻撃できない俺ができる事はできる限り多くのボールを拾う事。

そして、俺の高くあげたボールはネット前のキョウの頭上へ。

キョウはそれをジャンプして、叩きつけるように打つ。

これで14-10でマッチポイント。

サーバーは続いてもう一度俺。

先程と同様、普通にサーブを打つ。狙いについても先程と同様。

先程と同じ攻撃。

しかし、違うことが一つだけある。

スパイクの飛んでくる方向と、魔法の狙い。

スパイクは完全にキョウを狙っているもので、魔法についてはすべて俺を狙っているものだった。

それを避けようとしたが、途中で体勢を崩してしまった。

しかし、このままでは魔法に直撃する恐れがあったため、つい無

理な避け方をしてしまった。

その瞬間、足を捻っただらしく、激痛が走った。

しかし、走れない事もない。走る激痛に少し顔を歪ませて、体勢を元に戻しボールの落下点に立ち、トスをあげた。

そして、キヨウのスパイクが相手のコートに突き刺さった。

まあ、こんな感じで俺達は見事優勝した。まさか足を犠牲にするとは思わなかったが。

第十八話 球技大会その2

— 御坂紗月 —

バレーボールは終わった後、俺は保健室に向かっていた。

しかし、足を捻っているがために、ゆっくりと足を引きずる形で歩を進めていた。しかも、バレーの会場から保健室までは遠い。

はぁ……。と溜息を吐きながら女子バスケットボールの会場である大講堂を横切る。

ある程度進んで気付いたのだが、大講堂の戸は開いており、魔法が稀に戸から飛び出している。

……戸はちゃんと閉めるよ……。魔法が外に飛び出してるから。

しかし、また戻って迂回するのは大変だ。

仕方なく戸の前だけ急いで走ろうと決意し、ゆっくりとした歩みを少しだけ速めた。

そして、戸の前に差し掛かったとき、痛む足を我慢しながら走り始める。しかし、走ればたった数歩で通れる幅であるにもかかわらず、俺は脚をもつれさせた。

嘘だろ！？しかも、持ち前の不幸体質を発動し、倒れていく身体に高速で飛んできた炎球が直撃。

俺は意識を失う……。事が出来なかった。

何でって？脚に直撃したから。激痛に激痛が重なり、視界が潤んできた。

痛いです。凄く痛いです。痛すぎて動けません。誰か！助けてください！

しかし、そんな心の叫びが届くはずがない。声に出してないのだから。

俺の脚に魔法を直撃させた人は俺の存在に気付いていたのだろうか。まあ、答えは否だろう。この球技大会は目の前の種目の事で精

一杯なのだから。

さて、どうしたものか。

いつまでも講堂横でうつ伏せになってる場合じゃない。しかし、片足だけで立つのは不可能だ。

やっぱり、ここで誰かに気付いてもらえるまで待っていていようかと高をくくったときの事だった。

「こんなところで何をしている？」

と言う救いの声がかかった。

上半身を少し持ち上げて声のした後ろを向くと、漆黒の瞳とそれと同じ色の髪をポニーテールにした少女が立っていた。

幾分か年上に見えるため、おそらく先輩だろう。

「見て分かると思います」

「いや、全く分からん」

先輩は手を軽く左右に振り、分からないとジェスチャーしながらそう言った。

うーん。分かんないかあ……。

それじゃ、説明するか。

「私^{わたくし}、サツキ・ミサカはバレエのときに足を捻り、その痛む足を押さえながら保健室に向かっていたのですが、ここを通りがかるときにこけてしまって動けなくなった、と言う事です」

「要は、動けないんだな？」

「単刀直入に言いますとそうなります」

呆れたように軽く目を細めた後、俺の前に移動すると先輩は手を差し出してきた。

「ほら、？まれ」

「え？良いんですか？」

「？まれといっているだろうが。他者からの好意はありがたく受け取れ」

「ありがとうございます」

先輩の手を掴み、立ち上がる。片足を庇いながら立つというのは辛かったが、助けがあっただけよしとしよう。

「保健室に向かうんだっただな。肩を貸そうか？」

「いえ、俺一人で行きますんで、いいです。先輩も暇じゃないでしょう？」

「暇だから一年生のバスケットボールを見に着たんだが、平気なら良い」

「じゃ、またどこかでエッ！？」

ただ振り返ろうとしただけの筈だが、我ながら酷い声を上げて崩れ落ちた。

ヤバイ。脚に全く力が入らない。

「はぁ……。だから肩を貸してやると思ったのに」

「すいません。返す言葉もないです……」

再び差し出された手を掴んで立ち上がる。

「全く……。ほら、肩を貸してやろう」

「いや！良いです！肩は貸してもらわなくても！そこらの男子を呼んでみてください！そいつと行くんで！」

「好意は受け取れと言っただろう？」

「いや！良いです！マズイですって！精神衛生上良くないですし！」
何を言い出すのか、この先輩は。
首を軽く傾げ、また呟く。

「別に問題はないと思うのだがなあ」

「いや、ホント良くないですから。そこら辺の男子呼んできてください。あ、先生でも良いです。女性でなければ」

「ホモなのか？」

「だから違いますって！先輩は年頃の男子と女子が密着しているのをけしからんとも思わずに黙ってみていられますか！？」

「ん？過度の接触でなければ気にしないが」

「はあ……。何かもう疲れたんで単刀直入に言いますと、先輩がなんとも思わなくても周りの人はそうは思わないですよ」

「そうか。そんなに私の肩を借りるのは嫌なのか」

「い、嫌と言うわけではないんですけど」

「それならいいではないか」

「先輩はちゃんと俺の話を聞いてますか！？」

先輩は俺の話を聞くつもりがないのではないのだろうか。

「私に任せておけば何とかなるだろう」

「その自信はどこから湧いてくるんですか！？」

「知らん。だが何とかなると思ったんだ」

もうダメだ！この先輩を論せる気がしない！なんて頑固でお人好しな人なんだ。

もう俺から折れて肩借りようかなあ。先輩も何とかなるって言うてるし。

「やっぱいいです。肩貸してください」

「それでいい。全く、人の好意は素直に受け取れ」
「すみません。これからはそうします」

そう言った後、先輩の肩を借り、保健室へと歩き始めた。

無事に保健室には到着したが、周りからの視線がかなり痛かった。
やはり、あまりよく思われなかったらしい。

第十九話 球技大会その3

— 御坂紗月 —

現在地は保健室。

ちなみに先輩はもうどこかへ行った。

そう言えば名前聞いてないなあ。どっかであったら聞こうか。

さて、どうしてか分からないが、俺の足には先生の治癒魔法が効かなかった。修学旅行のときといい、俺には魔法が効かないのだからか。

しかし、効かないのであれば、炎球や氷塊に当たっても痛みは感じないはずだ。

……分からん。まあいいやこの話は置いて。

仕方ないので痛みは薬で抑えていた。念のためという事で松葉杖をもらった。

この調子じゃ球技戦争には出れそうにないが、あまり球技大会での成績がよろしくない。俺たちのクラスは上位のクラスに入らなければならぬので、少しでもポイントが欲しい。球技戦争には出づもりだ。

無茶するなといわれそうだが、クラスの足を引つ張るなんてまっぴらごめんだし、学園祭というのがとても楽しみだ。

まあ、多少の無理はしても、無茶さえしなければ問題はないだろう。

さて、これからどうしようか。

昼飯時にはすこし早いうえ、特別腹が減っているわけでもない。

大会の様子を見に行くか、どっかで休憩するか。

ただ、様子を見に行ったとしても、また教室に行くまで面倒だ。というわけで、どっかで休憩する事にした。

しかし、休憩の場所と言うのが思いつかない。とりあえずこの特

別校舎から教室のある第三校舎に行こうか。最悪教室で寝ればいい。

第三校舎に着くまでに、休憩できる場所が一つだけ思いついた。第三校舎の屋上だ。かなりベタだとは思うのだが、それくらいしか思いつかなかったのだから仕方ない。

松葉を突くのをやめ、階段を上がっていく。

痛み止めが効いていて、歩くたびに痛みが走らなくて良かった。

屋上の鍵は閉まっていたが、それは想定範囲内。

鍵穴の中で鍵を形作り、そして捻ると、ガチャリ、という音と共に屋上の扉が開いた。

屋上は基本的に開放されており、ベンチなども設置してある。

俺はベンチに横になり、腕枕をして、眠ろうと目を瞑る。

その数十秒後には、俺は意識を手放していた。

俺が起きると、十数人の何だか良く分からん男子に囲まれていた。

見知った顔は一つもない。

俺、何かした？

起きたばかりの回らぬ頭を無理矢理回してこうなるであろう原因を検索したが、検索結果は0だった。

「……現状が読めん。そのリーダーばい奴、説明してくれ」

「リーダーばい奴とはなんだ！僕はれっきとしたリーダーだ！」

俺はちょうど中央に立つ黒縁眼鏡を掛けた平々凡々な顔をしたリ

ーダ ばい奴に説明を求めた。

しかし、帰ってきたのは説明ではなくツッコミ。

しかも、ツッコむとこ違うんじゃないか？

「ツツコミとボケ混ぜるなんて器用な真似しなくていい。説明しろ。俺に非があるようなら謝る。いや、むしろ非とかなくても謝るからさっさとどっか行ってくれ。俺は眠い」

「説明しろと言ったりどっかに行けと言ったり、どっちかにしてくれない？どっか行くわけにはいかないから僕は説明するけど」

やっぱり説明もいらなから早く帰ってくれと言うべきなんだろうか？でも、この人両手を大袈裟に広げて何か熱く語ってるし。

聞いてないから内容が全くわからないんだが。

まあ、いいや。話が終わったら適当に謝ればいいし。

そういえば、冷蔵庫の中にちゃんと晩飯の分の食材入ってるかなあ。

そうだ、今日はカレーにしよう。それも特別スパイシーな。

いや、あえて料理開発に勤しんでみようか。

……うん。

まあそんな感じで利く気ゼロの状態でめがね君が熱く語るのを終えるのをまっていたわけだが、俺が思考を止めても眼鏡君は熱く語るのをやめなかった。

いい加減やめて欲しいんだが。

このまま待つても仕方ないし、非を認めたフリをして逃げようか。うん。そうしよう。

「もういい。俺が……悪かった。非を認めるよ」

軽く頭を下げて、謝る。

我ながら素晴らしい演技だったと思う。今度劇とか出てみたいかも。

「そう。認めるんだ。じゃ、これからミカミ様に近づくのは控えてね」

「分かった。約束しよう」

そう言った後で、ボソリと付け加えた。「……そのミカミ様って
いう奴が誰なのか知らないけど」

まあ、有名人ばいし、誰かに聞けば分かるだろう。

「話は終わりだろ？じゃ、さっさとどっか行ってくれ。こちらら眠
いんだ」

「あ、そうそう、球技戦争出るんだってね。今が昼休憩だからもう
すぐ始まるみたいだよ」

「これは親切にどうも」

そして、男達はどこかへ行った。

正直なところ、なんで一人で来なかつたのかが分からない。一人
で行動した方が速いだろうに。まあ、いいや。

とりあえず球技戦争の準備しようかな。準備といっても弁当を食
べるだけなんだが。

第二十話 球技大会その4

— 御坂紗月 —

まもなく、闘技場で球技戦争が始まる。

俺は闘技場の中央からはなるべく離れ、すぐに逃げられるようにしていた。

まあ、まだ始まったわけではないのでそう身構える必要はないのだが。

何となく雲ひとつない青空を睨みつけながら、球技戦争についてのおさらいを始めた。

球技戦争は一言で言えばサバイバルだ。

身体の任意の位置に取り付けられた球を割られると失格。最後まで生き残るか、制限時間の間逃げ続けられれば、ポイントがもらえる。

因みに、制限時間は15分。

まあ、要は生き残ればいいんだ。無理して他人の球を割る必要はない。

しかし、面倒な事がある。

この種目に学年は関係ないということだ。

つまり、6年が本気で1年を叩き潰しに来る事もある。

ただし、5、6年生は各クラス参加できるのは1名のみ。3、4年生は各クラス2名。1、2年生は各クラス3名と、数的には学年が下になるほど有利になる。

数的に有利にはなるが、技術的には負ける。

まあ、70名以上の参加者がいるわけだし、俺は逃げ続けさせてもらうが。

球技戦争についてのおさらいは終わり。さて、いっちょ逃げますか。

そして、球技戦争の始まりを告げる笛のピイイイッ！という音

が闘技場中に響き渡る。その瞬間、俺のいる方へ炎球、氷塊、泥団子、その他もろもろが飛んできた。

こうなる事は予想の範囲内。俺は即座にしゃがんでそれらを避ける。

しゃがんで全て避ける事ができたのは、俺が球を取り付けている位置が左肩だったからだ。

当然、選手は一人でも多く尚且つ早く潰そうとする為、球を狙ってくる。それに対し、球をなるべく上に取り付ける事で、しゃがむだけで飛来物を避ける事ができる。

しゃがんだままでは危険なので即座に右に跳ぶ。

俺はその瞬間に魔法で黒い拳銃を展開し、人が多く集まっている中央に向けて適当に打つ。展開したのはオートマ。当然、殺傷力はゼロ。銃弾のリロードは必要ない。銃を消して再展開するだけなのだから。

ちなみに、この銃は何でもありで、三点バーストどころかフルオートだって可能だ。しかも、発砲時に音がほとんど鳴らない。内部構造はマル秘だ。

剣術使いの癖に銃器をつかうのか！と言っつつコミはなしでお願いします。

俺の放った銃弾は5年生の生徒の球に当たった。

おお！狙ってなかったのに当たったよ。

「5年D組、脱落」

脱落を告げるアナウンスが闘技場に響く。

早くも1組が脱落した。脱落させた俺だけ。

痛み止めをしているとはいえ、左足にあまり負担をかけるわけにはいかないので右足を着地させてから左足を地面につける。

そのまま走って、その場を離れる。

しかし、正面から弾丸のごとく駆けて来る者がいた。

漆黒のポニーテールを文字通り尾の如く靡かせて走る少女。その少女の左手には日光を跳ね返し白銀に輝く刀が握られている。

「サツキ・ミサカ。その左肩のお命頂戴する」^{ポール}

俺は銃を捨て刀を展開し、左肩に振り下ろされる刀を受け止めた。ガキンツ！と派手な金属音を立ててぶつかると2本の刀。それと同時に俺は顔を一瞬だけしかめた。簡単ではなくても捌けると思ったのだが、その一撃は思った以上に重かったのだ。

純粋な腕力勝負で負けているのか？

しかし、あの細腕から信じられないほどの力が伝わってくるものだろうか。

俺は先輩の刀を受け止める事はできたものの、押し返せなかった。むしろ、押されている。

少し不味くなってきたので、俺は腕を捻って先輩の刀をいなし、バックステップである程度の距離を取る。

「ほう、なかなかやるではないか」

「先輩こそ」

そして、再び先輩が踏み込んできた。左肩に振り下ろされる刀。速度も重さも尋常ではない。俺は右に跳んで刀を避け、胸の中央やや左に位置する球を狙って刀を横なぎに振るう。

先輩はそれを後ろに飛んで避け、左の袈裟切り。

俺はそれに対し、剣術で応戦した。

《御坂流剣術 六ノ型 流水》

右足を軸に回転して刀の軌道から体を外し、裏拳の要領で刀で薙ぐ。

しかし、先輩は袈裟切りを俺の球の前で寸止めした後、バックステップで大きく後ろに引き、そして弾丸の如く突っ込んで来た。

さっきの袈裟切りはフェイントだったのか？

《流水》は後の先の攻撃に当たる。

相手の攻撃とほぼ同時に繰り出すカウンター系統の剣技。

しかし、それは避けられ、今は一瞬とはいえ、完全に体が死んでいる状態。

避ける手段は、ない。

そして、パン！という球の割れる音が周囲に響いた。

第二十一話 球技大会その5 (前書き)

非常に短いです

第二十一話 球技大会その5

— 御坂紗月 —

球の割れた音は二つ。

俺の左肩にあった球と、先輩の心臓の辺りにつけてあった球。

「「!？」」

驚愕したのは俺だけではなく、先輩もだった。

驚きに目を見開き、現状が理解出来ずにいた。

俺が反撃したというセンは間違いなくない。むしろ反撃できた方がおかしいと思う。

では何が先輩の球を割ったのか。まさか、俺に奇跡の力が備わったとか、何か良く分からんオーラで球を割ったのか。

考えている事はほぼ同じなのだろう。

先輩は球を割られたときから硬直している。

「3年A組、1年E組脱落」

俺は不意に聞こえたアナウンスではっ！と我に返った。

我には返ったが、先程の答えは出てこない。何かもやもやしたつかえが取れないまま、俺の球技戦争は終わった。

球技戦争が終わった後、閉会式が行われ、結果発表で上位にいた事から、俺たちは学園祭が雑用と化してしまわなかったことに胸を撫で下ろした。

因みに、あの時何が先輩の球を割ったのか聞いたところ、流れ弾ならぬ流れ魔法らしい。

そんな簡単な事だったのかと正直落ち込んだ。
いや、奇跡の力が備わったとかの方が恰好いいと思うだろ？

「この馬鹿野郎があ！」
「ひい！」

只今、アリアによる俺のための説教が何故か俺の部屋で行われていた。

情けない悲鳴を上げたのは、痛み止めの効果が切れて、足に激痛が奔ったからである。断じて説教をしているお隣さんが怖かったわけではないです。本当です。

「毎度毎度同じ事繰り返してー！」
「毎度毎度でなんだよ……。俺、何か悪い事してんのか……？」
「無理すんたって言っとるんじゃないやボケエ！」
「……すいませんでした」

くそう。これが年下に説教されるっていう感じなんだな。何か屈辱的だ。今すぐ、ちんちくりんの分際で！と言いたいところだ。
しかし、こつちに来てから何かと無理している気がしないでもない。

「夏休み近いし、夏休みにどこか連れてってくれるなら許してやらんでもないかなあ？」

「……善処します」
「夏祭りとか、旅行とか？」

「……できれば夏祭りで」

旅行なんて洒落にらんのですよ。経費的な意味で。

そういえばもうすぐ夏休みかぁ。そーなのかー。入院はしないようにしないと。でも、どーせ何かあるんだろーな。なるべく宿題とか早く終わらせないと。

説教？をBGMに、俺は夏休みについて考えていた。

全て棒読みなのは、嫌な予感がピンピンにしていたからだった。

第二十二話 夏休み開始！ 海その1

— 御坂紗月 —

終業式も終わり、無事夏休みに入った。

今日から夏休み。ハルとレンは夏休み中ずっと実家の方で過ごすそうだ。まあ、夏休みというのはあつと言つ間に終わるものだ。どうせすぐにまたいつものメンバーで過ごすことになるだろう。

さて、現在地は海。何故海に来たかと言つと、まだ夏休みが始まったばかりだというのに女性陣（アリアとリイン）がどこか行きたくないあゝ。などと呟いていたからである。しかし、どうしようかと迷っていた。

そこに、夏と言えば海じゃない？というヒナの提案により、行き先が決まった。勿論、他にも遊園地等の提案もあった訳だが、今日は暑いから、という事で結局海になった。

「うお、人が多いな」

「そうだな」

「おお！向こうに美人さんがいたぞ！俺、行って来るぜ！」

「ああ、そのまま帰ってくんなよトマト君」

雲ひとつない青い空の下、トマト君は砂煙を上げてどこかへ走っていった。どうせ、撃沈して帰ってくるに決まっている。

とりあえず場所取りをする為に、『よさそう』なところを探す。だが、その『よさそう』というものの基準がいまいち分からず、結局、適当な場所にシートとパラソルと立てたのだった。

パラソルを立てている途中にトマト君は帰ってきた。やはり撃沈していた。

「もう、帰っていい？」

「奇遇だな、トマト君。俺ももう帰りたくなってきた」

「お前等、俺等が場所取りしてから五分も経ってないぞ。暇なのは否定しないが」

野郎三人がシートの上で寝転がっているというのは見ていて残念な光景であると断言できる。野郎三人じゃ華がない。寂しさしかない。

まあ、それが分かかっていてトマト君は帰りたいたったのだろう。もう、このまま寝ようかな。

そう思って本格的に目を瞑り、更に一分くらいした後「お待たせ」という聞き覚えのある声がした。やっと着替え終わったのか。

体を起こし、声のした方を向くと、そこには案の定アリア達が立っていた。

「おう、待たされ」

待たされた、という言葉は最後まで出てはくれなかった。

そう。見惚れてしまったのだ。それは、あれだ。健全な男子なら仕方ない。そう！仕方ないのだ！（大事な事です。覚えておいてください。でも、テストに出る可能性は限りなく低いでしょう）

アリアはの水色の水着の上に白いシャツを着ている。何故か赤いカチューシャは付けたままだ。リンは海の中に入る気がないのか、白いワンピースを着て麦藁帽子をかぶっている。ヒナはオレンジの水着を着ている。

何と声を掛ければいいのか分からず、妙な雰囲気が見回りを包む。たった一秒ですら一分くらいに感じられる。

助け舟は？と思い、目だけで辺りを見回す。しかし、誰もいない。そう言えばさっき、ジュース買って来る、といってどこかへ行った

のだった。

「紗月、似合ってる?」

頬を赤らめ、もじもじしながらじつと見つめてくるアリア。
ヤバイ。目が合わせられん。しかも、頬を赤らめているせいでこ
っちが緊張してきた。だが、どうにか答えねば。

「え?あ、おう、似え…似合ってる」

緊張のあまり噛んでしまった。しかも、噛んだ事による恥ずかし
さが重なって更に顔が熱くなった。

だが、似合っていると言われたからだろうが、アリアは小さく笑
みを漏らしていた。

「私はどうですか?」

「え?ああ、可愛いんじゃないか?」

流石に緊張しないとさえ言えば嘘になるが、先程よりは耐性ができた
ことで噛む事もなかった。

リンもどこか嬉しそうで、小さくガッツポーズをとっていた。

「私は?」

「似合ってる」

三人目ともなれば緊張も解けて、顔の火照りも取れたようだ。ま
あ、時間の経過もあるだろうが。

さて、変な空気もどこかへ行ったし、とりあえず遊ぶかな。

それから三十分くらい。

今となつてはやつている事はばらばらで、ヒナは何処からか浮き輪を取り出し、浮き輪の上で気持ちよさそうに浮いていた。アリアは砂のお城ならぬ砂の人形を作りを作っていて、小さな子供たちが彼女を囲むようにしてそれを見ていた。

トマト君はどこかへ消えていて、キヨウはスイカ割り大会に出ている。何でそんな大会があるのかはさっぱりだし、そんな大会に出るキヨウの意図が分からない。

リンはパラソルの下で本を読んでいた。

そして、俺はというと、リンのパシリでかき氷を買って来ている途中だ。

両手に一つずつストロベリーのシロップがかかったカキ氷の入っている容器を持って、パラソルの立ててあるところに戻ろうとした矢先。

ここで問題が起こった。

俺は一体、これから何をすれば良いでしょうか？

- 1 ・何か男に囲まれているリンを助ける。
- 2 ・浅瀬で溺れている子どもを助ける。
- 3 ・海の家で酔っ払っているおっさんを黙らせる。
- 4 ・砂浜に埋められて出られなくなっているトマト君を助ける。
- 5 ・1〜4を全て無視。

どれ？

まず1は助けたほうが良いと断言できる。

2は正直幼児でも足の付くくらいの浅さであり、溺れていると言つよりもじたばたしているだけなので助ける必要なし。

3、4は無視する方向で。

5は1が少し無視できない状況にあるので却下。

と言っわけで、またゴロツキさんと戦わなければならぬよつだ。
あれ？最近戦ってばかりじゃないか？

第二十二話 夏休み開始！ 海その1（後書き）

遅れてすみませんでした。

紗「言い訳にしか聞こえないかもしれませんが原因を聞いてあげてください」

最近、家庭の事情でパソコンが触れない状況にあります。

その上、僕は携帯を持っていないので執筆がなかなか進みません。

今後遅くなるかもしれませんが完結までは執筆を頑張りたいと思いますので、どうぞこれからも応援よろしくお願い致します。

第二十三話 夏休み開始！ 海その2（前書き）

短いです。

第二十三話 夏休み開始！ 海その2

— 御坂紗月 —

最近戦ってはっかりだなあ。

そう思いながらも、かき氷を持って戦い（あくまで助けるため）に行っている俺は何なんだろうね。

とりあえず、カキ氷が落ちたりするともったいないので早歩き程度に抑えてラインの元へ行く。

頭数はひい、ふう、みい……五つか。ある程度近づいたところで声が聞こえ始めた。

「だからさあ、一緒に遊ぼうって行ってるじゃ〜ん。一人で本読んでもるのも楽しくないでしょ？」

男の猫撫で声なので聞いていて腹が立つ。キモチワルイったらない。まあ、人それぞれだろうが俺は嫌いだ。

話はかなり変わるが、ナンパってかなり勇気ある行動だと思う。そりゃ、迷惑だしむかつくが、赤の他人に話しかけるところとかが勇気あると思う。俺には無理だ。

その勇気と行動力を別のところに活かせばいいだろうに。

もうほんの三メートルくらいまで近づいてきたのでふざけた思考を止めて、中央にいてリーダーっぽい男の特徴を見る。

髪は金髪……って、こっちの世界じゃ髪を染めてるのか染めてないのか分からん。とりあえず染めてる事にしよう。

後は、もやし。肥満男。モヒカン。口、鼻、耳ピアス。

うん。普通だ。しかもあんまり強くなさそうだし。

「Excuse me?」

「ああん？」

あれ、さっきの猫まで声は何処に？まあいいけど。

「She is my friend. Please go somewhere. (彼女は私の友達です。どこかへ行って下さい)」

「ちゃんと喋れゴルア！」

「I'm sorry. It was a little difficult ridiculously. (悪かった。馬鹿には少し難しかったか)」

「ちゃんと喋れつつただろうがカス！」

「やっぱり馬鹿には通じないか。結構簡単だったんだがな。まあいいや。直訳すると俺の連れだからどっか行けってこった」

「なんだ？ヒーローにでもなったつもりか？」

「NO, NO, NO. 怪我させて面倒起こすのは嫌だし。大体、ここは俺が取った場所なんだよ。分かったらどっか行け」

「ふざけんなよ！」

殴りかかってきたモヒカンを蹴り飛ばし、肥満男にぶつける。モヒカンと肥満男は一緒に砂の上に倒れた。

続いて、ピアス男の顔面に回し蹴り。もやしにはハイキック。

最後以外はかなりの手加減をしているので、そんなに痛くないだろう。

「お前！俺等に喧嘩売った事を」

「後悔させてやるっていいんだろ？でも、かなり手加減して」

セリフの途中で背後に殺気を感じた俺は即座に身をかがめて、後

る回し蹴りを放つ。

とっさの事であまり加減できなかった所為で男は10メートルは吹き飛び、泡を吹いていた。

「やべ。吹き飛んじまった」

「……………」

口をパクパクとさせて何も出来ない様子の金髪。お？これは使えるのではないかと思い、俺は金髪を笑顔で脅す。

「一応最後以外は手加減してたけど、次はあれと同じになるから。と言っわけでさっさと消えてくれ」

脅しを引き金に弾ける様に移動し始めた男達。そして、周りから色々な言葉が聞こえてきた。人だかりが出来ていたようだ。

あーあ、結局面倒な事になってるんじゃないか。

第二十三話 夏休み開始！ 海その2（後書き）

とりあえず書けたので投稿しました。

まだ自由に使えないので更新ペースは遅いですが、応援よろしくお願ひします。

第二十四話 夏休み開始！ 海その3

— 御坂紗月 —

俺のごろつき退治によって出来ていた人ばかりもなくなってきて、やっと自由に動けるようになった。

ついさっきまで、小さな子供から大の大人までが腕試しだ、とか言って喧嘩を売ってきていたのだ。一つも買わなかったけど。

そんなどうでもいいことはさておき、俺達は何をしようか迷っていた。

さっきのように個々で好きなことをやるのもいいが、せっかくみんなで海まで来たのだ。全員で何か遊べることはないか考えていた。そして、ビーチバレー、ドッジボールなどが候補となり、どれをしようかということに迷っていた。

「やっぱりビーチバレーの方がいいと思います。ドッジボールはちよつと……」

「俺はどっちでも構わない」

「私もどっちでもいいよ」

「断ッ然ビーチバレーだ！」

「私もバレーかなあ」

「バレーは嫌だ」

上からリン、キョウ、アリア、トマト君、ヒナ、俺の意見だ。バレーをしたいという意見の方が多い。しかし、俺はできればバレーはしたくない。理由として挙がるのは先の球技大会でバレーはやったのと、あのときのように怪我をする可能性があるという事。怪我はしたくないのだ。

しかし、このままでは時間がなくなってしまう。俺も個々で遊ぶ

よりも大勢で遊ぶ方が好きだ。でも、バレーは嫌だから絶対に折れない。折れてたまるかっ。

「おい！この調子じゃ時間なくなっちまう！バレーにしようぜ？」
「嫌だ」

「そっぴらずに。な？」

「嫌なもの嫌なんだ」

「……………」

にらみ合う俺とトマト君。俺は絶対に折れない。大事な事なので2回言いました。

「じゃんけんだ！俺が勝つたらバレー！お前が勝つたらドッジボール！これで文句ないだろ！？」

「却下だ！」

「何だよ！？運任せの勝負だろ！？」

「俺に勝ち目がねえんだよ！なんたって不幸が売りみたいなものだからな！」

「自慢するところじゃねえし！」

とにかく話が脱線して何をして遊ぶのが全く決まる気配がない。本当なら折れてもいいが、バレーと言う種目だけは別だ。何があっても折れるものか。

「いい加減にしろやあああ！！！」

突然聞こえた怒声に俺とトマト君はビクリ、と肩を震わせた。

この声を発した者は……………。

「お前は皆で遊ぶ気あるんか！？」

「はい!？」

アリアだった。何か滅茶苦茶怒ってる。もう目を合わせたら殺されるんじゃないか？

いや、しかし折れるわけにはいかない……!

そして、反論しようと思った矢先。

俺は反論の言葉を飲み込んでいた。理由は簡単。アリアの目はもう鬼でも泣いて逃げそうなくらいに怖かったのだ。

そしてその恐怖に負けた俺は……折れていた。

「……分かった。バレーでいいぞ。でも一つ条件がある。魔法は無しにしてくれ」

「それじゃ、決まり」

そして、暫く経ちバレーのチーム分けも終了していた。

俺のチームのメンバーはアリアとリイン。

敵はヒナとトマト君とキョウ。

因みに罰ゲームと言うものが存在しているが、それは後のお楽しみだ。

線を描いて……。試合開始!

サーブはアリアから。

高くビーチボールを上げてジャンプし、叩きつけるように相手のコートへとボールを打った。

「おっしや!捕るぜ!」

ボールが落下するであろう地点に立ったトマト君がレシーブの構

えをする。しかし、アリアは叩くところを誤ったのか、ボールに不自然な回転がかかっていたようで。

「へブウー!!」

軌道が変わりトマト君の顔面に直撃。トマト君はそのまま後ろに倒れた。うえ、痛そ。

顔面に当たったボールは高く浮いている。それにいち早く気付いたのはキヨウだった。

「シロサキ！ボールをそのまま打ち返せ！」

その指令によりハツ、と我に返ったヒナがジャンプしてボールをグーで叩いた。

そのボールの向かう先にはリインがいた。何だかおろおろしている。まずいと思い、俺はボールを高く蹴り上げた。

高く浮いたボールをアリアがトスし、俺が思いきりボールをコートへたたき付ける。

そこに立っている人間はいなかった。

勝ったと思った。

しかし、ボールは思惑に反し高く宙へ浮いていた。

その原因を俺は見逃さなかった。

キヨウが倒れているトマト君を蹴飛ばしたのだ。蹴飛ばされたトマト君の腹にボールが直撃しボールは浮いた。

浮いたボールをヒナがグーで叩く……否、殴る。

そのボールは一つの弾丸となってリインに向かっていく。

後ろに下がってボールを蹴り上げようとしたが間に合わない。そして、弾丸はリインの胸に炸裂してしまった。

これ、やばくないか？

時は過ぎて夕暮れ。俺たちは帰りの電車に揺られていた。
まだリインは目を覚まさない。もう1時間半は経つんじゃないだ
ろうか。

そろそろ目を覚ましてもいい頃だと思っただが。そう思い、膝の
上に乗せているリインの顔を覗きこむ。

すると、ゆっくりとリインは瞼を持ち上げていった。

「お？気が付いたか？」

「え、あ、はい」

「どこか、痛むところは？」

「いえ、もう大丈夫です」

「そうか。でも、調子が優れなかったりするなら俺に言えよ？言わ
ないと分からないからな」

「はい。……あ、紗月さん。さっき私の寝顔見ましたよね？」

「え？あ、ああ」

「どうでした？」

「な、何が？」

「ですから、酩かいてたり、涎たらしたり等など、そういう事して
ませんでした!？」

超高速で俺の肩を揺さぶるリイン。リインが何人も見える。あれ
？何かこんなの前もこんなことあった気がするぞ？

俺は愉快に現実逃避に走りはじめた。

第二十五話 夏休みも中盤に入ります。(前書き)

タイトルには特に意味はありません。

第二十五話 夏休みも中盤に入ります。

— 御坂紗月 —

いくら慣れようとしても慣れないものは誰にだってある。

そう、俺は思う。

俺にだってある。例を挙げるとすれば、俺は両生類が大っ嫌いだ！あのヌルヌルした感じとか、その他諸々。気持ち悪いことこの上ない！生理的に受け付けない！あんな生物がいるから戦争が……（略）。

とにかく、慣れないものは慣れないのだ。

勿論、両生類のほかにもある。今の状況等がいい例かもしれない。

「えっと、アリアはどうしてここに？」

「デパートで買い物。紗月は？」

「食料の買出し」

「隣の人は？」

「先輩だ」

今、アリアの尋常ではない殺気？が容赦なく俺を直撃している。

正直言うと、かなりの重圧感だ。これほどの殺気には慣れない。アリア、日に日にパワーアップしているんじゃないか？

先の球技大会で完全に俺を負かした筈の先輩ですら、冷や汗をかいている。

とりあえずこの状況に至るまでの経緯を説明しよう。

朝。食料が底を尽きそうになっているのに気が付いた俺は、買出

しに行くことに。最寄のスーパーを目指して歩いてきたところ、路地裏でゴロツキに絡まれていた少年と少女を見つけ、それを助けた。そして、それを助ける過程で怪我を負ってしまった。

ダメージを受けた部位は右脚に加え左腕。服も少し焼け焦げて黒くなった部分や、赤黒い血が付いていたりする。

足は特に問題なく、歩くことも走る事もできる。強いて言うなら少し痛むくらいのものだ。

スーパーで一通り買い物を済ませた後、寮に向かって帰っていたのだが、一人の男に絡まれている少女を発見。それが、先輩だった。男が「一緒にお茶しませんか？」等と言っている事から、ナンパであることが判明。

先輩も困っている様な表情を浮かべていたので、助けてあげよう。と言う事で助けに入ったのだがその男には見覚えがあった。

球技大会のときに屋上であった眼鏡君だった。

そこで多少のイザゴザがあつて、足に大ダメージを負った俺はまたも先輩の肩を借りて寮を目指していた。そして、今に至る。

「誰だ？この異常な殺気を放つ少女は？」

「クラスメートのアリアです」

「何故私達はこんな目にあっているのか教えてくれないか？」

「正直なところ俺が聞きたいです」

何故こんな殺気を向けられなければならないのか。俺には全く分からない。心当たりもない。

………そうか分かったぞ！また無茶して怪我をしたと思われているんだ！われながら天才だぜ！それなら……！

「アリア！この足は無茶して怪我したんじゃない！さっき全速力（

?)で突っ込んできた自転車を避けようとしたら電柱に思いきり足をぶつけただけなんだ!決して無茶したわけじゃない!」

ふう。われながら完璧な弁解。全部嘘っぱちだけどね。これで殺気は……。

「おい……。何だか殺気が強くなってないか?」

「ええ!?!」

何故だ!何故、殺気が強くなってしまっているんだ!われながら完璧すぎるくらいの弁解だったはず。

一体何がいけなかつたんだ?分からん。

首を捻っていると、殺気を放っているアリアが口を開く。

「紗月?私あんたが無茶したのを怒ってたわけじゃないの。“また”無自覚にそういう事をした事に対して怒ってるの」

「またって何だよ。俺は困ってるみたいだったから助けただけだ。

困ってる奴を見たら助けるのは当たり前だろ」

「困ってたら放っておけないのは分かるけど、どうしていつもいつも女の子なの?紗月ってやっぱり何か女の子を見つけたら行動力が格段にアップする病気にでもかかっているの?」

「そんな変な病気にはかかってない。大体、男が男に絡まれる事なんかほとんどないだろ」

そのままガミガミと言合いは続いた。俺はどれくらいそれが続いたのかは知らないが、決して短い言合いではなかったと思う。

それを見ていられなかつたのだろ。先輩が口を開いた。

「とりあえず、御坂がとんでもなく鈍い事や無自覚でトンデモない行動をする事は分かった」

「俺の何処が鈍いんだ！あと、トンデモない行動って何か誤解を感じずにはいられないんですけど！」

「さっきの話を聞いていて鈍いと思わん方が不思議だ。そしてそんなどうでもいい事にツッコむな」

俺はさっきの言い合いの中でそんな要素が発見できる事を言っただろうか。多分言っていない筈だ。ついでに言うと、さっき俺がツッコんだ事は重要なことだと思う。

「御坂は気付かないうちに泥沼に沈んでいくタイプだ。でも、悪気があってやっているわけでもないし、何より自覚というものが欠片ほどもない。多分、紗月が誰かを選ぶ事はほばないと言っていい」「えっと、ツッコみたい事が山ほどある」

「先輩！それって私にもまだチャンスはあるって事でいいんですよね！」

「ああ。だから、頑張れよ」

「はい！」

先輩とアリアの間に何か変な友情が生まれてしまったようだ。そして、話の内容が全く掴めない。

「えっと、ツッコみたい事も山ほどありますし、何が何だか良く分からないんですけど、そろそろ、寮に帰りませんか？」

その発言によって俺はその場でボコられた。俺には、一体何を原因に二人が怒ったのかが分からなかった。

第二十五話 夏休みも中盤に入ります。(後書き)

遅くなって申し訳ありませんでした！(土下座)

第二十六話 散歩

— 御坂紗月 —

「まったく、本気でボコリやがって」

ソファにもたれかかって座り、殴られた頬をさすりながらぼやく。時は既に夕暮れ。まだヒナは帰ってきていない。まあ、見た目は中学生くらいのちんちくりんでも一応実年齢は俺と同じ年。所謂年頃なのだ。買い物に夢中になるのは仕方のない事だろう。

夕食を作り始めるにはまだ早い。

暇つぶしと言えば……散歩か。

まあ、遠くに行かなければすぐに帰ってくる事はできるだろう。

携帯を引っつかんでポケットに押し込み、寮を出て特に行く当てもなく歩いていく。

散歩……か。

まだ幼稚園の中で最も小柄で、木刀も竹刀も振れないただの泣き虫だったときに、よくあの人としていた。

公園に行ったり、ちよつと遠いが神社に行ったり。特に行く当てもなく、ただぶらぶらしていた。

昔はあんなに遠くに感じていたが、遠くはなかった。公園なんか実際100メートルくらいのものだったし、遠いと思っていた神社への距離も500メートルくらい。

たったそれだけの距離でも俺たちは1時間くらいは歩いていた。

そして、その1時間は24時間の中でもっとも短く感じていた1時間。

24時間の中で最も楽しみにしていた時間。そして、24時間の中で最も幸せだったといっても過言ではなかった1時間。

良く考えれば、ほぼ毎日していた散歩を俺は一人ではした覚えがない。

今考えれば不自然な事だらけだ。

俺は何故一人で散歩をしなかったのか。そして、何故あの人として散歩しなかったのか。

何故だ？

ちっばけな俺に対して、あの人は3つ年上で強くて格好よかったから？

剣術を使えるのが羨ましかったから？

それとも、憧れだったから？

分からない。

だが、どれも合っている様な気がする。

…… やめよう。昔の事を考えるのを。あの人の事を考えるのを。頭を振って無理矢理思考をとめる。

あの頃はもう帰ってこない。もう過ぎたことなのだから。

俺はふと辺りを見回した。

相変わらず空は茜色。だが、もう商店街の近くまで来てしまったようだ。知らぬ間に歩くスピードがかなり上がっていたらしい。

来てしまったのは仕方ないので、とりあえず、日がある程度暮れるまで商店街で時間を潰す事にした。

そして、ある程度ぶらぶらし、今何時だろうと携帯をポケットから取り出したとき、ポケットから何かが落ちた。

「ん？」

それは紙切れ。そして、夢の詰まった紙だった。

福引券？ ああ、そういえばスーパーで買ったな。ま、どうせ外れてるだろ。不幸がステータスみたいなものだし。

そして、夢の詰まった紙切れを持ち、福引券を渡して福引きをす

ると。

福引きの屋台のおっさんが持っていたベルを鳴らしだした。

「大当たり!!」

「は？」

どうやら当たっていたらしい。

え!?!何で?何で当たってんの?不幸がステータスなのに?

「ハイ!3等のティッシュスーパー3ヶ月分!」

いらん。こんなにティッシュいらん……。1カ月分で十分だ。
やっぱり根本的な部分で不幸だ。

しかし、当たったものは仕方ない。俺はティッシュスーパー三カ
月分を持って寮に戻った。

寮に帰り、俺の目に入ったのはテーマパークの無料チケットだっ
た。ついでに言うと、じゃーん!というヒナの言葉が同時に耳に入
った。

「何それ？」

「え?今日福引きで当てたんだ。すごいくない?(運が)」

「すごいくない。俺のがもつとすごいもん貰った(インパクトが)」

ふっふっふと笑い、俺は玄関付近に待機させていたティッシュペ
ーパー3カ月分を玄関の中に押し込んだ。

「うわ!何それ!」

「何って、俺が福引きで当てたんだ」

「私のがすごいじゃん」

「俺のがすごいね」

「何おう！」

「やるのか？ちんちくりん」

「ちんちくりん言うな！これでも毎日少しずつ成長してるわぁ！」

また、うだうだと言い合いが始まった。今日は何度言い合いをすればいいのだろうか。

第二十七話 テーマパーク その1

— 御坂紗月 —

福引きの商品について意味の分からない言い争いも終わり、ゼエ…ゼエ…と肩で荒く息をしながらヒナが金や赤などを使った派手な色合いのチケットを見せつけながらこんな事を言ってきた。

「折角……当てんだし……明日遊びに行かない？」

「明日……？……特に予定はないから……いいぞ」

チケットには丸文字で「ファンタジーパーク」と書いてあった。ファンタジーパークと言えば確か、数年前に建設されたテーマパークだそうだ。

敷地はなかなか広く、レストランや各種の店舗、アトラクションが並んでいる。また、アトラクションの評価も高く、そこそこ遠くからも客が足を運んできている。

こうして、テーマパークへ行く事になったのだった。

ぶっちゃけよう。魔法と言うもの自体がファンタジーだと思う。

まあ、そんな事を思っているのはこの世界では俺だけだろう。

これは、死ねる。

ぐわんぐわんと、景色が回っている。比喩などではない。今、俺の視界で起きていることだ。血が全身に回っていないと感じる事から、おそらく俺の顔は真っ青だろう。

今遊んでいるアトラクションは、『ソニック ファルコン』という名のジェットコースター。

キヤッチコピーは『世界一速い速度で、上下左右縦横無尽に飛ぶ

畜生。これからは絶対に絶叫マシンになんて乗らない。絶対にだ。

「そんなことより、大丈夫なの？」

「あゝ。これが大丈夫に見えるか？見えるならお前は今すぐ眼科に行ったほうがいい」

「そうじゃなくて、吐き気とかないの、って聞いたの。ちょっと早いけどお昼にしようと思って」

「吐き気とかはないし、食べる分にも問題ないと思う」

「じゃあ、ちよつと食べ物買ってくる。何が食べたい？」

「サンドイッチとかの軽めのものでよろしく。後、飲み物は炭酸以外なら何でもいいぞ」

「了解」

言い残して、売店が集まっているほうに向かって歩いていくヒナ。それを見て、小さな子供におつかいを頼んだような気分になった。

小さな背が更に小さくなっていくのを見て。

「?????」

尾行対象が二手に分かれた。

いや、実際は片方がノックアウトして動けないだけなんだけど。

見ている分には楽しかった。普段は絶対に上げない悲鳴を上げたり、おっさんみみたいなフラフラした足取りで歩いていく様を見るのは。

「二手に分かれましたね。あなたが追いますか？」

「うん。向こうは私が追う。あなたは様子見しておいて」

「分かりました。では、何かあったら連絡します」
「うん」

尾行対象の良く知る二人で行った会話は打ち切られ、私は少女を見失わないうちに尾行を再び開始した。

尾行対象その2が向かったのは売店が多く集まっている場所。食べ物と飲み物を買うつもりらしい。

尾行対象その2……面倒だなあ。対象その2でいいや。

ゴホン、対象その2はミルクティー2つとサンドイッチ、ホットドッグを1つずつ買って、それらが入った袋を持って戻っていく。

しかし、私が物陰に少し身を隠しているのを知ってか知らずかこっちに向かってきた。わざわざこちらに来なくても来た道を逆に帰ればいいものを。

私は即座にそこら辺にあった列に並んでいるフリをして、この場をやり過ごすことに。その甲斐あってか、対象その2は私に気付くことなく戻っていった。

ふう、と短く胸を撫で下ろし、尾行を再開した。

対象その2は、結果的に正しい判断を取っていた。来た道を逆にそのまま戻ると、ソニック ファルコンに乗ろうとしている人の作る列に当たってしまったのだから。

うーん。私も、尾行が一段落したら乗ってみようかなあ。楽しそうだし。

私達は対象とは少し離れたベンチに座って様子を見ていた。勿論ばれないように頑張っている。尾行対象である少年がかなり厄介だから。

携帯食料と言う名の1口サイズの栄養食品を口の中に放り込む。それにならって、隣の尾行仲間も口の中に栄養食品を放り込む。

「栄養食品って意外と美味しいんですね」

「食べたことなかったの？」

「はい。そういうものは食べませんから」

「ふーん。私は良く食べるけどね、栄養食品。だから、美味しくないのも知ってるし、美味しいのも知ってる」

「どんな物がおいしくないんですか？」

「個人差があるから、あまりそういうのは言えないかな。でも、私は栄養食品なら、これが美味しいと思ってるんだ」

「そうなんですか。っと、動き始めましたよ？」

「じゃ、腹ごしらえも済んだし、再び行動開始！」

私達はベンチを立ち、対象二人を追い始めた。

第二十八話 テーマパーク その2

— 御坂紗月 —

軽めの昼食をとった後、俺たちは次は何で遊ぶかの相談をしていた。

「とりあえず俺は……過激な絶叫マシンとか以外なら何でも構わないぞ」

「うん……。そうだ！」

「お？なんかいいのが思いついたのか？」

「うん。まあ、今はお楽しみって事で」

意味ありげに笑うヒナ。その時、何か嫌な予感が光の速さで体中を駆け巡った。こういう予感に限ってよく当たるものだ。警戒レベルを上げよう。何が起こってもいいように。

ヒナに手を引かれて進むこと暫し。

俺たちの前に建っているのは。

使者すらも怯えるという伝説の建物。

魑魅魍魎が巢食い、ひたすら万物に恐怖と絶望を与え続ける。その光景を目にしたものは震え上がり、そのまま人々の黒歴史となつて一生ついて回ってしまう。最早、恐怖をそのまま形にしたものといつても過言ではない！

その名も！

「お化け屋敷！」

「ッ！いきなり声出さないでよ！びっくりするじゃない！」

俺は思わず声に出してしまった。それに驚いたようで、ヒナは軽

く眉を吊り上げてこちらを見ている。

いや、俺も声を出したくて出したわけじゃないんですよ。本気と書いてマジって読むくらいに。

「悪かった。いや、でも本当に行くのか？あの死者すらも怯えるところ噂の伝説の建物に」

「え？もしかして紗月ってお化け屋敷とかダメな人？」

「いや、そうじゃないぞ」

「ふーん」

ヒナは俺を見てニヤリ、と笑う。おそらくヒナの悪戯心が刺激されてしまったのだろう。まあ、かく言う俺もお化け屋敷というのは怖がる人がいないと面白くないと思うのだが。

しかし、俺はお化け屋敷が怖いのではなく、嫌いなだけだ。原因は幼少時にお化け屋敷に入ったときに、トラウマになるレベルの体験をしまったからである。だから決してホラーがダメなわけではない。決してホラーがダメなわけではないのだ！

「ほら、突っ立ってないで早く入る！」

結局、ヒナに手を引かれる形でお化け屋敷に入る事になった。

ん？これって男女の立場が逆じゃないのか？

お化け屋敷は木製で、一步步くたびにぎし、と小さく床がきしむ。木は黒ずんでおり、設定年代はかなり古いようである。

今は、屋敷の大きな外開きの扉を開けてすぐのところだ。中は薄暗く、所々に淡い火を放つランタンが置いてある。

お化け屋敷は外から見るとそんなに大きくはなかったはずが、中はかなり広い。

まあ、とりあえず奥に進もう、と更に一步踏み出したその瞬間。ボタン、という妙な音と共に、入ってきた扉からの光が遮断された。

「ッ！？」

突然の事に、俺もヒナも思わず身を震わせた。

そして、すぐに我に返った俺は扉を押し開けようとしたのだが、開かない。

「あ、開かないぞ、これ！？」

「多分、出れないよ」

「なんでだよ！」

「だから、これは演出でしょ？よく考えてみてよ、入口と出口はちやんと分けないとアトラクションが成立しないでしょ」

冷静に考えればそうだ。

とりあえず、ヒナに一言礼を言ってから改めてもう一步足を踏み出すと。

床が半回転して、俺達は落ちた。文字通り落ちた。

「嘘っ！？」

「うおっ！？」

思わず声に上げた。いや、まさかお化け屋敷で落とし穴なんて考えられない。おそらくヒナもそう思って声を上げたのだろう。

声を上げた直後、落下は止まった。落ちたときの驚きののせいで足に力が入らず、尻餅をつく形になってしまったが、身体は何処も痛くはない。その事から考えると、あまり高さはなかったらしい。

辺りを見回すが、光はほとんど無く、3メートル先すら見えない。上を見ても床は元通りになってしまっていた。

いつまでも呆けていても仕方ないな、と思い、とりあえず立ち上がった。その瞬間。

『絶対にここからは帰さぬ』

俺達のちょうど後方から声が聞こえたのだ。ヒナを半歩後ろに下がらせてから、それを守るように身構える。

そして、その声を出した者の正体が見えた。

高さは俺の二倍はあるだろう。体にはボロ布をまとっている。しかし、肌の色は青い。両腕にはぐったりした人を握っており、握られている人は赤く染め上げられている。顔は蜥蜴のようだ。しかし、ヌルヌルしている。

そして、それを見た俺たちは、悲鳴を上げて逃げ出すのだった。

「きゃあああああああああああああー!!」

「うおおおおおおおおおおおー!!」

何だあれ！なんか勝てる気がしない！無理だ無理。あんなのに喧嘩売ったら俺が食われる。虎とかより怖いって！本気^{ガチ}で！

「さ、紗月！あれどうにかしてよ!!」

「無理だ！アレは無理だ！ヌルヌルしてるから!!」

後ろを向くと、まだ追ってきていた。しかも、速い。

「とりあえず、角を曲がって部屋があったらそこに入るぞ」
「う、うん」

そして、更にスピードを上げて青蜥蜴君（仮）に追いつかれないようにし、ちょうどそこに運良くあった扉を開けた。

すると。

『起こしたな？我を起こしたな？』

全長三メートルの青い蛙が現れ、俺たちは再び悲鳴を上げて全力疾走を開始した。

暫く、青い蜥蜴君（仮）と青い蛙君（仮）とリアル鬼ごっこを繰り広げた後、階段を見つけそれを駆け上がると怪物たちは追ってこなくなつた。

しかし、まだお化け屋敷は終わってはいない……。

第二十九話 テーマパーク その3

「?????」

尾行対象2人が、お化け屋敷に入っていった。男のほうの手を引かれる形で。

端から見ると仲睦まじい兄妹に見える。いや、恋人同士に見えないこともない。まあ、どちらにしても仲がいいことには変わらない。

「ここは入らずに出てくるのを待ちましょう」

となりで一緒に尾行していた友人が口を開く。

「うん。ていうか、お化け屋敷じゃ尾行できないよね」

「はい。それに……：……：……このお化け屋敷、結構怖いつて評判なんですよ。なんでも屋敷の中の魔物は着ぐるみとかじゃなくて召喚した精霊らしいですし」

「そっか。でもまあ、いつしよに入ったのはあいつなわけだし、間違いとかは起きないでしょ」

「そうですね。かなり鈍いようですから。ただ、『間違いは起こせない』かもしれません」

「なんで?」

「入る前、手を引かれてましたよね。それってお化け屋敷に入るのを本当は嫌がってたんじゃないでしょうか」

「あゝ、なるほど」

この子、頭いいなあ。ていうか良くそこまで見てるよね。

私には、あいつは妹に手を引かれてお化け屋敷に入ってたお兄ちゃんにしか見えなかった。うん。

まあ、とりあえず、お化け屋敷から出てくるのを待ってよう。

— 御坂紗月 —

青い蜥蜴君（仮）と青い蛙君（仮）は撒いたが、まだお化け屋敷（というよりも化け物屋敷といったほうが正しいのかもしれない）は、終わっていないため、油断してはならない。

警戒を怠らずにおずおずと前に進んでいく。俺達の辺りの緊張感
は尋常ではなかった。

それこそ、好奇心の強い犬だって俺達を避けるくらいのものである。

「オオオオオオオオオ……」

そんな緊張感の中、突然聞こえた地の奥底から響くような声に、
思わず背を震わせる。それはヒナも同じようであらゆる跳び上がった。
た。

そして、声が聞こえなくなったかと思えば、地面が揺れ始めた。

「今度は何だ!？」

もう、やけくそ気味に叫ぶ。我ながらビビりきった声で。

その叫びに答えるかのように、青い生物が現れた。

その生物は、蜥蜴と山椒魚を足したような、俺にとっては悪魔の
ような生物だった。しかも、無駄に大きい。二人くらいなら丸呑み
にされるだろう。

「!?!?!」

俺が、声にならない悲鳴を上げた次の瞬間。

あはははは、とヒナが壊れたように笑い始めた。瞳には光が宿っておらず、焦点も定まっていない。

怖いッス。ヒナさん、あなたも怖いッス。もうなんか、その悪魔と同じくらい怖いッス。

「あははははははは！！！」

マズイ。これはL5症状……末期だ！何の病気かはわかんないけど。

そんなバカなことを言っている間にヒナは魔法を使い始めた。彼女の足元と目の前に赤の魔法陣が現れた。

そして赤の魔法陣から赤い腕が現れる。腕の先には鋼鉄をも易々と切り裂きそうなほど鋭利な爪。続いてトカゲのような頭。天空を数年は自由に駆けることが出来そうなほど巨大な翼。強大な肉体を支えるために発達した脚。そして、しなる尻尾。

見た目は全長約三〜五メートルの赤い西洋風の竜。ドラゴンといった方がいいかもしれない。

これはマズイ。しかも、かなり強力な精霊を召喚してしまったようだ。見た目も強そうだが、山椒魚のほうがかかなり震えているのだ。山椒魚が精霊だとするなら、ドラゴンのほうが明らかに格上。

「やめるヒナ！こんなところで精霊なんか暴れさせたら！」

「あははははははは！！消えてなくなれえ！！！」

消えてなくなれ、というヒナの命令を聞き、ドラゴンはいったん長い首を引っ込めると、少しの間溜め、首を突き出した。

その際に口から火球が放たれ、山椒魚に直撃。火球は巨大な爆発を起こした。

ドオオオン！！！！

耳を劈くような爆発音と、爆風に煽られ、吹き飛ばされそうになるが必死に踏みとどまる。

そして、爆風が晴れたときには、山椒魚は跡形もなく消え去り「山椒魚を消す」という役目（？）を終えたドラゴンも消えていた。それと同時にヒナの瞳に光が戻った。

「行こっか」

行こっかじゃないですよヒナさん。危ないじゃないですか。こんなところでそんな位の高い精霊を呼び出したりしちゃ。

しかし、山椒魚よりも怖いもの（ヒナ）を見てしまった俺は、そんなことを本人に向けて言うことは出来なかった。

それからは特に何事もなく、無事に化け物屋敷から帰ってきた。断じて最後まで同じように絶叫しながら逃げたとか、恐怖のあまり気絶しそうになったとかそんなことはない。そんなことはなかった。いやいや、でも楽しかったか楽しくなかったか、と聞かれれば楽しかったと答えるだろう。怖くても楽しいものは楽しいのだ。

「次はどこに行く？」

「そうだな……」

ヒナがパンフレットを取り出し、全体図を見ながら何処に行こうか、と検討する。それを俺は覗き込んでいた。しかし、二人とも特にこれに行きたいというのがなく、うん、と唸っている。

そんな時、ヒナが急に口を開いた。

「喉、乾かない？」

「まあ、さつきあれだけ叫んだしな。乾いてないって言ったたらうそになる」

「じゃあ、私、買ってくるから」

「いや、俺が買ってくる。昼前に昼ごはんを買いに行かせたしな」

「いいよ、私が買ってくるから」

「いや、俺がまた歩かせるのもいやだし。それに、ちょっと今日は酷かったからな。倒れたり絶叫したりで。お前も疲れてるのに俺ばかり休んでるんじゃない。だから俺が行く」

「そこまで言うなら、任せていい？」

「ああ。で、何が飲みたい？」

「オレンジジュース」

「あいよ。じゃ買って来るからここで待ってるよ」

「うん」

そして、俺は買出しに向かった。

第二十九話 テーマパーク その3 (後書き)

遅れて申し訳ありませんでした。

言い訳にしか聞こえませんが、最近妙に忙しいです。

主に部活ですが。

七月までは更新できないかもしれません。

最後にもう一度。

申し訳ありません。

第三十話 テーマパーク その4

「?????」

また別行動。少女は立ったままだが、少年はどこかへ歩いていった。

一体あいつらは何がしたいのか。

「何でまた別行動してんだろ？」

「さあ……。私には分かりません」

「うーん。予想としてはパシリだと思うけど」

「そうかもしれないですね。でも、二人で来てるのに買い物に行かせるっておかしくないですか？」

「そうなんだよね……。って、どっか行くよ？」

「はい、まったく逆方向ですね」

「……はあ。私にはあの2人が何をしたいのか分かんないよ」

「そうですね……。私にもよく分かりません。追ってみましょう」

「そうだね。パシリの方はここに戻ってくるだろうし」

私たちは尾行されている事を悟られないよう、しばしば身を隠しながら、少女を追った。そして、少女は……。

「……お手洗いに入っていきましたね」

「……そうだね。じゃあ、紗月はなんで買い物なんて頼まれたんだろ？」

隣の少女は少し考えてから口を開いた。

「もしかして、お手洗いにいきたいって言えなかったんじゃないで

すか？」
「そうかもね」

お手洗いにいきたいなんて普通に言えばいいのに。とか思わないで欲しい。

やがて、少女は化粧室から出てきた。私たちはある程度少女を見送ってから尾行を再開した。

— 御坂紗月 —

買い物を終えた後お化け屋敷前に戻り、俺たちは再び遊園地を楽しんで回った。

絶叫マシーンに乗り、それ自体も面白かったのだろうが、俺の絶叫や、物凄く怯えた顔を見るのも面白かったらしく、ヒナからは笑顔が絶えなかった。

ただ、俺も絶叫したり、あまりの恐怖から怯えたりしたものの、楽しくなかったというのは嘘になる。

そうだ、楽しかったのだ。

隣にヒナがいて、彼女が笑っているのを見ていた。純粹にそれが楽しかった。

「そろそろ帰るか……？」
「うん……」

そう唸りながらヒナは茜色に染まりつつある空を見上げた。ここから寮に帰るまで結構な時間がかかる。

空が完全に茜色に染まってしまえば、寮に着く頃にはそれが瑠璃色に染まってしまっていることだろう。

「……そうだね」

ヒナは物凄く心残りがありそうな顔で頷いた。先程までの笑顔が嘘のように、目を伏せていた。

こんな顔させて帰らせたくないな……。

「よし。最後にお土産でも買うか」

「お土産？」

「ああ。ん？いや、この場合はお土産っていうより記念品か？」

記念品……。そう小さく呟いた後、ヒナの顔がボツ、と赤くなっ
た。

いやいや、赤くならなくても。ってか、赤くなる必要性がどこにも見当たらないんですけど。ま、どうでもいいか。

俺はヒナの手を取ってお土産を取り扱っている店へと駆け出した。お土産を取り扱っている店の前で待ってもらい。俺は一人で何かないかと品を探した。

しかし、いい感じのものがなかなか見つからない。どれもぱっとしないものばかりだ。

そうして店内を迷羽陽にして探しているといい感じのものを見つけた。

それはストラップだった。いくつか種類があり、ウサギ的な生物。鳥的な生物。馬的な生物。虎的な生物。ねずみ的な生物。そして、ねずみが嫌いな某ネコ型ロボ的な物。他にもあったが数が多いので省略。

うーん。ここは一番最初に目に入った奴……ウサギ的な生物のストラップでいいや。

会計を済ませた俺はヒナにその入ったベージュ色の小さな紙袋を渡した。

受け取った瞬間に紙袋を開けて中身を確認するヒナ。
いや、そこは、開けていいか？って聞くべきじゃないのか？まあ、
気にしないけど。

中身を確認したヒナは満足そうに頷いた後、満面の笑みで礼を言
ってきた。

「ありがとっ！」

「ああ、どういたしまして」

そして、ヒナが俺の手を取った瞬間。

俺は、殺気をヒナの後ろから感じ取った。そして、それが向けら
れてるのは、俺ではなく、ヒナ。

俺はすぐさま、ヒナの手を引き抱え上げた。

その瞬間、桃のような香りが鼻孔をくすぐったが、気にしないよ
うにした。

アレはマズイ。早く逃げないと。こんなところでは、満足に戦え
ない。

「な、何すんの！？」

「いいからここから走って逃げるぞ！」

「な、何で！？」

「いいから！とりあえず喋るな！」

俺はすぐさま身を翻して、走った。なるべく人気のない方へと誘
う。そして、人気のない道を選ぶということも忘れない。

まだ空は茜色にもなっていないのに。普通暗殺系の仕事は夜に
するもんだ。それをしないのは……ド素人か、それともかなり自分
に自信を持っているか。それとも、夜には動けない部類の人間か。

まあ、どうでもいい事だ。

人気のない広場についた俺は、ヒナをおろして庇うように前に立

ち、夜闇のような黒色の刀を展開し、構える。

俺は暗殺者を視界に捕らえた。黒い忍装束に近い服を着た男だ。暗殺者は、上から飛び掛るように切りつけて来る。得物は刃渡り30センチほどの短刀。

俺は刀を腰だめにした後、迎え撃つようにして縦に一閃。

その刀の動きは三日月を描くように！

《御坂流剣術 式ノ型 月閃》

刀で振るったその技は、相手の肘から先を胴体から切り離した。鮮血と短刀を握ったままの右腕が宙を舞った。

着地して俺から距離を取った暗殺者は驚いたようにこちらを見る。しかし、それも一瞬。すぐさま短刀を取り出すと、今度は身を低くして突貫してくる。

身を低くすると言う事は、次に来る攻撃は足を切り落とすか、切り上げてくるか。

なら……。

《御坂流剣術 六ノ型 流水》

左足を軸に回転して、攻撃が来るであろうところを避け、裏拳の要領で刀を薙ぐ。流石にこれは命の保障が不可能な技なので、峰打ち。

ゴッ！という硬質な音と共に暗殺者が吹き飛ぶ。

暗殺者は地面を無様に転がっていったところを拘束し、武器を奪った後、問う。

「目的はなんだ？」

「口が裂けてもいえないな」

「言わないと、命の補償はしない」

「……上からの命令。俺は末端の人間でな。目的なんてしらねえのな」

「そつか。なら、お前に用はない。早々に去れ」

俺は暗殺者を解放した。暗殺者はもう、満足に動けるような体ではないのだ。万が一ヒナを襲おうとした場合は、斬る。

しかし、暗殺者は何もする気がないように両手を上げた。

「ああ、武器が奪われちゃ何もできねえからな。ま、夜道に気をつけな。俺はもう二度とお前の前に姿を現す事はできないだろうがな」

暗殺者は広場から去っていった。

コイツはまた変な問題を持ってきやがったか……。

ま、俺がしっかりと守ってやるがな。

第三十話 テーマパーク その4 (後書き)

え、三ヶ月近く待たせてしまって申し訳ありませんでした。

第三十一話 対策

— 御坂紗月 —

テーマパークに行つて帰つてきてから三日経つが、まだ、暗殺者集団からは襲われてはいない。

俺はソファに座つて紅茶を飲みつつ、思考の海に飛び込む。

とりあえず外出は控えているが、このままいつ狙われるか分からないという状況で生活するのは精神的によくはない。

常に警戒して生活するという事はじっくりと休む事が出来ないという事になる。俺は二週間くらいならそのまま生活する事は可能だが、ヒナはそうはいかないだろう。魔法は召喚術という特殊なもので、召喚されるものはかなりの強さがあるが、魔力は休息を取らない限り有限であり、召喚術と言うのはそれを大量に消費してしまう。それに加え、彼女は一応世界的に見てもトップクラスに位置するほどのお嬢様だ。本人はまだ大丈夫と言うが、こんな生活を続けるのはそろそろ限界に近いだろう。

しかし、どうする事もできない。狙われているのはおそらくヒナだろうが、俺である可能性も否定はできなるとはいえないのだ。

俺が狙われているという事さえ分かれば、ヒナを巻き込まないで済むのだが。まあ、そんな事はないとほぼ断言できる。

世界的に見てもトップクラスのお嬢様。正体不明の少年。

どちらに興味がわくかといえれば後者のほうも危ういかもしれないが、狙われる対象としては前者なのだ。

結論としてはやはりヘタな行動に出る事はできない。

空になったカップをテーブルに置き、背もたれにもたれかかる。

やはり、ヒナを守るほどの人材がほしい。できれば、俺と同格かそれ以上の者が。そうすれば、俺も外に出る事が可能で、大きな行動に出る事ができる。どちらが狙われているのかはつきりさせる

事もできる。

一人。俺と同格かそれ以上の力を持つ人間に心当たりがある。しかし、連絡先など知らない。

彼女とヒナにはおそらく接点はない。キョウも右に同じ。

駄目を承知でアリアカリインに聞いてみる。今はそれくらいしかないだろうか。

俺は連絡先を聞いたらずくに帰ってくる。という事を前提にして隣の部屋に出かけた。ヒナを部屋に置いたまま。

隣の部屋のインターホンを押すとエプロンを着用したアリアが出てきた。

「何か用事？」

「ああ。訳あって、その……ミカミ先輩の連絡先が知りたいんだ」

「先輩の……？」

「ああ。その、命に関わる問題にぶち当たってな。確かな実力を持つ人……ミカミ先輩の力を借りたいんだ」

「……やっぱり私じゃ、ダメ？」

瞳に若干の潤いが見える。自分に力が無いことを嘆いているのか。それとも何か違う理由があるのか。結局、アリアが何を思っているのかはわからないが、この問題に彼女を巻き込むわけにはいかない。

「……言いくいが、ダメだ。これは命に関わることだから」

「私が弱いから？」

「違う。俺は純粹にお前をこの問題に巻き込みたくないんだ。お前にはその……生きていて欲しいから」

生きていて欲しい。これは本音であり、俺の願望だった。もう、大切だと思う人を目の前で失いたくない。

アリアの様子を伺うと、完熟トマトのごとく顔を真っ赤にして固まって、あわあわと口を動かしていた。

「ん？どうかしたか？」

「え！？あ、その、それは、えっと、あの……こ、こく……？」

「ん？いまなんて？こく……穀物？」

「なんでもない！それより先輩の携帯の番号は……」

アリアから先輩の番号を聞き出した俺は自分の部屋に戻った。顔を真っ赤にして奥に逃げていったアリアを不思議に思いつつ。

俺が部屋に戻ると、ヒナが眠そうに目を擦りながらフラフラと歩いていた。俺は彼女の後ろに立つとぽん、と肩を叩く。

「……何？」

「今日か明日、大きな行動に出ようと思う」

「具体的には？」

「俺一人で街中を歩いて、どっちが狙われているのかはつきりさせてやる」

「私は？どうするの？」

「これからミカミ先輩に応援を頼む。ミカミ先輩なら俺と同格かそれ以上の実力を持つてるからな」

「ふうん……」

ヒナは不服そうにそっぽを向いた。

「何だよ。不服そうな顔して」

「別に。なんでもない」

何が不服なのかは分からないが、俺が考えても無駄だろう。年頃

の異性が考えてる事なんて分からないから。

「いいよ、それで。でも……無茶しないで」

「ん。まあ、努力はする」

無茶しないで。という言葉と共に彼女は自分の使っている部屋に戻っていった。

正直、この行動自体が無茶である。暗殺者が俺よりも強い人間が出てこないとは言えない。また、暗殺者集団が周りにいる誰かを人質にとった場合、俺は行動が出来なくなる。

しかし、これはやらなければならぬことだ。何よりもヒナのために。

俺はポケットから携帯を取り出し、ミカミ先輩に電話をかける。僅かな電子音の後、彼女は電話に出た。

『もしもし。ミカミです』

「もしもし。紗月です。ミカミ先輩」

『ん？私は君に携帯の番号を教えた覚えはないのだが』

「アリアから聞きました。それよりも頼みたい事があるんです」

『頼みたい事？』

「はい。いま、大きな声では言えないんですけど、ちょっとやんごとなき問題にぶつかってまして」

『やんごとなき問題とは？』

「命にも、世界にもかかわることです」

『どういうことだ？』

「シロサキのお嬢様が、暗殺者に狙われているかもしれないんです。彼女がもし殺されたとしたら、大変な事になります」

『確かに。それは大変なことだが……私との繋がりが分からない』

「ヒナを守ってほしいんです。俺は前回の刺客の腕を切り落としたうえに、完全に戦闘不能の状態にしまったので、多少なりとも

警戒されているはずですから」

『そこで、実力が不明の私を投入して向こうから襲ってきてもらい、問題を解決しようというのか』

「はい。そんなところですよ」

『本当に私でいいのか？』

「俺がこの学園に入ってから負けたのは先輩だけです。実力は俺よりもあるはずですよ」

『……引き受けよう。部屋は確かアリアの部屋の隣だったな。すぐに行く』

「はい。それじゃ頼みます」

これで、俺は大きな行動に出れる。そして、この問題の解決に一歩近づいた。

第三十二話 対策実行、襲撃、戦い

— 御坂紗月 —

数十分後、先輩を出迎えた俺は早速行動に移った。

まずは、人気のなさそうな道をひたすら歩く。勿論、寮からは離れすぎないようにしつつ、近すぎない絶妙な距離を保つように心がけていた。

寮から離れすぎないようにするのは、寮でいつ襲撃があってもすぐに辿り着けるようにするため。近づきすぎないようにするのは、寮に近すぎるとあぶりだす事が出来ない場合もあるからだ。

人気がない所を歩くのは、一応俺が狙われている可能性も否定できないし、関係のない人を巻き込むわけにもいかないからだ。

俺が寮を出てから、約三十分。ついに動きがあった。俺の後ろをコソコソと尾行しているものがある。

俺は後ろを向かぬまま、走り出した。もし、尾行している人間が俺の知り合いだったとしたら、まず追いつけないであろう速度で。

ここで、敵が無関係な人間が見極める。敵なら俺との距離を保ち、尾行を続けるはず。知り合いなら追いつけずに距離をどんどん離されるだろう。

その答えは数十秒後に出た。

俺との距離を保ち続けているのである。この速度で着いて来られるという事は知り合いではない。

俺は人気がなく、かつ広い場所を求めて走り続けた。

すぐにその場所は見つかった。いつぞやの廃工場である。すぐにいつぞやの廃工場だと分かったのは、ヒビの入った壁、人型のへこみの入った柱がそのまま残っていたからだ。

工場の中に入ると、俺は振り返りつつ、言った。

「鬼ごっこはもう終いだ」

そして、柱の影から、一人の人間が姿を現した。
第2ボタンまであげた白いブラウス、黒いスカートに身を包んだ、
長い金髪の女性だった。年齢は二十歳過ぎくらい。

「女……？」

「あら？女じゃいけなかった？」

女は小さく、微笑むように笑う。

「いや、相手が男なら手加減抜きで容赦なく戦^やれるのにな、って思
っただけだ」

「ん？それって男女差別？お姉さんちよつと残念。君となら本気で
殺^やり合えると思ったのに」

「あくまで容赦なく、だ。手加減は女でもしない」

「あら。お姉さんちよつと感激しちゃった。久しぶりよ、外見で人
を判断しない強^ひ者。お姉さんこんだから、本気で相手してくれる
人が少なくて」

女は言い終えると、軽く舌なめずりをする。その数瞬後、女の姿
は掻き消えた。そして、左から飛んできた拳を受け止める。

速く、かつ重い。

俺は武器を展開できないまま、さまざまな角度から飛んでくる手
足をいなし続ける。

まずいな。こりゃ、俺が武器なしで勝てる相手じゃない。

右下から鳩尾を穿つような拳をいなし、裏拳でカウンターを狙う。
が、体勢を低くする事であっさり避けられ、わき腹に強烈な蹴り
を貰った。

「がッ……!!」

俺はボールのように吹き飛び、地面に叩きつけられた。蹴りと叩きつけられた衝撃により、肺の中の酸素が全て押し出され、一瞬呼吸が出来なくなる。

すぐに体勢を立て直したが、武器を展開する前に、俺を粉碎せんとする踵が振り下ろされる。

身を投げ出すようにして避けると同時に木刀を展開する。

「こっからは本気でやるぞ」

「武器を出されちゃった。でも、お姉さんも本気出しちゃう」

腰ために木刀を構えると、一瞬後に俺の姿は消える。

「幻影！」

立っていた女を追い越し、勢いを乗せた木刀を無防備な背中に叩きつける。

まずは一撃。

そう思った矢先、女の姿はなくなった。何処へ消えた、などと考える必要もない。女は俺の背後にいる。

背を取るうとした俺が背を取られたのだ。

もう一度蹴りをもらってはならん、と俺はすぐに右に跳ぶ。そして、俺の背を狙ったものの空を蹴った女のわき腹に、回し蹴りの要領でのカウンターを叩き込む。

「ぐっ……!!」

女は軽くうめいて、半歩よろめいたが、すぐに反撃。

俺の頭を狙って、拳を放つ。しかし、わき腹に攻撃をくらったか

らか、その拳に先程のような重さと速さはなかった。
すぐに飛びのき、距離を取る。

「激しいのね。でも、お姉さん激しい男の人は大好きよ」

「そりやどうも、でも俺は激しい女の人は苦手だね」

「あら、残念」

女は軽く首を振った。

その動作とほぼ同時に俺は即座に攻撃に出る。数歩走る、軽く跳び、身をひねり、木刀を女の頭に叩きつける、一連の動作を流れるように行う。

岩をも粉碎するそんな威力の剣技を女は避ける事もせず左腕で受け止めた。

「あん、凄い衝撃」

そう感想を言った後、女のアッパーが俺の鳩尾にめり込む。俺はうツ、と小さく悲鳴を上げた。そして、アッパーによってわずかに浮いた俺の体を女は蹴り飛ばした。

またもボールのように吹き飛ば俺。地面に叩きつけられ、ゴロゴロと無様に転がる。

やばいな。でも、負けられない。

俺は自分を鼓舞して立ち上がった。しかし、目の前には既に女が立っていた。次になにが来るかは予想できた。

回し蹴りだ。

俺は、勢いに逆らわないようにして軽く跳び、蹴りの威力を半減させた。またも吹き飛んだが、今度は受身を取って態勢を立て直す。次の瞬間には、俺は女の背後で木刀を振りぬく。

一瞬の反撃に驚いたのか、女の回避は遅れ、俺の木刀は女の胴に吸い込まれた。う、と女が小さく呻く。

「まだだ！」

俺は瞬時に振りぬいた木刀を上には切り返し、振り下ろす。さらに、右に跳びながら女の胸を切り抜くと同時に離脱する。

「うつ……。乱暴なのね」

「あんたも十分乱暴だ」

「乱暴なのは嫌い？」

「乱暴な女の人は苦手だっ！」

俺は返事とほぼ同時に動いた。

飛び掛るようにして女に近づいたが、女はにやりと笑う。次の瞬間、胸部に衝撃が走り、俺の体は後ろに飛んでいた。

この女の蹴りよりも凄まじい衝撃だった。あまりの衝撃に数秒呼吸が出来なくなる。

「がッ！？」

女が動いた気配は無い。殴る、蹴るをされたわけではない。だとしたら。

「げぼッ！……魔法か！」

「正解。魔法が使えないなんてお姉さん言ったかしら？」

確かに、魔法が使えないとは言っていない。完全に俺の油断だ。俺は何の魔法で飛ばされたのか。

まあ、それは今はどうでもいいことだ。今重要なのは、俺が女に近づき辛くなったということだけ。俺にはほとんどの魔法が使えない。遠距離戦ではまず間違いなく負ける。

さらに勝てる確率が下がった。その事実にも冷や汗が背中から噴き出す。生きて帰ることが出来る気がしなくなってきた。

「考え事？余裕なのね」

「ッ!？」

声が出たときには彼女は俺の視界から瞬時に消えた。マジイ。この状況で魔法に当たったら……!

俺の予想は外れ、飛んで来たのは魔法ではなく女の足だった。

俺は木刀を縦に構え、女の蹴りを受け止めようとした。しかし、女の蹴りに耐えかねた俺の木刀は砕け散る。木刀が折れることを覚悟していた俺は威力が落ちた足を受け流し、カウンターの蹴りを叩き込む。

女は吹き飛び、先ほどの俺のように地面をゴロゴロと転がった。

俺は追い討ちをかけるように転がっている女に踵を振り下ろす。

女はすぐに体勢を整えると、口元を手の甲で拭う。

「ふふつ。久しぶりよこの感じ。ちょっと熱くなってきちゃった」

軽く笑うと女は飛び出した。

「俺も久しぶりだぜ、ここまで強いのを相手にするのは!」

俺は木刀を展開し、女を迎撃する。俺の顔を狙って飛んできた拳を左手で受け止め、左手を引き女の右わき腹に木刀を叩き込む。

そして、木刀を叩き込んだところと同じ箇所を思い切り蹴る。蹴りが胴に叩き込まれる前に手を離し、女を吹き飛ばす。

吹き飛んだ女は壁に激突した。土煙を巻き上がり女の姿が見えなくなる。

これでへばるような相手じゃない。

俺は何処から攻撃が来てもいいように木刀を構えた。戦いはまだ終わっていない。

第三十二話 対策実行、襲撃、戦い（後書き）

3ヶ月になります……。
申し訳ありませんでした……。

第三十三話 刺客との戦い

— 御坂紗月 —

土煙が晴れると、そこには壁にめり込み、手をだらんと下げた女の姿があった。長い金髪によって顔のほとんどの部分が隠れている。俺が無意識に木刀を強く握る。すると女の指がピクリ、と動いた。それを起点として彼女の全身が動き始めた。そして、めり込んだ壁から脱出し地面に立つ。

それから彼女は首をコキン、と鳴らした。

「まだまだこれからってか？」

「ふふつ。そうね。これからが本番よ」

「俺もこれからだ、って言いたいところだがな。そろそろ決着^{けり}をつけさせてもらおう」

「あら、もう限界が近いの？」

「そんなところだ」

俺はすばやく間合いを詰め、木刀を女の鳩尾を狙って突き出す。半身になって避け、女は裏拳を繰り出す。

それをしゃがんで回避し、木刀で女の足を払う。女は脚を上げ、思い切り木刀を踏みつけた。

「うあっ…!!」

木刀が地面に叩きつけられた瞬間、凄まじい衝撃が腕に伝わり、思わず木刀を手放した。

俺はすぐさま飛びのく。しかし、女はそれを逃すものかと距離を詰め、拳を突き出してきた。俺はそれを身を捻って避ける。

それと同時に牽制の裏拳を放つと、女は追い討ちをやめて飛びのいた。

即座に新しい木刀を展開し、腰溜めに武器を構えて走り出す。その慣れた動作を数瞬で行う。《壱ノ型 幻影》で瞬時に女の背後を取った俺は木刀で女の胴を切り払うが、それは文字通り空を切っただけだった。

女は俺のすぐ横に回り込みで腕を振りおろす。

「せいっ！」

俺は右足を軸にして回転し、《六ノ型 流水》でカウンターを叩き込む。女はしゃがんでそれを回避した。そして、俺の右足を払う。軸足を叩かれ、体勢を崩した俺の顔に女の回し蹴りが炸裂する。

「ぶっ…！」

俺はコマのように回転しつつ後退した。

それに女は追い討ちをかける。回転している俺の胴に女の膝が叩き込まれた。

「ぐう！」

衝撃が俺の全身に行き渡った。骨がミシミシと悲鳴を上げる。俺は吹き飛ぶことなく、重力にとらわれてその場に崩れ落ちる。

地面に手が着いた瞬間、空気と胃の中の食物が僅かに口から零れた。口内に不快な味が広がる。

俺は自分の体を鞭打って女から離れた。左手の甲で口元を拭き、木刀を構える。

しかし、既に女は俺の目の前で右手を振り上げていた。そして、女の手刀が俺の首めがけて閃く。

「ふっ！」

俺は手刀を体を捻って避け、左下から逆袈裟に振りぬく。これは僅かに体をずらされて外れた。それから上段で左へ真一文字に木刀を振り、さらに左上からの袈裟切り。

上段攻撃からの袈裟切りを身を捻ることで避けようとした女の体勢が崩れた。そこで俺は穿つような突きを放つ。

「はあああああっ！」

「ぐううっ！」

突きが女の左の肩口に入った。骨が碎けるような感触が腕に伝わる。肩の骨が折れたのか、女は悲鳴を上げて、数歩よろける。

「まだまだ！翔閃っ！」

俺は体を回し蹴りの要領で回転させた。そして、回転の勢いを乗せて思い切り木刀を振り上げる。

女の体が上空を舞う。一定の高さまで上がると重力にとらわれて落下し、肩口から地面に叩きつけられる。

「うあああああああっ！」

女は大きな悲鳴を上げた。骨の折れた肩に、落下して地面に叩きつけられる衝撃が伝わったため相当な激痛が走ったのだろう。

女は地面に叩きつけられてからというものの、起き上がることはせず、ぴくぴくと動くだけだった。

「終わったか……」

流石にあれだけのダメージが入れば戦闘は出来ないだろう。

俺は疲れがどっ、と押し寄せてくる感覚に陥った。しかし、俺にはまだやることがある。倒れている女の目の前に立ち、女に問いかける。

「何故俺を狙った？」

「……上から命令よ」

女は痛みから耐えるように片目を瞑り、俺の問いに答えた。といってもほとんど答えになっていないが。

「上？」

「そう。私達駆除部隊に上の連中から、シロサキの跡継ぎについている正体不明のボディガードを殺せ、って命令があった」

「何をするつもりか分からないが、そのためには俺が邪魔ってことか……」

「そういうことね。でも、私も上の連中が何をするかは知らないわ……それだけ分かれば十分だ」

俺は廃工場を立ち去ろうと女に背を向けたとき、女は俺に対して言った。

「シロサキのお嬢さんのところへ早く行ってあげなさい。おそらく上の連中は私達の事を道具程度にしか思ってないわ。今頃、他の刺客に襲われてるかもしれない」

「……いいのか？」

「戦う機会を与えてくれるのはありがたいけど、私だって上の連中の事は好きじゃないもの」

俺は展開していた木刀を消し、すぐに寮へと走り出した。
俺はヒナを守る。絶対に殺させはしない！

第三十四話 刺客との戦い その2

一ヒナ・シロサキ

「御坂、待ったか？」

「待ってないです。それより、今日はよろしくお願いします」

「出来る限りのことはやってみよう」

「じゃあ、俺は行きますね」

先輩が来るとほぼ同時に紗月は寮を出て行った。

それを見送った後、リビングのソファに座って今回の作戦について考える。

本音を言うと、まだ納得はしていない。確かに私にはこれ以上ピリピリした生活は耐えられないかもしれないけど。

でも、紗月は今回も無茶をしようと思う。旅行のときもそうだったけど、今回もそう。正直、いつ帰らぬ人になってもおかしくない問題に首を突っ込んでいる。でも、紗月は他人の心配ばかりして自分自身のことをあまり考えていないと思う。いや、絶対にそう。

自分がどれだけの人に信頼されて、どれだけの人に大切に思われているか全く気づいてない。自分が倒れることで、どれだけの人悲しむかを全く考えてない。

でも、このことを話しても紗月が無茶して人を助けることをやめないと思う。

寧ろ、『俺はみんなの辛い顔を見るのが嫌なんだ』なんて真顔で言っただけで無茶してしまう。

私に紗月を引き止めたりすることは出来ない。だからこそ、私は紗月の無事を祈って待つことしかできない。

「浮かない顔だな、シロサキ」

「……はい。無茶するから本当は傍にいて欲しかったんですけど……」

「ほう……。君も紗月のことが好きなクチか」

「えっ……。！ち、違いますよ！私は……。その……。み、見えないところではないなったり……。するんじゃないかと思って……。その……」

「ふふふ。やはり君もそうか。いや、御坂も大変だなあ」

「えっと、せ、先輩はその、紗月の事をどう思ってるんですか……？」

「私は彼に恋愛感情を持っていない」

「ほ、本当ですか？」

「本当だ。私は彼と先輩後輩以上の関係は望んでいないよ。それに御坂はちよつと競争率が高そうだしな」

確かに紗月に思いを寄せる子は多い。でも、私から見て最も警戒をしなければならぬのは二人。アリアとリイン。

アリアは紗月と一番仲がいい子。学校では一緒に行動している事が結構多い。よく話すし、寮も隣同士。ただ、距離が近すぎて、紗月から親友のようなもの、と思われているはず。

でも、私はアリアよりリインの方が警戒するべきだと思う。美人。この一言に尽きるほどの容姿。1年生の中で1、2を争う美人と言われている。正直、容姿で勝てる気がしない。もう一つは姫のような雰囲気。清楚で守ってあげたくなるような……。そんな雰囲気。

どちらも強敵。勝てるかどうかは分からないけど、私も紗月との距離は近い。だから、完全に勝ち目がないわけじゃない。あきらめたらそこで負け。

ちよつと、話題がそれちゃったかな。閑話休題。

考えを適当なところで止めて先輩の顔を見る。すると、先輩はちよつと真剣な顔をして、口を開いた。

「単刀直入に聞く。シロサキ、御坂の何処がいいんだ？」

「え……えっ？」

私が驚いて何もいえなくなると、先輩は真剣な顔を崩して少し吹き出した。

「ふっ。ほら、言ってみろ」

「ええと……優しいところです」

「誰にでも優しくはないか？」

「そうですね。でも、そこが紗月のいいところですから」

「うむ。確かに御坂は誰にでも優しい事が長所といえば長所か」

「ちよつと悔しいかなあ、とは少なからず思いますけど」

「まあ、好きな相手が自分ではない他の異性に優しくしているというのは見ていてあまり気持ちのいいものではないか」

「はい。欲張りを言うなら私にだけ優しくして欲しいんですけど、

紗月ですから」

「残念ながら鈍いからな。ははっ」

先輩は軽く笑う。その笑顔を見て、私はこの人が敵ライバルでなくてよかった、と心から思った。こんな魅力的な笑顔を持つ人が敵であったなら。正直、勝てる気がしない。

その後もこんな他愛もない話をしていくと、先輩は目つきを鋭いものへと変えた。

「さて、笑い話もここまでのようだ。シロサキ、私の後ろに」

「えっ？」

「いよいよ来たか」

寮の扉が蹴飛ばされた。そこから、右手にサーベルを持ち、スーツを着た銀髪の男が現れる。見たところ男の年齢は十代後半。先輩は刀の柄に手をかけて、相手の動向を探っている。

「お前がボディガードの男に留守を頼まれたヤツ、か」

「そつだ。女で残念か？」

「いや、俺は男女差別はしないんだ。相手がどんな身なりをしていようが、敵であれば排除する。それだけだからな」

だん、と地面を蹴りつける音とともに男の姿が消える。更にその刹那、キンツ、という金属同士がぶつかる甲高い音が響く。

男の上段から振り下ろされたサーベルを先輩はいつの間にか鞘から抜いて刀で受け止めていた。

ほとんど見えなかった。先輩が刀を抜くところも、男が接近するところも。

男がやや優勢のつばぜり合いの中で、先輩は刀を傾けてサーベルを滑らせる。サーベルを受け流した先輩の刀が中段で真一文字に振られる。

男が流されたサーベルを無理矢理動かして刀に当てて攻撃を弾き、逆に刀を弾かれてよろけている先輩の胸が斬りつけられる。

先輩はバックステップしてそれを避けると同時に体勢を整えた。

男が即座に先輩との距離を詰めて下段からサーベルを振り上げる。軽く身をひねってサーベルを回避し、先輩がカウンターの突きを放つ。

チツ、と舌打ちして男は先輩から離れる。先輩が追い打ちをかけるように男を袈裟懸けに斬りつける。

男がサーベルを横薙ぎに振って先輩の刀を弾く。刀を弾かれた先輩が体勢を崩してしまふ。そこで、先輩は左手を男に向けて魔法を放つ。

部屋の中の大気が小さく振動して風が起こる。それは攻撃には全くならなかつたが男の動きを数瞬鈍くするにはそれで十分だつた。男が先輩からステップで離れる。

「チツ、やはり狭い……！」

先輩は舌打ちして呟き、先輩は再び風を起こす。先程よりも大きな風。部屋の中がどんどん荒れていく。テーブルや椅子は動き、棚が揺れる。小物は宙を舞い、全てが男へと飛んで行く。

男は強風に煽られ身動きが取れなくなっていた。

風を放った直後、刀を素早く鞘に戻す。「舌を嚙むなよ？」と私に呟くように言い、私の腰を抱えてそのまま持ち上げ、持ち上げた後は背中と足に手を回した。所謂、お姫様抱っこの恰好になる。そして、窓ガラスを叩き割ってベランダに出ると、そのままジャンプして寮（五階）から飛び降りる。

体が重力に囚われてどんどん加速していく。ひっ、と小さく悲鳴が洩れる。直後、口は開かないように真一文字に結んだ。

地面に落ちる直前、体に突き上げられるような衝撃が奔った。肺の中の空気は押し出され、苦しくなる。

下から自分に向かって風を起こして、着地の衝撃を減らしたようだ。無理矢理ではあったが、着地には成功した。寮の裏の森に向けて先輩は走り出す。基本的には立ち入り禁止。理由は簡単で熊などの獣が出るからである。

森に入っただけの場所にちょうど開けた場所があった。

これなら、戦うのに支障はほとんどない。先輩は私を下ろすと、刀を抜いて構える。すぐに男が追って来た。

「いや、まさか逃げるとはな」

「どうしても戦いにくかったのだな」

先輩はすぐに斬りかかった。距離を一気に詰めて刀を逆袈裟に振る。男はそれを跳び上がった。ただ避けただけではない。

跳んだ時、体を捻る事で体操選手のように回転したのだ。そして、先輩の真上に位置すると、先輩の首に向けてサーベルを振る。

先輩は反射的にしゃがむ事で避けようとするが、真上という事もあってほぼ無駄に終わった。サーベルは先輩の左肩に決して浅くない切り傷を作る。

すぐに左に跳んで離脱。男は着地すると、サーベルを上段で構えて先輩に襲い掛かる。

上段から振り下ろされるサーベルを受け流して先輩が反撃に出る。まずは左から袈裟掛けに刀を振り、軽くジャンプ。袈裟切りの勢いで先輩の身体は回転し、そのまま横薙ぎに一閃。

男は右足を軸に回転してカウンターに出ようとしたが、次の横薙ぎの一撃を予想していなかった為か、横薙ぎの一撃を捌ききれずにわき腹に受けた。スーツが切れて出血する。

そこで男は離脱するも、先輩の刀が襲い掛かった。

斬る、流す、突く、避ける、振るう、弾く。武器のぶつかる金属音、地面を蹴る音、空気を切る音で構成されるちぐはぐな音楽が奏でられる中、男は先輩に声をかけた。

「お前、本当に学生か？」

「そうだが、何かおかしいか？」

「いや、学生にしては武器を振るう事にためらいが無さ過ぎると思っただけだ」

「そういう貴様もまだ十代のようだが、ずいぶんと戦いなれているようだ」

「俺は特殊なんだよ」

「私も特殊なんだ」

「……そうかい。ま、どうでもいいことだ」

男が会適当に話に区切りをつけると、サーベルを中段に構えた。タイミングを計っているのか。しかし、それだけではない。男は今までよりも遥かに強い気配を纏っていた。

殺気。この一撃で殺す、そう周囲に言うかのように殺気を撒

き散らしていた。素人の私でも分かるほど濃い殺気。

中段に構えているのは、溜めて溜めて斬り込むためのものか。

先輩が何も感じていない筈が無い。そう思つて先輩に目を向けたとき、先輩は男と同じような雰囲気　殺気を放ち、真つ直ぐに男を見ていた。

一触即発の雰囲気。ちよつとした油断が文字通り命取りになる。

一秒が何十秒にも感じられ、それが十数秒続いた。そして、男と先輩の目が細まつた瞬間。

二人の姿が私の視界から消える。地面を蹴るドツ！という音の後、ガキン！と一際甲高い金属音。先輩と男は武器を振りぬいた格好のまま固まる。その次の瞬間。

先輩は肩から、男は胴から鮮血を撒き散らして倒れる。

決着がついた。そう思つたとき、私はすぐに倒れた先輩のもとに駆け寄つた。

第三十五話 刺客との戦い その3

—ヒナ・シロサキ—

先輩の傷は思ったよりも深く、血が止まらない。私はハンカチで傷を押さえながら治療魔法をかける。先輩の肩に手をかざすと私の手が淡く光を放った。

私も一応治療魔法の心得はある。しかし、あくまで一応使えろといったところで、その魔法を得意としているエリアには遠く及ばない。

治療魔法を得意としている人であれば、少し深い程度の傷なら数十分でほぼ完全に治療できる。しかし、それは不可能に近い。原因としては魔法を使っている間は高度な集中力が要求される事。また、それを長く続けなければならぬ事である。

たった数秒使っただけで、額に玉汗が浮かぶ。それが顔を伝い、気味の悪い感覚を覚える。しかし、それを拭く事すら許されない。

治療魔法は一歩間違えると人体を破壊しかねないのだ。理由は至極簡単で、人の内部に干渉する魔法だからである。

それに、一刻も早く止血くらいはしないとイケない。出血多量で死ぬ事だって考えられる。

数分後、血だけは止まった。よし、とひとまず安心。これで命にかかわる事はなくなっただろう。手の甲で額の玉汗を拭き取り、血まみれのハンカチで先輩の傷口を覆う。

そして、先輩を運ぶ為に精霊を召喚する。

目を瞑って集中。すると足元に淡く光を放つ緑色の魔法陣が現れる。

「我、汝の力を求む。汝が求むは我の力。我の力を糧に汝の力を我に。汝は風の化身なり」

足元の魔法陣が光を強く放ち、光の柱を立てる。その柱の中から獣の様な精霊が姿を現す。

獅子の力強い下半身。そして鷹の巨大な翼と上半身。

現われたのはグリフォンと呼ばれる精霊。人懐っこいが、頭は良く、力も凄まじい。

グリフォンの頭を軽く撫でると、その背に先輩を乗せてから自分が乗る。

行き先は……寮でいいだろうか。部屋であれだけ暴れば、騒ぎに気が付いた誰かが来ているだろう。できる事なら他人を巻き込みたくはないが他に行き先は思い浮かばない。

とりあえず寮に戻って紗月とこれからのことを相談しよう。

もう一撫ですると、グリフォンは走りだした。ある程度走ると翼をはためかせて空へと飛び立つ。

はずだった。

グリフォンがこれから飛び立とうというときに側面から攻撃を受けたのだ。衝撃に吹き飛ばされてグリフォンと私と先輩が地面を転がる。そのままグリフォンは消えた。

上体を起こして誰が攻撃してきたのか確認する。そこにいたのは、先程胸を斬られて気絶したはずの男だった。

服には血が滲み、肩で息をしながらもこちらを睨む瞳は鋭い光を放っている。素人の私にさえ分かるほど濃い殺気。

それにあてられ、背中からいやな汗が噴出する。それから足が震え、それが体全体へと広がる。

ヤバイ……。先輩はまだ気絶してる。時間を稼ぐくらいならできるかもしれないけど、正直なところ不安だらけ。

でも……やるしかない……！

ガチガチと鳴る歯を食いしばって押さえ、震える体に叱咤して集中する。

「我、汝の力を求む。汝が求むは我の力。我の力を糧に汝の力を我に。汝は業火の化身なり」

目の前に赤い魔法陣が現れ、それから同色の光が溢れる。光の奔流の中から竜が現れる。

トカゲのような頭。長い首。空を翔るための翼。太い両腕の先には鋭い爪。大地を踏みしめる太い足。しなる尾。

3～5メートルの大きな赤い竜が現れる。

召喚を終えた後、強烈な疲労感が身体に襲い掛かる。膝を着きそうになるが、必死に我慢する。

やっぱりレッドドラゴンを召喚するには魔力が……。

召喚魔法によって呼び出される精霊にはそれぞれの属性ごとに上級、中級、下級とランク付けがされている。

召喚する為の糧となる魔力によってランク付けがなされており、ランクが上がるにつれて召喚する為に消費する魔力は多くなる。

ただ、あくまで消費する魔力であって、強さではない。戦闘に特化した下級の精霊が中級の精霊に勝つケースもある。

しかし、中級と上級の間には存在する壁は厚い。戦闘に特化した中級の精霊でも、上級の精霊には勝てない。

そして、魔力消費量も中級と上級では比べものにならない。

下級の召喚によって消費される魔力を1～4とすると、中級は5～10。上級は50以上。上級の精霊を召喚するには、中級の5倍以上の魔力が召喚のために必要とされる。

ちなみに、私が呼び出したレッドドラゴンは上級で、グリフォンは中級。

レッドドラゴンが雄叫びを上げる。それが、勝負開始の合図だった。

男の姿が一瞬ブレてドラゴンの右の足元に現れる。ドラゴンはそれに対して、ビンタするようにして右腕を振り、鋭い爪をたてる。

「はっ！」

男は高く跳んで避け、ドラゴンの頭を斬りつける。着られた箇所から僅かに血が噴き出した。

「ガアッ！」

ドラゴンが虫を潰すように地面に左腕を叩きつける。ドガッ、という音が鳴り地面が僅かに陥没した。

男は右に身を投げて叩き付けを回避した。そして、再び斬りかかる。再びがら空きの頭へと攻撃。先ほど付けられた傷が更に広がる。

「ふっ！」

更に斬りつけた箇所を蹴って距離を取る。

ドラゴンはそんな攻撃は効いていないとばかりに距離を取る男に攻撃。ドス、ドス、と数歩走って左腕を振るう。それを男は跳んで避け、頭を斬りつけようとしたときだった。

ドラゴンは左腕を振る勢いを殺さずにぐるん、と体を回転させた。ぶうん、と鋭く風を切る音と共にしなる尻尾が男に迫る。

「はあああああつ！」

そして、それは男の胸を見事に捉えるかと思われたが、捉えられなかった。男は体をひねり、尻尾に剣を叩きつけたのだ。

衝撃で男が飛んだが、吹き飛んだのは男だけではない。ドラゴンの尻尾も吹き飛んだ。

「ギヤアアアアッ！」

ドラゴンが尾の斬れた激痛によって痛々しい悲鳴を上げた。

男が吹き飛んだといつても受けたのは風圧によるものだけで、実は軽く飛んだだけだった。

それも、すぐに体勢を立て直せる程度。

すぐに体勢を立て直すと男の姿が消える。再び私の眼が姿を捕らえたとき、男はドラゴンの頭に剣をつきたてていた。斬りつけていた箇所を根元まで埋め込み、それを引き抜く。

男は光の粒子となって消えるドラゴンを一瞥して、こちらを向く。それから、男が一步ずつゆっくりと歩いてきた。

もう、終わりかな……。

終わりを悟る。しかし、私は最後に叫ぶ。終わりという夜の闇を裂く明るい月の光が差し込む事を祈りながら。

「助けて！ 紗……！」

流星に、助けを呼ばれるとまずいと思ったのだろう。男が私の胸に腕を叩き込んだ。衝撃で意識を刈り取られる。

意識の途切れる刹那に、私は見慣れた黒い影を見た。

第三十六話 刺客との戦い その4

— 御坂紗月 —

俺は全速力で寮へと戻ってきたのだが、俺の部屋のリビングは物が散らばってゴミ捨て場みたいになっていた。

テーブルやソファはひっくり返り、小物が床に散らばっている。

小物を踏まないように気をつけながら部屋を見回すとベランダに続く窓のガラスが割れていた。これは、少し室内で戦ったみたいだな。それで、ベランダから飛び降りて外で戦っている、と。

俺は中途半端に開いていた窓を完全に開けてベランダに出る。ベランダから見えるのは普段は「進入禁止」の森。嫌な予感がする。

俺は迷わず部屋を飛び出て階段を駆け下りるところで足を止めた。早く行きたいところだが、アリアの無事を確認しないと。

アリアの部屋を訪れ、勝手に部屋に入る。悪いことだとは思うが、無事を確認するためだ。ヒナの方も気になる。

「アリア！無事か！？」

「な、何！？」

俺の必死な叫び（？）に驚いたような顔をしてアリアが玄関に駆けってきた。

アリアは全然無事だった。むしろ、何があったのか、という顔をしている。

「い、いや、無事ならいいんだ」

「……そう。深くは聞かないけど。あのさ、その……ちゃんと帰ってきてね」

「……ちゃんと、ここに戻る。約束だ」

俺は子供が指きりするように小指を差し出した。アリアは少し固まってから、おずおずと小指を寄せていって、それを絡めた。

『指きりげんまん嘘ついたら針千本飲ーます。指きった』

決まり文句を言って、指をきった。俺も若干恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じた。こんな事をしたのは十数年ぶりだ。アリアも恥ずかしさからか若干顔が赤い。

俺は手をヒラヒラと振ってから、アリアの部屋を飛び出し、ヒナがいるであろう森へと向かう。階段を駆け降りて寮の玄関から外に出ると、裏に回って森へと入る。整備されていない道を走っているとき、巨大な生物の痛々しい悲鳴を聞いた。

とにかく、悲鳴の聞こえた方に走っていく。

途中で地面から飛び出るように生えた木の根に足を取られそうになったり、鋭く飛び出た枝が服に引っかかりたりしたが、気にせずに走る。

「助けて！さ」

その悲鳴を聞いたとき、広間に出た。

ちょうどヒナを気絶させたところらしい。スーツを着た銀髪の男の肘が彼女のか細い胸に突き刺さっていた。

俺は足を止めることなく、むしろ、更に加速して男に近づく。そして、その腹に跳び蹴りを叩き込む。

男は俺の奇襲に反応しかねたようだった。男が派手に地面を転がっていく。俺は地面に崩れ落ちそうになるヒナを抱きかかえる。ギリギリ間に合ったみたいだ。後一步でも遅かったならば、ヒナは連れて行かれたか、殺されていただろう。

地面を二転三転としていた男が止まると、よろよろと立ち上がる。

抱えたゆつくりとヒナを地面に降ろして寝かせ、木刀を展開して構えた。

男の姿が一瞬ブレた。次の瞬間には俺の真横に現れ、剣を振り下ろす。それを木刀で防ぐと、つばぜり合いになる。

俺は男が力んだところを狙って木刀を傾けて攻撃を流し、回し蹴りを打つ。鋭い打撃音が響き、男の体が吹き飛ぶ。そのまま二転三転と地面を転がるが、男は立ち上がった。

《御坂流剣術 壱ノ型 幻影》

追い打ちをかけるように幻影で無防備な背中を襲う。

「せいっ！」

男は高く跳んで幻影を回避。同時に落下して俺に攻撃を仕掛ける。俺は両手で木刀を持って防御の構えをとる。

落下の勢いを乗せた剣が俺を襲った。

俺は木刀を剣の刀身に横から当てるようにする。そして、木刀を傾けて攻撃を流す。

しかし、流しきれず剣が服を切り、肌に裂傷ができた。幸いにも傷は浅く、僅かに血が滲む程度で済んだ。

危ねえ……。これをまともに受けていたら、木刀と頭が真つ二つに斬られて死んでいたことだろう。

男は着地時に脚を曲げて衝撃を逃がす。さらに、足を払られて体が倒れる。地面とぶつかる寸前、どうにか受身を取ったが、男に胸を蹴られる。

「がっ………！」

蹴られたボールのように地面を転がる。体が地面に打ち付けられ、全身に激痛が走る。その度、俺はぐっ……。とくぐもった悲鳴を上げた。

地面を転がるのが止まると、咳き込みながらも立ち上がるうと体に力を入れる。

何とか立ち上がり、即座に攻撃に転じる。

「月閃！」

男の懐に飛び込んで木刀を三日月を描くように振り上げた。狙うのは剣を握る右腕。狙い通り木刀は右腕を打ち、男は剣を手放す。続いて左手で拳を握り、顎目掛けてのアッパーを放った。顎を打たれ男が怯む。

「はああああ……！！」

俺は木刀を捨て右拳に力を溜め込み、男の胴に右拳を打ちこむと同時に溜め込んだ力を解放した。

《御坂流剣術奥義 其ノ壱 穿孔》

獰猛な獣のような強烈な闘気が男に喰らいつく。

男は数メートル空中を滑った後、地面を転がった。闘気は確実に意識を刈り取ったようだ。男はピクリとも動かない。

ほっ、と一息を吐いた次の瞬間、強烈な倦怠感が俺を襲う。

俺は倦怠感を我慢して、先輩をおぶってヒナは脇に抱えるようにしてふらふらと寮に帰った。

俺は寮のヒナの部屋に戻った。生活感は何もないが、ほこり被っているわけではないので、ゴミ捨て場のような俺の部屋よりは遙かにマシだ。

俺は各部屋に備え付けてある二つの個室に入り、ヒナと先輩をベッドに寝かせる。

とりあえずいったん休憩だな……、と思うと体にかかる倦怠感が

さらに増幅した。ふらふらと千鳥足でソファに近づき、仰向けに倒れこんだ。

直後、俺の意識は高所から突き落とされたかのように高速で沈んでいった。

一ヒナ・シロサキ

目を覚ますとそこにあつたのは見慣れた寮の白い天井。上体を起こして部屋を見回すと小物なども置かれておらず、まるで生活感がない。

この情報だけで自分が何処にいるのか分かった。この学生寮でまるで生活感のない部屋は多分私のだけだ。

とりあえずベッドから降りようとすると腹部にビリッ、と痛みが走る。思わず殴られた鳩尾辺りを押さえた。

一瞬の痛みが治まると、とりあえず部屋を出よう、と開いたままの扉をくぐる。

玄関の扉はわずかに開いたままで、靴も乱暴に脱ぎ捨てられていた。リビングにはソファで死んだように眠る紗月の姿があつた。

玄関のありようでどれだけ疲れたのか分かった。扉を閉める元気もなかったのか。大きな傷はなかったが、無数の打ち身それから浅い裂傷があつた。服も切れていたり、血がにじんでいたりと傷んでいた。

助けたり、守ったりする事を彼は言わずとも私にしてくれ。それを望み、喜ぶ自分がいる。でも、無茶はして欲しくない。

それが、矛盾していることはわかつている。紗月は私を守ろうと無茶をする。そうして守られる事を望んでいる。

その時、私の中で一つの疑問が浮かび上がる。いつまで、私は守られる立場でいられるのか。

紗月の隣に私以外の人が立つまでだろうか。それとも、私か紗月

どちらかが死ぬまでか。

後者である事を私は望んでいる。後者であるという事は私が彼の隣に立っている事と同義だから。でも、前者かもしれない。彼の隣に立たんとする人は何人もいる。

後者を実現するためには、その人たちを押しつけてでも隣に立たなければならぬ。

そう思うと自分の中の黒いものがふつつつと湧き上がってきた。事実を作れ、他よりも優位に立て、そう聞こえた気がした。

寝息を立てる紗月の唇に自分のそれを寄せていく。近づけていくにつれて顔が熱を帯び、心臓が高鳴る。自分の行動が抑えられない。あと数センチでそれが触れ合う。その時、紗月の眉がピクリ、と動いた。そして、小さく呻き声を上げた。

「うん……？」

それをきっかけに私の理性が戻り、私はさっ、と紗月の顔から離れる。恥ずかしさで顔から火が出そうだ。

紗月は目を開くと、軽く伸びをしてから上体を起こした。

「ヒナか。体は大丈夫か？」

「う、うん。何ともないよ」

「それなら良かった。俺も身体張って頑張った甲斐があるってもんだ」

そういつて紗月は満足そうに笑った。それを見て、さらに顔が熱くなるのが分かった。

私の顔の火照りに気付いた紗月が疑う様に体調について聞いてきた。

私の額に手を当てるのも忘れない。

「ほんとに大丈夫か？さつきからちよつと顔赤いし、額もちよつと熱いぞ？」

「だ、大丈夫だから！」

「そっか。ま、体調が優れなつたらちゃんと言えよ」

「う、うん。ありがとう」

私の額に当てられていた紗月の手が離れる。少し名残惜しかったが、悟られぬよう余所を向いた。

その時、バツの悪そうに頭を掻く先輩の姿を視界にとらえた。

その目は言っていた。

いい雰囲気のなか申し訳ない。ただ、ごちそうさまでした。と。

先輩に見られていた。その事実を知り、更に顔が熱くなる。もう耳まで茹でられたタコみたいになっていることだろう。

私が固まっているのを見て紗月も釣られるように先輩の方も向く。恥ずかしさのあまり呆然としていた私にはそれからしばらく何も頭に入って来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107i/>

異世界魔法学園奮闘記

2011年11月16日16時48分発行